女鑑

第拾叁年第拾四號
（明治三十六年[illegible]發行）

口繪

清水谷高等女學校職員及卒業生
清國女學生と下田歌子女史
女鑑兼題投稿優等者（其三）
京都看護婦學校及產婆學校
讃岐琴彈公園

重要目次

女鑑 第拾柒年 第拾四號 目次

定價
一册 金拾錢
六册三ヶ月分 前金五拾七錢
十二册半年分 前金壹圓拾錢
廿四册一年分 前金貳圓拾錢
全國無郵送料

廣告料
五號活字廿三字詰一行 金三拾錢
半頁 金八圓
一頁 金拾貳圓
表紙一頁 金拾六圓
（色刷は特に御相談に應す）

明治三十六年七月十四日印刷
明治三十六年七月十五日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 渡邊森一
東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人 並木貞雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

胃病黄疸之特効薬

ハマナ

調胃丸

全國各地有名ノ藥店ニアリ
御最寄ニテ御求メヲ乞フ

取次ナキ地ハ郵送致シ候間
代金収入ニ銭印紙ヲ乞フ

七日分金廿銭

本家 東京芝區七軒町 神明社内

濱名合名會社謹製

傳染病研究所、養生園 東京病院其他各病院御用

アルボース案内

◎消毒 傳染病豫防にはアルボースを種々に用ひよ是完全の消毒也

◎防臭 便所便器不潔の場所等へアルボースを撒け能く惡臭を止む

◎洗濯 衣服を洗ふにアルボースを用ひよ蚤虱等の蟲のたかるを防ぐ

◎入浴 アルボース石鹸を入浴の時用ひよアセボニキビ等を治す

◎頭髪 禿頭病を患ふる者はアルボースにて洗へ毛の抜けるを防ぐ

◎毒蟲 蚤蚊蜂等の刺されたる時はアルボースを付けよ痛痒を止む

◎植物 アルボースは蟲を殺す効あれば植物の害蟲を除くに用ひよ

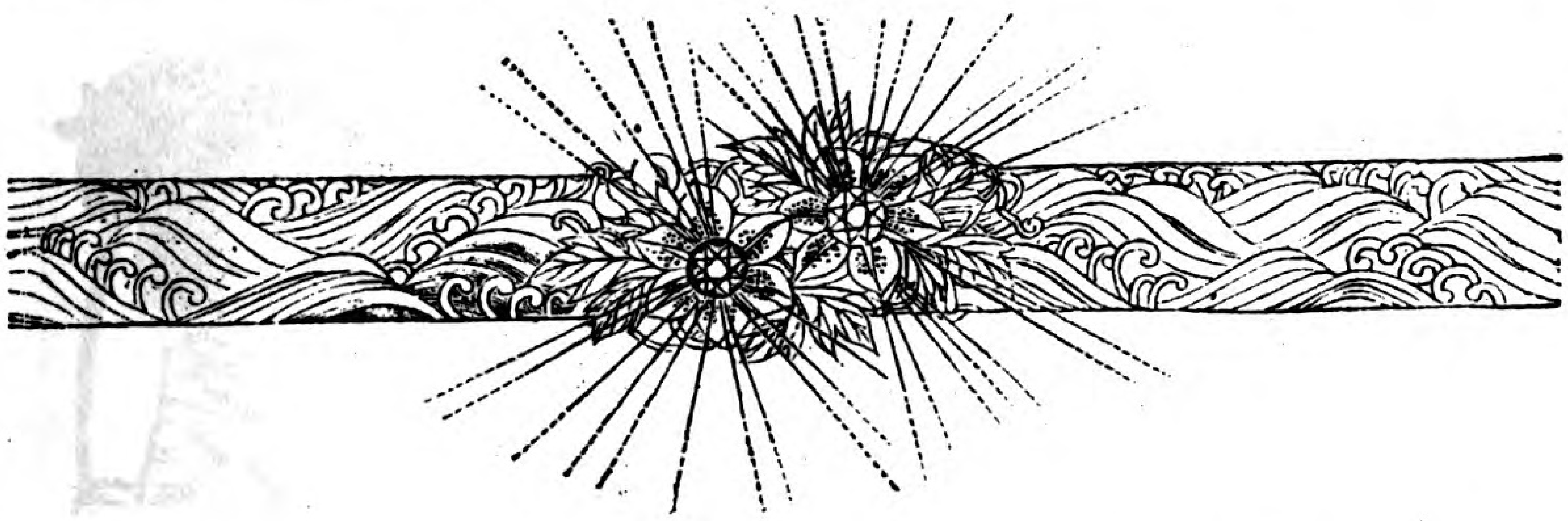
◎疵所 突疵切疵等はアルボースにて洗へ一時しみるとも早く癒ゆ

定價●原液一斤入金三十五錢●通常液一斤入金十三錢同二斤入金二十錢、同卅五斤入金二圓●石鹸大形金十三錢、同小形金八錢

東京深川區東扇橋町五番地 扇橋製薬株式會社

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候





貴金製金具附帶留

花も錦も夫々の取合せありてこそすべての價あれ帶美はしくとも帶留佳ならねば裝ひとゝのはず茲に本店新製の帶留は諸大家の意匠に係る斬新の圖案を其儘黄金白金銀赤銅朧銀等に彫刻或はダイヤモンド眞珠其他の寶石類を箝入し紐は鹽瀬地の縫ひ取り又は金襴錦朱珍等いづれも美術の精巧を極はめたる品なれば霞の帶の引もきらざる御注文あらんことを

東京市京橋區尾張町

白牡丹本店

松田幸治郎

金製彫刻金具付價　十二圓十五圓廿圓卅圓以上六十圓迄

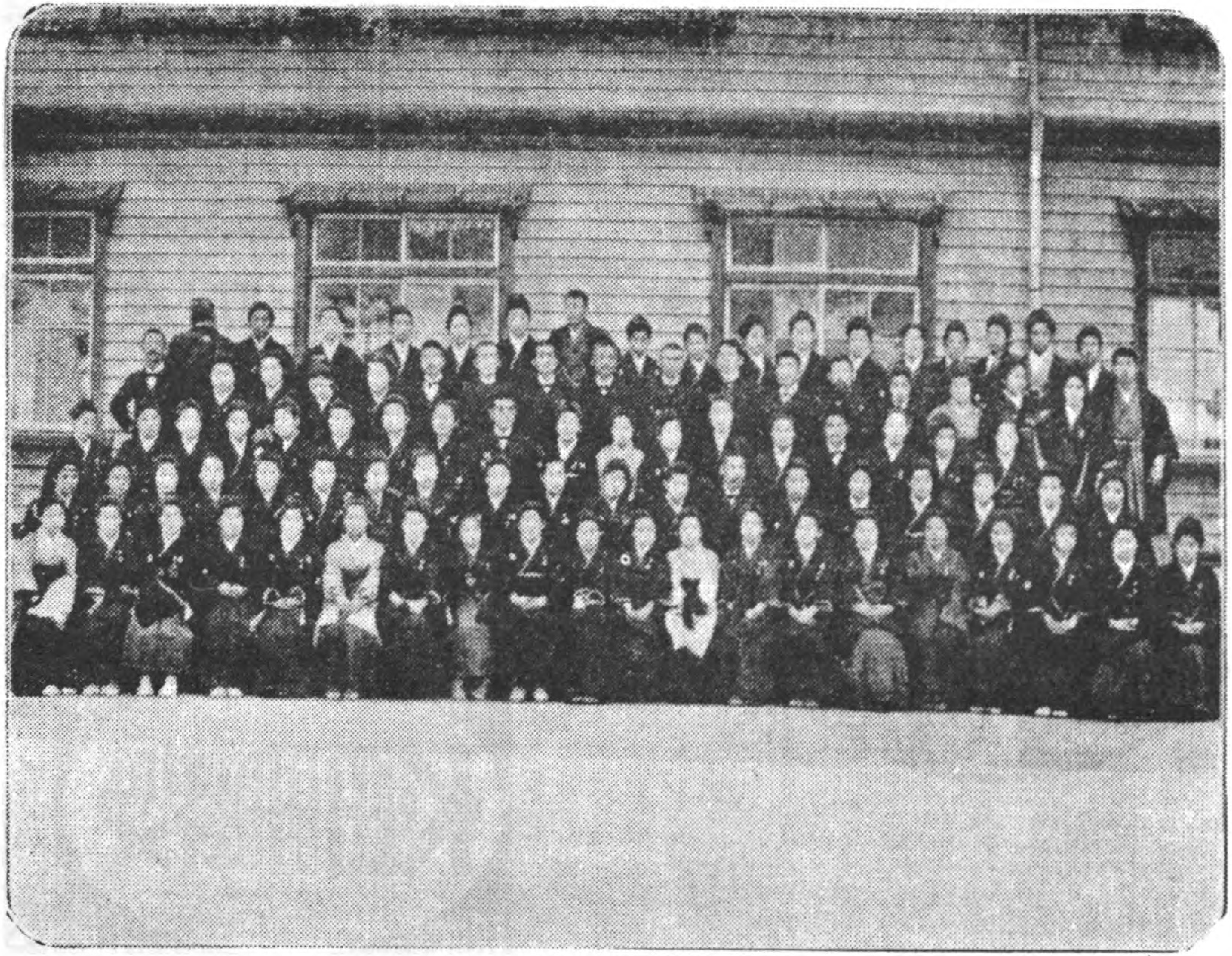
寶石入金具付之價　二十圓三十五圓五十圓以上一百圓迄

銀赤銅朧銀 並彫刻 金具付之價　三圓五圓六圓八圓以上十圓位迄各種

本店に於ては市内の分支店共通仕候小間物切手發賣致候間御用命奉願候



清國女學生と下田歌子女史



大阪府立清水谷高等女學校職員及卒業生



部　商



胃弱諸症
根治之良劑

胃散元祖
東京
太田信義

胃弱症の特効劑にして如何なる重症も一二週間持續して服用すれば必ず疾苦を忘れ速に爽快を得る神妙なる良藥なり

主治効能

留飲、胃痛、胃痙攣、胸痞、飽食、食傷、宿醉、船醉、惡心、嘔吐、食欲減損等に用ひて卓効あり故に此藥を持藥として毎食後に服用すれば消化機能を盛ならしめ食物胃中に停滞せず自然胃痛腸加答兒症に罹る事なし

東京呉服町

胃散元祖　太田信義謹製

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

衛生と經濟的

腋下流汗採挿入器



高尚

優美

本器は馥郁なる香を放ち意匠優美腋下に挿入するも之を感せず如何なる多量の汗もよく吸收し衣服浸蝕汚損を防ぎ且腋臭を豫防し根治法を施し得る

男女を問はず夏季の必需品なり

貴婦人、令嬢、女學生腋汗甚しき御方腋臭症之人本品の如何に有益なるかを御試しあれ

定價　一組金四十五錢送料不要

一切手代用二割増着金直に送る

東京市京橋區東傳馬町三丁目十二番地

スミレ商會

珍柄

フランネル縞セル

御召セル　夏ヒザ掛

白毛布　縮緬肩掛

其外毛織物各種

●弊店販賣の洋織物は特に織元へ製させ最も品質を撰び時々の流行品取揃へ廉價に販賣仕候間多少共御用向被仰付度尚市内は御便宜を相計り電話又は郵便にて御申越被下候ば直ちに見本持參御伺可申候但し地方はフランネル縞セルに限り御申越次第見本御送遞仕候

東京市京橋區南傳馬町二丁目三番地

山城屋號

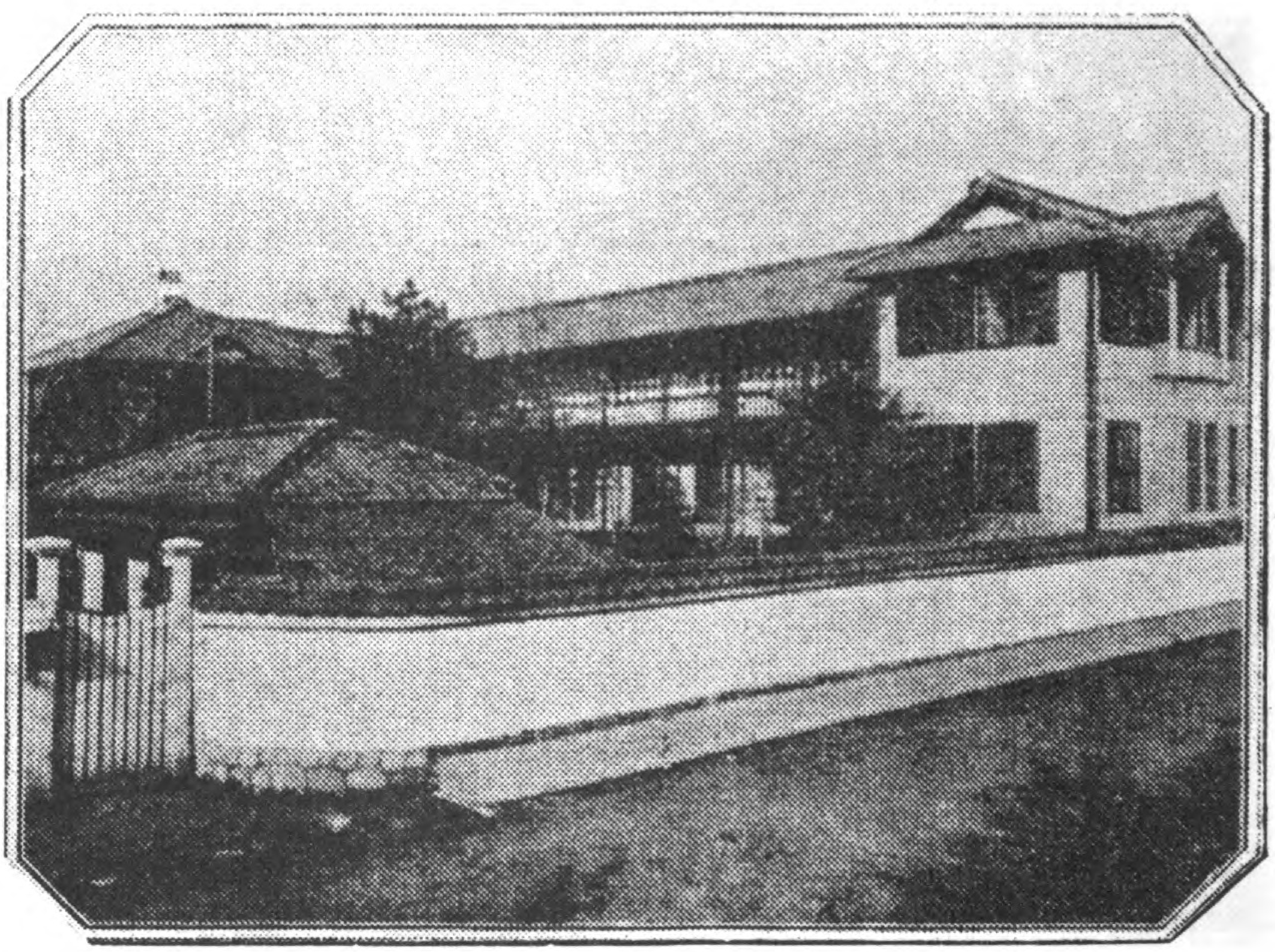
各國毛織物卸小賣商　**杉浦幾太郎**

電話本局　三一八五番

女鑑兼題投稿優等者（其二）



福原董子孃



京都看病婦學校產婆學校

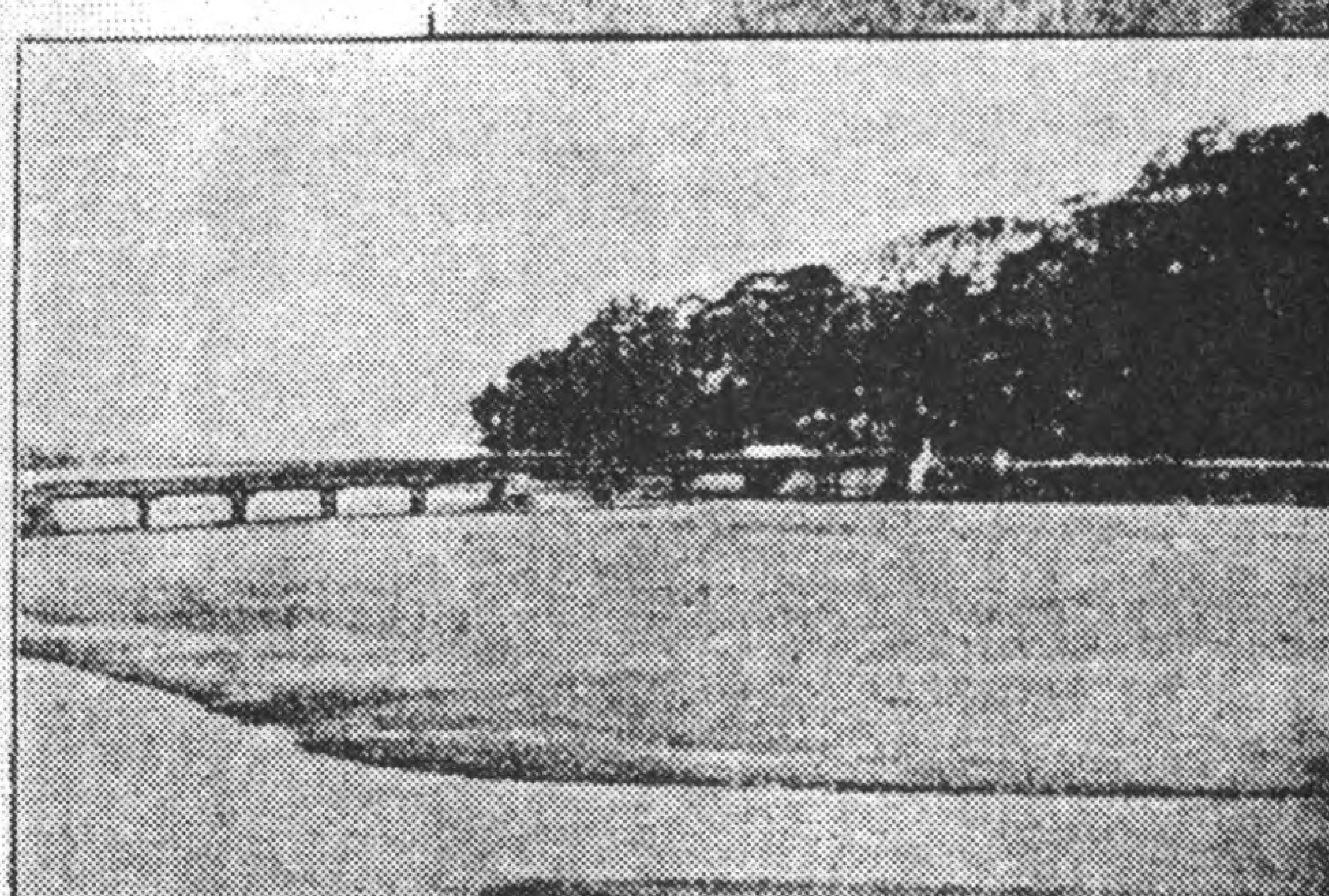
讃岐國琴彈公園勝景



象鼻巖眺望



琴彈山下松林



三架橋遠景

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

品質純良



女鑑　第拾參年第拾四號

女子成功論（上）

可憐なる少孃等よ、降り積る雪の晨には、脛を埋めて講堂に上り、降り來る雨の夕には、裳を濕はして校門を出で、歸り來りて、書窓また燈火に對し、孜々として勉學に餘念なきは、豈甚だ感ずべきにあらずや。況んや故郷を距る數百里、戀しき父母に離れ、懷かしき兄妹に別れて、山河遙かに帝都に遊學し、螢雪の苦學を積みて、遖れ明治の女生たるに耻ぢざらむとする人々に於てをや。アゝ此の可憐の少女子は、みな他日の成功を期して、臙脂と白鉛とを廢て、華鈿と金環とを棄て、綾羅と錦繡とを脱てゝ、その一身を學事に委ねつゝあるなり。予輩は彼等少女子の愛すべき風姿を見て、その感ずべき心事を思ふ毎に、出來得べくば一日も速に榮譽ある成功の冠を以て、彼等少女子の頭上に飾らむことを望むの情なき能はざるなり。然らば則ち成功とは何ぞや、との問題を慎重に研究するは、尤も今日に必要にして、且つ諸孃子に適切

なることならざるを得ざるべし。

學校を卒業することは成功なるか、然り卒業は成功に於ける上層の階段たるを失はじ。而かも未だ以て成功を全うしたるものとはいふべからず。然らば下田歌子女史の如く女子敎育界の牛耳を執るか、又は鳩山夫人春子の如く地位あり學識ある人を夫として、高尚なる家庭を作り、傍ら社會問題に奔走するにあらずんば、成功とはいふべからざる乎、是れ一二卓越せる婦人に望むを得べきも、滿天下の女學生に向つて求むべからざるものなり。若し學校を卒業するのみを以て、成功なりと思ふものあらば、其の過ちは及ばざるにありて、九仞の功を一簣に欠くの憾みなきを得ず。又た、歌子女史若くは春子夫人たるを得ざれば、成功ならずと謂ふものあらば、其の過ちは過ぎたるにありて、恐らくば容易に其の目的を達して、堂に上り奥に入ること能はざるべし。及ばざると、過ぎたるとは、共に中庸の道にあらず。中庸の道にあらざるものは、以て標準とするを得ざるなり。乞ふ試に他性なる男子に就きて論じ、然る後予輩の認めて女子成功の標準とするところのものを説かん。

成功といふことを以て、大學者となり、大事業家となり、大富豪となり、大政治家となるこ

とのみと解釋せば、世上果して幾許の成功者として見るべきものあるか。乃ち其餘の多數なる大學者ならざる、大事業家ならざる、大富豪家ならざる、大政治家ならざる多くの人々は、みな失敗者なりといはざるべからず。斯の如くんば成功なる名稱は、恐らく今の少年子弟の耳目を眩惑して、遂に其の心志を沮喪せしむるなからむや。

カーチギーあらざれば、事業家として、成功したるものと言ふ能はず、根本博士井上博士ならざれば、學者として、成功したるものと言ふ能はず、三菱の如く又たロスチャイルドの如くならざれば、富豪としての成功と稱すべからず、チャムバレイン若くは伊藤侯爵たらずんば、政治家として成功したるものといふを得ずとせば、成功なる名目の下に集注せる少年客氣の輩は、學者として普通敎員たるを潔しとせざるべく、事業家としては、事務員たるを甘んぜざるべく、富豪とならむとしては、自ら投機冒險の志を懷き、政治家たらむとしては、進んで狂奔熱躁せざれば已まざるべし。抑も斯の如くにして遂に失望せざるもの知らず幾許かあるべきぞ。而して失望は失敗とあり、失敗は失行となりて、大なる成功を爲す能はざると共に小なる成功をも見る能はずして、遂には世を厭ひ、人を怨むに至るべきは、蓋し必然の勢なるべし。

是れ徒に成功の名目に酔うて自ら誤まるものといふべきのみ。

工匠の徒弟にして、建築造家の學を修め、技藝精巧にして能く其の職務に勵み、世間の信用をも博して、其業やうやく繁昌せんには、工匠として成功したるものといふべからざるか。商家の子弟にして、商業學校を卒業し、商店に雇はれて、手代となり、番頭となり、支配人たるに至らば、商賈として成功したるものといふべからざるか。敎員となりて、初等又は中等の敎育に從事し、多くの男女學生を敎養し、孜々として他日有用の器たらしむるは、敎員として成功したるものにあらずや。人各々其の業務とするところのものを全うし、其の目的とするところを達し、入つては獨立の生活を爲して、累を他人に及ぼさず。出でゝは國家社會の一員として、能く其の義務を盡すを得ば、乃ち成功者たるに於て何の不足かあるべきぞ。何ぞ必ずしも身を投機の業に投じて大金持となり、風雲に叱咤して大豪傑となりて、然る後始めて成功といふべけむや。故に予輩は嚴肅なる意義に於ける紳士、眞成なる意味を有する公民たるを以て、男子成功の標準といふを以て、至當にして適切なる解釋なりと信ずるなり。此の標準を向上して逸出したる大學者、大事業家、大政治家、大富豪家の如きは、固より大なる成功を以て目す

べきものなれども、さりとて此は萬民の齊しく希望して得らるべきものにあらざれば、則ち今の青年男子の凡てに向つて希望すべきことにあらず。
男子に於てすら斯の如しとせば、女子の成功といふもの丶大學者、大教育家など普通以上に遥かに卓拔したる者のみにあらざるは以て知るべきにあらずや。ア丶可憐なる少孃が、女學校を卒業して、芽出たく其の家郷父母の家に歸るに及び、如何にして多年習得したる教育に據りて以て、名譽ある成功の冠を戴くことを得べきや。男子成功の標準を以て、前述の如く紳士公民たるにありとすれば、女子成功の標準は、此等紳士の妻たるに耻ぢざる婦人となり、又は公民の母たるに負かざる親となるにありといはざるを得ず。普通女子にして、叨りに此の標準を超えて、大に爲すことあらんと期するものは、志は洵に欽すべきも、その多くは失望となり、失敗となりて了るべきは、恐らくまた男子の場合と同じかるべき也。(未完)

論説



夏季休業中の女學生

女子高等師範學校教授　槇山榮次

女學生は夏季休業中には如何なる事をして生活せば宜からうかと云ふに、此には種々考究すべき點もあるであらうが、今其中重なるもの二三に付鄙見を述べて見る積りである。

一體男子であれば夏季の休暇を利用して旅行を企てるとか、登山を試むとか、種々活動する範圍が廣くありますが、女子に對しては中々斯様には望まれませぬ。夫れで世間には能く學生旅行の効益を説くものがあるが、是は女子に對しても適當であるかといふに、予の考では現今の社會上の狀態より推して見て、之を實行することは餘程困難でもあり、又弊害も起ること〻信ずるのである。併し之も畢竟程度の問題に歸着するのであるから、或度までは之を實行せしめて何の不都合も生じはすまいが、大體よりいへば、今日日本の情態では餘り之を奬勵することは得策でない、特に女學生の單獨旅行などは或は利益よりは、寧ろ弊害が多く生じはせまいかと思ふのである。

然らば女學生は此の長き休暇を如何にして經過すべきかと云ふに、其多數は先づ久々で故郷に歸省するのであるから、種々愉快な事や珍奇な事も澤

山あるであらうが、夫れにつけても此休暇を無益に經過せぬといふことは肝要である。固より過度に勉强することは休暇の主旨ではあらぬけれど、さればとて何等之を利用する所なく、徒らに日月を消費するのは甚だ宜しからぬ事である。然れば如何なる事に之を利用せば得策なりやといふに、第一實地の練習即ち家事經濟等に關し實際につきて應用練磨を試みることである。兎角久し振りで歸省したといふ譯で、女學生諸子は一般に家事向には毫も頓着せぬといふ風が見えるが、是は實に好ましからぬ仕方で、女學生には屹度避けねばならぬ所であると思ふ。抑も家事上の補助は啻に學校に於ける課業の實地練習たるに止まらず、其動作が過度に身體を勞する弊なきより、一方より見ればまた精神上の保養ともなり得る譯で、至極有益なことである。

家事の練習に次で必要なことは、思想を涵養すること即ち讀書をする事である。一體女學生は平素學校の課業にのみ逐はれて居るやうな傾向あるので、成るべく廣く世間一般の書籍を讀んで其思想を豐富にするといふ事は決して實行のならぬ事でないし、又男子と比較すれば其學んだ智識を充分に應用するといふ事は稀であるからして、女學生は夏期休業の如き好機會を利用しまして可及的思想を廣め、應用力を練磨することは大に肝要である。單に徒然の慰みに讀書するといふ考でなく、之に賴りて自己の品性を磨き學識を高めるといふ目的を以て熟讀玩味するやうに努めねばならぬ。然らば何種の書類は休暇中の讀物として適當なりやと問ふに、之は其學校の種類、各自の特性、將來の目的等に因りて一様には參りますまいが、要するに智識の發達上にも、一身の修養上にも有益

にして趣味ある書籍を撰擇せねばならぬ。女子は一般に小説稗史類を讀むことを嗜好する風あるが、女學生としては此等に耽ける如きは勿論賛成は出來ない。

次に休暇中都下に居る女學生の爲めに一言注意せねばならぬ。前陳せる如く歸省する女學生は、久々で父母の膝下に近くので、種々珍しき事も愉快な事もあるであらうから、從つて不良の方面に其心を奪はるゝやうな機會もあるまいけれど、都下に留つて居る女學生は其境遇異なるを以て特に注意せねばならぬ。夫れは外でもないが、所謂小人閑居すれば不善を爲すで、人間は閑逸になると種々不良の念も起るものであるから、女學生も矢張り學課なく閑散なるにつれ或は意外の誘惑に襲はれぬとも限らぬ。されば休暇中は特に此點に注意を加へ、何なり或る一定の目的を立てゝ仕事をすることが必要である。元來夏季休業の目的は、暑氣の強くして、疾病抔の發生せんことを慮り、身心を保養せしむる爲め與へるのであつて、決して人間に必要なる業務までを停止せしむるとの意味のものでない。否寧ろ休暇中は各人思ひ〳〵の業務に從事することが出來る。乃ち個人的の作業は容易に營まれ得る時機であるから、此點より見ても、此場合女學生諸子が或る一定の目的の下に適度の仕事を爲さゞるべからざる必要がある。

倘ほ最後に一言を加へたきは、女學生は夏期休業中は格別其品行を愼まねばならぬといふ事である。近來女學生に對しては種々世間の批難もあるので、其が爲め今日でも女子には高等の敎育は不必要なり抔いふ偏頗な意見を抱る者もないではない。併しながら之は勿論女子敎育其者の罪ではなく、唯だ一部女學生の品性墮落せるより誤解され

たのであらうと思ふ。夫れにつけても女學生たる者は大に其品性を琢磨し、一般世人をして女子教育の眞價を認識せしむる責任があるのだ。而して事此に至らしむるには、各自直接社會に接し、世人をして其實際生活の狀態を知らしむることは必要であるので、之には夏期休業を利用することは最も好都合ならんと思はれる。元來今日の如く女子教育の隆盛に赴きたるは、其父兄たる者が實際女子教育の眞價を認めて此に至りたるものか否かは稍々疑問の存する所で、或は其子女の希望切なるが爲め止むなく入學せしめ、時には單純なる模倣心に依て登校せしむる弊風のないでもない。かかる現象は一般女子教育の爲にも、又女學生諸子の爲めにも痛歎せざるべからざる次第である。予が夏期休業中女學生に關する希望の大畧は先づ斯樣なものである。

日本女子の力量

岸本宗道

男子に於て社會上力量の必要なると共に、女子に於ても力量は甚だ必要なりとす。若し女子にして力量なく、無能無力、男子の膝下に屈從し、補益の任を全うすること能はずんば、啻に女子の地位の落下するのみに非ずして、直ちに國力の消長盛衰にも關せずんばあらざるなり。社會は男子にも女子にも共に同樣に最も適當なる力量あるを要す。男女共に力量の發達せる國は强盛幸福なるを得可く、男女の力量隔りたる國は、必ずや衰頽非運に立ち至るなり。この故に國家は、男女力量の均等を畫せざるべからず。今日女子の教育盛にして、男子と同じく百般の學術技藝教へ施さゞるは無く、專門學校としては女子の大學校既に設

論說

立せられ、文學其他の女學士を見るは近き將來にあらんとす。これ予の大に賀する所なり。然りと雖も、如何に女學士輩出すとも、そはたゞ形式に止り、精神氣魄力量の男子と肩を並ぶるに足る者を見るは難からん、女子の力量の薄弱なる今日に於て、其の多きを望むは、望むことの誤れるなり。然り。望むことの誤れるなり。然りと雖も、現代女子の英傑無き故を以て、我が國の過去に對して、歴史に對して、女英傑の輩出を望まざるを得ず。過去に於て我が歴史は、日本女子の男子と同行比肩するの力量あるを證明して餘りあり、過去に於ける日本女史の國家に表したりし功績の偉大なりしを思はゞ、未來の女子の地位力量は之を推知し得るに難からじ。

抑も、我が國世上には、男尊女卑の風なく、同行比肩の姿なりしなり。伊弉諾伊弉冊二尊相愛する

一點野卑の風なく、温良恭謙にして男女の儀範と爲すに足る。大日孁尊は一女體を以て六合に照徹し、蒼生其の光を仰ぎ、大詔一發して上下君民の分定り、皇統緜々として天壤と共に窮りなきにあらずや。天孫降臨の時鈿女命の先驅せるあり。神武東征の女軍あり。崇神帝の時には武埴安彦其の妻吾田媛と共に兵を起し、軍を分ちて夫は山背より、妻は大坂より帝京を襲はんとせる時、倭迹々日百襲媛命、神敎を奉じて帝の施設を指導し遂に之を誅し給へり。景行帝熊襲を征するに當り、豐の前後は女人の領有たり。前州には神夏磯媛有りて一國の魁師たり、後州には速津媛ありて地方の君長たり。皆簞食壺漿して皇軍を迎へ奉れり。神功皇后の英武なる帝と共に軍國の事を倶にし、内戡定の功を擧げしのみならず、外韓國を征服して空前絶後の偉勳を立て、攝政七十餘年の久しき

萬機を總べ、威德を輝かしたるが如きは、古今東西有史以來絕ねて其の比類を見ざる所なり。

彼の紫式部の博識端厳なる人格に於ても男子に比類なき人なりしなり。其の源氏物語五十四帖の如きは結構精妙、文詞幽艶、才思の汪溢せる我が文學史上、絕代の作にあらずや。

また彼の春日の局の、夜强盜二人の入りしを刀を揮ひて立ろに斬りたる、秀忠の夫人國千代を愛し、儲闈闃如たる時に當りて、陽に伊勢神宮に詣ると稱し、駿河に入りて家康に見え竹千代の危殆を訴へたる、其の病革まるや、家光親ら藥を持して之を飮ましめ、其の請ふ所を問ふ。泣いて曰く、老妾幸に殿下の壯大にして天下の政を秉るを見、恩澤老妾に及び、爵二位に叙せられ、賤息正勝亦厚恩を荷ふ。榮光極れり。復何ぞ敢て請はん。且つ藥は殿下手親ら之を賜ふ。豈に服せざるべけんや。乃ち之を啜ること少許にして悉く唇より吻出し、一滴だも喉に下さず。恩意に悖らず、誓言を食まざるがためなり。あゝ何ぞ勇なる。あゝ何ぞ智なる。あゝ何ぞ忠信なるや。かくの如き精神氣魄は有髯の男子をして羞死せしむるものにあらずや。

有史以來前後三千年、其の間政事に戰亂に、或は文學に敎育に宗敎に技藝に幾多の女英傑を出せること海外に其の比を見ざる我が國今日の有樣如何を看るに、德川時代に比しても足利時代北條時代に較せんも、其の他何れの時代に對するも落寞たる感無くんばあらず。女英傑の乏しきを感せずんばあらず。是に於て予は日本今日の女子の力量の落下せるを轉た慨せずんばあらざるなり。

女子にして其の力量を社會に現はすは啻に女子の榮譽なるのみに非ずして、日本社會の榮譽なり。

女子の力量社會に現はれて、女子之が爲めに振起す可く、國家之が爲めに強盛に至る可し。今日の女子にして力を學藝に致すもの、偏に古今東西の歴史に鑑みて、天晴力量を社會に現はさゞる可らず。優偉の人物とならざるべからず。此の點に於て予は今日の女子に三思を促さんと欲すること切なり。あゝ今日の女子、それ勉めよや。

◎梅の料理(一)

梅子羊羹 梅子を取り能く洗ひ、湯にて煮立て二日ばかり水中に晒して酸味を去り種子を除きてすりつぶし布篩にて濾し、心太を味淋にて遠火にかけて煮解し又た葛粉を解き(梅一升に葛粉五勺の割)右三種を能く混交て清淨なる箱に流し込み冷却したる後能きほどに切るなり



美人の始祖(下)

栗島狹衣

衣通姫といふ詞に解釋をつけると、單に美容が灼然として衣を透したからといふまでに止るのであるが、これには又說ありて、衣通姫の御名は美人の普通名稱といふ字であるそうだが、その證據には當時二人の衣通姫があつたのでも判る、其二人といふのは乃ち此弟姫と允恭帝の皇女輕大郎女其

人であるのだ、猶又萩野博士の說によれば、聖武帝の后安宿媛を光明皇后といふたのも、衣通姫といふ和語を漢樣にいふた丈けで、國音にかへせば同じになる、又源平盛衰記に平相國の息女近衛基通公の北政所は非常な美人であつたから、父の相國も衣通姫と異名を負せられたので、基通公も同じやうに仰せられたが、御自分もそう心得てゐて、衣通姫と仰せらるれば唯々と返事を遊ばしたといふ事が書てある、これで考へても此名が美人の普通名詞であるべき譯が判るではないか、併し前に述べた輕大郎女が同名であつたからとて、姫と並稱して日本美人の始祖といへないといふ事は、一方は立派な體の美と心の美とを兼ね有した眞の美人、一方は姿こそうつくしけれ、心は實にいふに忍びぬ不倫の人であるのだから、いくら同じ衣通姫でも同日の談に混ずべきものでないのである。萬葉集などを讀む方々に注意しておくが、輕皇太子の伊豫に流される時に、衣通君戀ひてよめるといふ歌が見えるが、あれは乃ち輕皇女其人なので、この弟姫の事では決してないのである。

次に又論じておくべき事といふのは、小町との關係であるが、小町といへば美人の方では、姫にまさるといふても敢て劣らぬ程のものではあるが、これも到底くらべものにはならぬ、それは人物の目安が各々ちがふのであるからだ、約り詳しくいへば、貫之が古今集の序詞に、小野小町はいにしへの衣通姫の亞流なりといつて居る本文にもとづいてゐるので、それは畢竟大間違であるといふべきである、衣通姫は一體歌人では無い、決して小町のやうな女詩人ではない、衣通姫乃ち弟姫を歌人と見たのは、和歌の浦玉津島明神の神靈として和歌の神を崇めたのによるものであるのだから、

實以て採るに足らぬ俗說であるのだ

　たちかへり又もこの世にあと垂れん
　　名もおもしろきわかの浦波

とある佛家の歌を何とおもひ僻めたものか、姫のうたとして、この歌を光孝天皇の夢枕に立つて詠まれたと傳へたのが起因である、この和歌の神に就ては、伊勢貞丈の和歌三神考といふ書にくわしく說明されてあるのみならず、美事に姫は歌人ではないといふことを示して居る、一體中古に行はれた隨筆物などが、荒誕無稽の說をひろげたものであるから、貫之なども姫を歌人の中へ加へて仕舞つて、小町と對照するやうにしたものだが、今考證の結果、歌人の資格がないものと判つてみると、小町との單に性格論をやる上には、丸で反對の人物といはねばならぬやうになるのである。それはどうかといふに、小町の方は熱情的の女性で能く詩人としての醇美をつくしたもの、姫の方は常識的の女性で、能く女子としての醇美を發揮し得たものといふのであるから、とても對比して同型の論中にひくものでは無いといふ事が合點せられるではあるまいか。殊に小町は正史上におぼろげな人物、姫は正史上にたしかな事蹟を有して居られる人物、これ丈けでも早や夥多い相違が見えて居るのだから、何いふ方面から見ても亞流の文字は無意義であるといふべきであらう。又玉津島の神靈といふことについては、古來いろ／＼の說があつて、紛々として定まらぬが、本居宣長などにいはせるとその神靈は神功皇后であつて、姫ではないといふのだ、玉津島は一に玉出島とかくところから竊へてみても、曾て神功皇后が三韓征伐の時に船をよせられた處であつて、かの滿珠千珠を得させられたところから、その名があるものと

論定せられて居るのである、いかにも考證の上では玉津島明神は神功皇后であるかも知れないが、同所の風光明媚なのと、やさしい歴史をもつて居る事とに力を持せて、どうしても姫を神靈にしておく方が適當のやうに思はれる、それのみならず可なり舊い記にさへ、祭神は衣通姫なりとあるのを見ても、今强ちに武張つた神功皇后を祭りたてるよりも、そつくり其まゝにしておいて、明媚の神靈には美容絶比の人を配合しておくのが、おもしろくはないかと思はれる、まして又姫が允恭帝の御寵愛をうけてときめいた頃、共に船に召して和歌浦へ出遊せられたといふ傳説がある、これから押しても其神靈はこの人としておけば、いかにも美しく尊とく、地の美乃ち自然の美と、人の美乃ち人事の美とが、相かなつていかにもそうであらうといふ事が明瞭になると思ふ、しかしながら堂々とした論法では決してない。尤も前にいふたやうに此の神を和歌の守護神とか、單に和歌の神とかこぢつけるのは、至極贊成が出來ぬとおもはれる、併し又姫を神にあがめるといふ事がいかゞといふならば、日本人は餘りに殺風景過ぎると外國から譏をうけてものがれる詞はないと思ふ。畢竟この姫の如き人は、美しい土地の守護神としておくのが極めて適當なものと考へられるのであるから。

（完）

佛國の女傑マダム、ド、マントノン

菊池雪子

果報ものよ、フランソアズ、ド、オビギエ、彼が經歷の緒は恰も小說の如くにして終局を結べり、雲上のあらゆる榮譽榮華を一身に聚め、何不

足なき高貴の位に登りたるこの女傑の生れこそいと哀れにふさはしけれ、父コンスタン、ド、オビギエは容易ならぬ惡行を働き、母諸共ニオルの獄屋に繫がれしが、フランソアズは玆に於て誕生せり、時實に一千六百三十五年十一月二十九日、祖父はアグリッパ、ド、オビギエと稱し有名の詩人智勇兼備の紳士にして、佛王ヘンリ四世と幼時の親友、はては股肱の臣として知られたる人なりき。

コンスタン、ド、オビギエの夫人はジャンヌ、ド、カルヂアックとて溫和にして愛嬌あり、常盤なる松の操の撓はまねば、陋劣なるわが夫を捨つるに忍びず、身のほども愧をも忘られて、獄屋に附從したることの雄々しさ。此處にて玉の如き女の子を分娩したるうれしさに引換へて、我身の苦痛堪へがたかりければ、これをフランソアズと命名して、叔母なるマダム、ド、ビレットに委托し、其の養育を乞へり、しばしが間叔母の膝下に養はれたるフランソアズは、漸く乳ばなれする頃に至り、又母の手に渡されたり。

ド、オビギエ夫人はわが夫を現在の悲境より救はんものと百方力を盡し、一向哀を君に請ひて止まざりしかば、人鐵石にあらず、夫人がけなげなる心に感じて、八年の後囹圄の苦を免れ、やがて米國に放逐せられける、いよ〳〵渡米の道に上りたる時しも、フランソアズは大西洋の嵐にや吹きすさまれけん、今なほ蕾の花ながらに散らんとしけるを、ありあふ人々なく〳〵葬儀のしつらひしう、既に海魚の餌に葬られんとしたるに、こはそも如何に、最後の苦しき吐息もろともに、再び心臟鼓動し來りて、死神手をぞ放ちける。

ド、オビギエ男爵は佛國殖民地マルチニックに居を卜したるが、彼は資性鋭敏にして且つ時機其

の宜しきを得たれば、淺き月日の間に多額の財產を築きて、はやくも土地の財產家と仰がれけり、然るに行の常に穩かならねば、瞬時にして悉く之を失ひて、着のみ着のまゝとは成りにけり、男爵逝去の後夫人は嫡男シャルを伴ひて本國に歸り、フランソアズをば獨り高利貸のもとに質として遣し、母子淚の袖をぞ別ちける、後故ありて此處の主人フランソアズをばとある判事の家に預けしが、學識ある判事のことゝて、やがて佛國行の便船に托し、少女をして歸鄉せしめたり。

　斯くて再び襁褓の恩人マダム、ド、ピレットの許に養はれしが、幾何ならずして母方の親族なるマダム、ド、ヌイアンが庭の敎を受くることゝなりけるに、この夫人は常にフランソアズを傲慢ものと呼び做して、情なくも下婢に打ち交はらせ、野に往きて家禽の番をなさしめけり、かくつれなき所業を爲さしめしも、其の深意は少女天性の剛情を矯めんと欲するにありければ、彼が日光に曝さるゝ間そが眞白なる顏紅なる唇を保護せんため、何時も心して厚き絹布を頭上に蒙らしめたり、我が意の儘に少女を敎訓せんと思ひしかど、小兒ながらの執拗心に打ち勝つべくもあらねば、茲に匙を投じて彼をニオルの尼寺に寄宿せしめけり、此の尼寺はウズリヌ會と稱して女兒の敎育に從事して、一生を送る婦人の團體なれば、フランソアズは見聞するまに〳〵同會婦人等の柔和と忍耐とに感化せられて、執拗の心はいつしか影をだに止めざるに至りぬ、ヌイアン夫人のよろこびやいかに。

　フランソアズは十二歳にして漸やく母の膝下に待ることを得たるに、曾てド、オビギエ家の財產を橫奪する者ありしより、其が恢復を企てんとて、

夫人はパリに趣きて起訴したり、然るに訴訟はいつ落着すべくとも思はれざれば、氣根盡き身體衰へ果てゝ、あはれなるかな、夫人は愛兒を後に殘してひとり何處とも無く消え失せぬ。

夫人死しての後フランソアズはま垣の外にとりすてられたる夕貌の如く、後見もなくいとはかなげなる有樣に見えしかば、又しもヌイアン夫人に拾はれけるが、今迄とは打て變りて、此度はげに温からぬ家庭に養育せらるゝ身となりしこそあはれなれ、されどフランソアズは成長するに隨ひて、容姿嬋妍として花を欺くばかりなりしかば、ヌイアン夫人はスカロンと呼べる狂詩の作者にはやくも彼を娶はせんとの下心ありき、スカロンは一朝の遊戯より足を挫きて不具となりたれど、詩才豊富にして機智妙絶なれば、學者及び貴人の間に大にもてはやされたり、是故にヌイアン夫人はフランソアズがわがもとに食客となりて、嫁資有たぬをつけこみ、さうなく彼が十七歳の妙齡の折四十二歳の不具者に配し、一生の苦樂を共にせん事を諾せしめぬ。

スカロン夫人は彼の智識と才能とによりて、夫が不生出の奇趣にも劣るまじければ、家庭もやうやう光輝を放ちて、夫人の交際は日々賑ひけり。然るに不幸なるかな、夫に死別れて、又もやよるべなぎさの捨小舟、たれにひかれんやうもなく、わが身の憂きを歎ちては、もしほかる海人ならねど、涙に袖のかはく暇ぞなかりける。

皇太后アンヌ、ドオトリシユは之を不憫におぼされ給ひて、年々恩賜の金を賜はらんと宣ひしかば、故スカロン夫人は片田舎にさゝやかなる家をしつらひ、塵の衢をうち離れて、閑靜に月日を送りける、中にもさすがに人の交際は絶たざりけり。

彼の交際を結べる人々は、常に貴顯紳士あるは才子佳人のみなれば、いつしかド、モンテスパン公爵夫人に認められ、其の家庭教師の依頼を受くることゝなりぬ、是よりサンゼルマンに於て、ルイ十四世の王子達を人知れず、教へ導くべかりし責任を一身に擔うて、いと眞實に侍りしかば、日頃きどりやと冷評して、しり目にかけさせ給ひたる王をして、深く感謝の念を起さしめたり。

王は屢々行幸せられ、王子達の喜戯談笑するを、見そなはして、無上の樂とせられ給ひ、時に物など聞召すことあれば、マダムスカロンは怜悧快活にふるまひ、且つ得意の機才をふるつて王の歡心を得たり、爾後大に寵眷を蒙り、賜ふにマントノンの地を以てし、公爵夫人に叙せられけり、王子達にもそれ〴〵殿を賜はりたれば、スカロンの寡婦も爵位を以て宮中に奉仕する事とはなりぬ、これなん有名のマダム、ド、マントノンとて、史上に名を轟かしゝ夫人なりける。

マダム、ド、モンテスパンをはじめ數多の官女より恨を受けしが、彼は只王の信用を益々厚うして、宮中の風俗を一掃せんものをと、われと我が心に頷きて、人の譏などはみな馬耳東風に聞き流しつ、王后崩御あり、王はスカロンの寡婦をして后位に上らしめんとおぼしゝかども、固く辭して聞かざりけり、されど隣國にては使を遣して公然祝意を表したるもありき。

今は願ひて叶はぬ所なく、望みて得ざるものなき高位に進み、無二の榮華を一身に極めたれば、わが身の不運にして昔人の厄介と成りたる過にし方ぞ忍ばるゝ、貧困なる貴族の姫達を召集めてなさけをかけ、嫁資を與へて姻せしめなどしけるに、其數いつしか六十人にも達したれば、幼時教

育せられたる尼君を雇ひ入れ、生徒と共に美しき校舍に住まはせけり、王は后のこの慈善を歎し給ひ、新にサンシール校を建設することを命じ給ふ。

サンシール女學校にては、學課のうち特に文學を奬勵したるより、ラシヌはエステル、エ、アタリの悲劇脚本を著して、自ら姫達に演劇の動作聲色を敎へたるも、蓋しマダム、ド、マントノンの請に因りてなり、劇を演ずる當日には衣裳舞臺等の裝飾に美麗をきはめ、佛王及び英國皇后の行幸を恭じけなうし、竹の園生の末葉まで此席におはせぬ人ぞなかりける。

ルイ十四世は王位に在ること七十二年にして、さしたる病もなく、遽に玉體衰へ給ひしかば、マダム、ド、マントノンは日夜看護に身心を勞し、御側をば片時もはなれざりしが遂に崩じ給ひたれば、直に宮殿をぞ降りける。王の玉座に在せし間、侍臣等は餘儀なくもわれを尊敬せしかど、崩御の後は今までの腹いせに、必ずわれに凌辱を加ふべしと、先見したるその怜悧の心げにいみじきや。彼が目指す所はサンシールの學校にして、こゝぞ彼が終りの塲所なる、萬事に華美を嫌らひければ、后たりし折の珍寶器具を盡く賣拂ひ、墨染の衣に身をやつし、尼君同樣の生活をぞせられける、風に撓まぬその剛氣、あらしに散らぬその信仰、雨に色あせぬその忍耐とは、閉居の長き月日をも一日の如く悅ばしげに經過せしめぬ。

一千七百十九年四月十五日マダム、ド、マントノンは八十四歲の高齡を以てサンシール學校にみまかり、此校の寺院に埋葬せられぬ。

嗚呼幸多き人なるかな、マダム、ド、マントノンや、獄屋に生れあらゆる苦痛を嘗めて人となりしが一朝后の位にのぼり榮譽榮華に月日を送りた

れば、數多の人の羨めるもことわりや、されどこの夫人にいとも稱讃すべきことは、世の女子等が月にあこがれ花にたのしむなる妙齡を、かれは犧牲に供し、貧困の少女等を集めてなさけをかけ教を垂れたることにあり。げに奇節の女傑ともそいふべきなれ。（をはり）

◎梅の料理（二）

甘露梅　梅子の青色にして疵なきものを選び梅子一升に鹽三合の割合にて鹽漬となし三四十日を經て取上げ二片に裂きて核子を去り紫蘇の葉を水に浸し幾度も能く揉みたるものにて一片づゝ包み壺中にならべ其上に砂糖を被ひ又た右の梅子をならべ斯くすること數度にして上に石を置き二十日ばかり經て又た梅子を他品に移しサッと乾して砂糖を被らし能く密封すべし



學藝

通俗土佐日記（第拾九回）

北海道廳師範學校教諭　兒玉彌三郎

されば、うちつけに、海は鏡のごとなりぬれば、或る人の讀める歌、

千磐破る神の心を荒るゝ海に鏡を入れてかつ見つるかな、

○うちつけに　とは即座に、直ちになどいふ意なり、

○海は鏡のごと云々　鏡を入れたるより其の縁にて斯く書きたるなり、
○千磐破る　は元と道速振荒振國神など丶ありて荒ぶる神に冠らせたる詞なるを、後には神の枕詞となれるなり、
○荒る丶海に鏡を入れて　の二句は挿入せる詞なり、
○かつ見つるかな　のかつは、一事をしながら他事にわたり、又此の物あるに他の物のまじはる意にいふ詞なり、
○一首、千磐振る神の心は測り知るべからざる事なるに、荒る丶海に鏡を入れて其の片手に見知りつること、普通の理には違へることよと、神の心の知られたるを喜ぶは即ち海の靜まりたるを喜びたるらしく思はせたるを表とし、實は、楫取が此の千磐振る神を住吉の神といへど、初め幣を奉りて尚は止まず唯一の鏡を入れたるに、み心行きたるを以て思ふに、是れ住吉の神にはあらで千磐振る荒振る神の仕わざなりと見たる由を讀みたるなり、實に斯く卑しき心をば住吉の神の持つべき理なければなり、

痛く、住吉の忘れ草、岸の姫松などいふ神にはあらずかし、目もうつら〳〵、鏡に神の心をこそは見つれ、楫取の心は神のみ心なりけり、

○痛く　はいふに續くにて、住吉の忘れ草、岸の姫松など痛くやさしみていふ神にはあらずとの意なり、
○住吉の云々　住吉のは忘草にも岸の姫松にも冠らせたるにて、住吉の忘草、住吉の岸の姫松といふ意なり、此の二者は常に住吉の歌に讀まる丶ものなれば斯く引きたるなり、さて斯く

引きたるは住吉の忘草、岸の姫松など、痛くやさしくいふ所に在すべき神にはあらずとの心にて、風波を起せるは他の荒ぶる神なること明らかなる由をいへるなり、

○目もうつら〳〵は　つら〳〵にうの字の添はりたるにて熟視する義、明瞭にといふ程の意なり、

○鏡に　とは前に言へる如く、初め奉れる幣にて納受あらせられなば住吉の神とも思はるべけれど、さはなくて鏡にてみ心行きたるを以て、千磐破る荒振る神なることを篤と見定めたりといふにて、其の神の心の貪りがましく卑しきをいふなり

○楫取の心は云々　とは楫取が神慮を言ひたりしに違はざりしかば、楫取の心は即ち神慮なり、思ひ掛けざりしことよといふにて、神慮の卑しさが楫取の卑しき心と一致せるを意外のことに思ひたる由なり、

六日、澪標のもとより出でゝ、難波津を來て川尻に入る、皆人々、翁、嫗、額に手を當てゝ、喜ぶこと二つなし、

○澪標　みをは水筋つは助辭くしは串なり、串を挿して水を測る故なり、故にみをつくしとつを清音に讀むを正しとすれど、後世轉じてつを濁音にくを清音に讀むに至れるなり、

○もとより　とは澪標の新舊數本ある其の間よりといふ程の意なり、

○難波津を來て　難波津は今の難波村以北一帶の地なるべし、來てとは此處を目的地と定めたるが故に言へるなり、

○川尻　は只川上を本として末流を呼ぶ詞にして川口といはるべき處のことなり、

○皆人々翁媼　皆人々は翁媼以外の少壯者を別にいひたる如く記して、實は翁媼は紀氏夫妻のことなるべし、故に皆人々は紀氏夫妻以外の老若男女をいへるものと知るべし、然して、主なる紀氏夫妻を後に背けるは例の忌避なり、

○額に手を當てゝ　とは物を善く見定めんとするとき手を額に翳すが常なれば、此處も四五年目に難波津を見るとなれば過去の記憶を呼び起して確かめんが爲めに手を額にして四方を見渡すにて、次の喜ぶことに續くにはあらず、斯く額に手を當てゝとのみ書きて、其の見ることを言はざるは文を簡潔にせるなり、

○喜ぶこと二つなし　とは喜び極まりて比すべきもののなきをいへるなり、

舟醉の淡路の島の巨子、都近くなりぬといふを喜びて、舟底より頭を擡げて、斯くぞ言へる、

何時しかと鬱悒かりつる難波潟蘆漕ぎ分けてみ舟來にけり、

いと思ひの外なる人の言へれば、人々怪しがる、此れが中に、心地惱む舟君ぞ、痛く感でゝ、舟醉し給へりしみ顔には似ずもあるかなといひける、

○舟醉の云々　昨日の暴風にて舟醉したるなるべし、淡路の島の巨子は前に見えたる淡路の老婦のことなるべし、下文にも淡路のたうめとあり、

○都近く云々　舟中の誰かゞ斯く言ひたるを聞きて巨子の喜べるなり、

○頭を擡げて云々　もたげてはもちわげてのちわを約むればたとなるにて持ち上ぐるの意なり、喜びの餘り舟醉心地も覺えず頭輕く覺えで、

臥しながら頭を上げて此の歌を讀みたるなり、
○何時しかと　とは何時の事ぞと待ち遠き時にいふ詞なり、
○鬱悒かりつる云々　とは此の日頃、何時着せんかと心鬱々たりし難波潟なりしがとの心なり、
○み舟來にけり　此の一句に數十日間の舟中の苦悶を免れたる嬉しさを思はせたり、然かも嬉しといふ詞を用ゐずして意は言外に在るなり、
○一首、再說の要はなかるべし、只此の歌を巨子の讀めるものと爲せるも、實は例の如く紀氏の作なるべし、下に感賞の言わるは是れ亦設けたる趣ともいひつべし、
○いと思ひの外なる人の云々　昨日來、頭だに得擡げずして舟底に臥したる巨子なるが上に、別に歌讀みといふべき程の人ならねば斯くいへるなり、川尻に入りて以來人々皆心地善くなれるを、此の巨子一人を取り出で　他は總て之れにも增して喜べるを思はせたるなり、
○心地惱む舟君　とは紀氏のことなり、前にも病わること見えたり、此の下にも舟君の病者と書けり、是れ任の歎き愛兒の死亡等の憂に惱まされて、舟中にても其の不幸を歎きたるを以て斯く書きたるなり、
○ぞ　は下のいひけるに係結を爲したるにて、此の歌のさまで善くもあらぬを舟君の痛く賞したるを、記者の嘲る心を示したるにて例の戲れなり、
○舟醉し給へりし云々　是れいたく感でたる心より出でし詞なり、み顏には似ずもあるかなと召使へる女に對して丁寧なる詞を用ゐたる

は、其の實相を表はさゞらんが爲めなり、さて顏のやつるゝまでに舟醉したるに反して、甚だ善き歌を讀めるを感賞せるなり、斯く舟君の此の歌を歎美せるを意外のことに思ひたるなり、翌日の條にも此の舟君歌の事知らぬ人なりといへり、其の舟君の貧むるなれば此の歌さまで善き歌にはあらずとの意を漏らせるなり、是れ等皆紀氏ならざる様に装へるなり、

和歌評釋 小倉の色紙（つゞき）

小川愛氷

文屋康秀

父祖詳ならず、或は曰ふ、文武天皇の皇子二品長親王の後なりと、其履歴亦詳ならず、作者部類には、元慶元年縫殿助に任せられたるよしを、古今集には三河掾なりしとを記せり、

吹くからに秋の草木のしをるれば
**　うべ山風をあらしといふらむ**

○吹くからに　からは故にと同じ、吹くとそのまゝといふ意○秋の草木の　別に解なし○しをるれば　風にもまれてしほるゝ也○うべ山風を　うべは俗に『成ほど合點がいつた』の意、山風は山より吹きおろす風○嵐といふらむ　嵐は物を荒す意にとり、山風をあらしといふのであらうと推量したる也、

この歌、古今集秋下に『是貞のみこの歌合のうた』とあり、

○一首の意　山風がサッとふくと其のまゝ、秋の草木のもまれてしをるゝ所を見れば、草木をあらすによつて、山かぜをあらしといふは、成程もつともの事であるとなり、

素性法師

僧正遍昭の在俗にて、良岑宗貞といひし時の子にして、初の名を玄利といへり、清和天皇に仕へて左近將監に任ず、後父の勸により兄と共に出家し、雲林院又石上の良因院に住して、權律師に任ぜらる、三十六歌仙の一人なり、

今來むといひしばかりに長月の
　　あり明の月を待いでつる哉

○今來むと　今は俗に曰ふ『おッつけ』にて、來むとは『來う』といふに當る○いひしばかりに　言ッたからの意○長月の　長月は夜長月の義にて　陰暦九月を云ふ○あり明の月を　在明の月は二十日より後の月にて、夜ふけて後遲く出づる故、空にありながら、夜の明くるといふ心にて、在明の月とは云ふなり○待ちいでつる哉　待ちて月が出たわいとの意、戀人を待つに月を待つといひ寄せたるなり、この歌、古今集戀部に『題しらず』とあり、

○一首の意　今宵來るといはねば、いかにわびしくとも、夜をおきてふかすでもあるまいに、今に行くからとの一言があつたばかりに、長き夜をまどろみもせず、遂に其人には逢はいで、思はぬ在明の月を待出したわいとなり、

喜撰法師

窺仙又は基泉といふ、その父祖詳ならず、或は桓武天皇の後裔なりと傳ふ、宇治山に隱棲して密咒を持し、長生を求めて穀を避け、一夕白雲に乘じて去ると、元享釋書に見えたり、予は此説を僞妄とは云はず、馬鹿らしき所面白し、六歌仙の一人にして和歌をよくし、嘗て勅を奉じて和歌式を撰す、詠ずる處の歌、僅に我庵はの一首を傳ふるのみ、

我庵はみやこのたつみしかぞすむ
　世をうぢ山と人はいふなり

○我庵は　我住む庵はの意、庵とは假に結びたる草の屋をいふ○都のたつみ　都は京のこと、辰巳は方角にて辰と巳の中間、すなはち東南の方を云ふ○しかぞすむ　然ぞ住むにて、此通りに住んで居るとなり○世をうぢ山と　宇治は京より東南四里許、山城國宇治郡に在り、今喜撰嶽と云ふ、都をのがれて世をうきといへるにかけて、うぢ山とつゞけたるなり○人はいふなり　世の人は云うて居るとの意、

この歌、古今集雜下に『題知らず』とあり、

○一首の意　我が住む庵は都を離れて　世を憂しとのみ人もいひなし、世を避けて住める甲斐なくうき山と噂すれど、我は久しくこの通り住みなれて、あたりの景色を心の友と見、別にうき事にも思はぬとなり、

僧正遍昭

俗名を良岑宗貞といひ、桓武天皇の皇子安世の子なり、仁明天皇に仕へて最も寵眷を得たり、承和十二年從五位に叙せられ、左兵衛佐に任ぜられ、十三年正月備前介となり左兵衛少將を兼ぬ、嘉祥三年從五位上に叙せらる、同年三月仁明天皇崩御し給ひしかば、宗貞哀慕に堪えず、叡山に上りて慈惠僧正の弟子となり、剃髪して名を遍昭と改む、貞觀年中元慶寺を創して座主となり、常慶親王の住ませ給ふ雲林院を賜はり別院となす、元慶三年權僧正に任ぜられ、仁和元年僧正となり、寛平二年正月年七十四にて寂す、遍昭和歌を善くし、六歌仙又三十六歌仙に列す、

天つ風雲のかよひ路ふきとぢよ

乙女のすがたしばしとゞめん

○天つ風　つは助辭にてのに同じく、すなはち天の風にて、空吹く風を云ふ○雲の通ひ路　天へ通ふ雲間の路といふ○吹きとぢよ　そら吹く風にて雲を吹きあつめ、其中の通ひ路をとぢよとなり○乙女のすがた　年若き女の姿、こゝにては五節の舞姫を天女にたぐへて云ひたるなり、五節の舞は、古へ豊明節會（十一月中の辰の日）の時に行はれたる舞の名、五人　舞姫袖を五度返して舞ふもの○しばしとゞめん　暫しなりともとゞめ置かうとの意、

この歌、古今集雜の上に『五節の舞姫を見て、良岑宗貞』とあり、

○一首の意　空を吹く風よ、雲の通ひ路を吹きふさげて、空へ行かれぬやうにしてくれ、あの天津乙女どもが舞ひ果てたれば、天へ歸るであらう、それを暫しでも留めて置かうからとなり。

家政學大要講義（つゞき）

磯部　武者五郎

（二十三）　衣服の形状

衣服を作るには裁縫の技術に熟達するを要す、又衞生、禮法の上を考へて作るべし、

身體を壓迫し、局部を緊束する衣服は血液の循環を妨げ消化器を害する憂あり、洋服の裁縫は此の注意頗る肝要なり、

又衣服の形状身體に適せざるときは風采品格を劣すものなり、

（二十四）　裁縫道具

裁縫には左の器具を要するなり、

針、指環、尺、剪刀、箆、糸卷、懸針、針箱、火熨斗、烙鏝、霧吹、刷毛、裁板、裁刀、長定木、三角定木、

火熨斗懸臺、烙熨懸臺、續飯箆、袂形、褄形等、

（二十五）　布帛の丈匹

布帛の丈匹は裁縫を為すものゝ心得置くべきものなれば左に記す、

並幅　大抵九寸より五寸五分
中幅　一尺二三寸
大幅　一尺六寸より八寸
帶地類　通常一尺八寸幅
繻子類支那　二尺幅
黒繻子類支那　二尺七寸幅
大幅金巾西洋　二尺三寸幅より八寸
唐棧　二尺九寸幅
羅紗廣幅物　三尺四寸より四尺
小幅羅紗　一尺八寸
女服地西洋　並幅一尺六七寸
同　大幅三尺一二寸
絽紹　二尺二寸幅
反物類　一反の長二丈八寸（普通）
同　三丈以上のものを三丈物とす
袴地　一反の長二丈三尺五寸より五尺迄
男帶地　長一丈
女帶地　長一丈一尺

一匹とはすべて二反續きのもの
金巾は一釜といふ、本邦の反物並幅物長二丈八尺なるに直して八反半なり、
黒繻子一本　女帶地四筋半なり
西洋物は反匹といはず、ヤールにて計る、一ヤールは我が二尺四寸餘に當る

（二十五）　裁縫につきての注意

先づ運針の熟達を要す、
布帛の皺を伸し皺のつかざる樣にすべし、
裁縫にかゝるとき、能く手を洗ひ、敷紙を敷き周

園の塵を拂ひて爲すべし。

針は紛失せざる樣其の注意尤も怠るべからず、折れたる針などは小箱等に入れて紛失せざる樣にすべし。

◎梅の料理(三)

熨斗梅　梅子の能く熟したるを取り桶に投し蓋をなして一夜置き擂鉢にて能く摺り核子を去り布袋に入れ堅く搾りて製すべし、其の調合は梅肉一斗、砂糖一貫二百五十目、葛粉四十匁の割合に極めて丁寧に混合すべし、又た梅肉は遠火に掛けたる鍋に入れ能くかきまぜて砂糖を加へこれを日光に乾せしほどに固め適宜に切りて貯藏すべし



農業と家庭の關係(下)

農學士　江南牧夫

◎田舍にも亦た名門舊家あり○○○○○○○○○○○○

前にも畧ぼ申述べました通り、今日の令孃諸君の中に於きましても、教育と名門とを有して居りまする方々は、田舍に降嫁しても其教育と名門とを償ふに足るべき配偶を求むることが出來ないと申す議論がありま

すが、之は未だ田舍農家の事情を、能く御承知がない人々の偏見と申すのであります、田舍にも夫々名門舊家あり、豪農あり、資産家あり、常に政治上社會上の權勢を把持するに足るべき志士も亦た少なからぬのでありますから、令孃諸君の配偶に權衡を失ひまする樣の氣遣ひは、毫もコレあることなしと斷言致します、現に久しく內閣總理大臣を務めまして、國家の元老として朝廷の特遇を辱うしたる處の侯爵西鄕家の令孃が、福岡縣遠賀郡と申す片田舍の豪農平岡家に降嫁致しましたるが如き、確かに其一例で御座います、御里方は侯爵家にして御當人は華族女學校の出身と申しまする點より察しますれば、名門敎育倶に出色の花なるべし、而かも猶ほ滿面の喜色を湛へまして、快然として田舍の御緣談に應せられ、瑟琴相調和して家庭猶ほ海の如しと申す一事は、田舍行を御嫌ひになる令孃諸君の爲めには善い鑑鑑であります、田舍は廣し、農家は多し、獨り平岡家のみが豪農舊家と限りては居りませぬ、他に猶ほ多くの名門舊家あり、豪農あり、資産家ありて、都會の令孃諸君を御迎へ申す餘地は充分に開いて居るのであります、有體に申しまするど、田舍の方が却つて名門に過ぎてアベコベに權衡を失ふと申す位であります、田舍にて中產以上の農家の——格式は、社會の均勢上都會にて最も規律の正しき月俸七拾圓以上の收入ある家庭と均衡ことを得るのでありますから、高等官吏の令孃、銀行會社に奉職する重役の令孃、軍人にては佐官以上の令孃、又た市中にては最も確實にして信用ある處の商業家工業家の令孃等は中產以上の農家に配偶を求め、毫も名門と敎育とを空うする氣遣ひはありませぬ、唯だ水呑み百姓の御嫁めには斷じて御紹介

をば致しませぬが、其代はりに御轉婆の御孃樣だけは、此の方にても眞平御免を蒙りたいと申すのであります。

◎薄志弱行なる婦人の言分　誂へ通りに參れば結構だが、田舍に御嫁に往つたつて、ソウ甘くは參らぬ、随分辛くつて忍耐の出來ないことが多い、第一日常の生活に不便のあること、即ち衣食の充分に備はらないこと、婿君は兎に角としても舅、姑の分らず屋なること、右を向いても左を向いても、無智文盲の田夫野人のみの巣窟なること、新聞雜誌にしても發行の日より五日も六日も經たねば讀むことの出來ないこと、又た場合によると随分農業上の御接伴を務めたり、手傳ひまでも遣らせられますから、迚ても永續きは出來ませぬ、折角學問を致しましても斯樣の處に御嫁に參れば、遂に學問の爲めに骨折をした甲斐がありませぬ、斯樣に不運に陷り、斯樣に耄碌したかと思へば、御兩親やお友達に顔が合はせられませぬと、或は耻ぢ或は不平て居る處の御婦人が澤山ある樣に窺ひましたが、何と之は甚だ御不條理の申分ではありませんか、其申分を一々伺ひますと、成程事實としては有り得べきことのみではありますが、苟も人間が此の世の中に何の爲めに生れましたか……女性の本分は何の邊に於て貫徹致しますか……良妻賢母の教は一個の空想に終はり、名實相背きても差支のないものでありますかとの御質問を致したくなります、此れ等の令孃が所謂お轉婆娘にて、都會にて能く承はります處の女ハイカラの謂ひなるべしと思はれます、斯樣なる御方は斷じて農家の妻たり、農家の母たる資格を有せぬ處の不生產的婦人でありますから、到底濟度を施すことの出來ない御人と申すことを憚らないので

ありますが、其女性と申しまする冥加に對しまして、僅かに一言を加へて其非理を戒めて置きたいと思ひます。

即ち第一舅、姑、に對し孝心を有すること、第二衣食の不便は學校の修養に依り、其材料の豊富なる農家に於て、充分に又た容易に之を改良して利便を受くるの餘地があります、第三無智文盲の者には、即ち有智文明の者が之を誘導開發する義務を有つて居ると申すことを思はねばなりませぬ、又た人は無智文盲なるだけ夫れだけ淳朴にして感化の施し易きものであると云ふことをも知らねばなりませぬ、第四都會の地の如く新聞雜誌を速かに讀まねば女性の本分を完うすることが出來ませぬか、而して又た其結果は遂に良妻賢母となることが出來ませぬか、之れ倶に甚だ謂れなき申分であります、第五農業は甚だ眞摯なるものでありますから、苟も相當の筋骨を有する女性としては、時に之に從ふも甚だ興味多きことであります、何を苦んで農家に一生を終ることを、人生此の上もなき耻辱と思召すのでありますか、世に多く見る所の薄志弱行の婦人の志コソ又た太だ憫むべきであります。

◎婦德涵養と良妻賢母　若し夫れ都會に御成育に成つた處の令孃等が、世の多くのお轉婆娘を學ばず、予輩の希望を容れまして、田舍の農家に御嫁に參らうとなさることに假り定むれば、第一女性の本分として又た良妻賢母としての實を示すことが容易に出來るのであります、何となれば農家は一定の恒產あり、御承知の通り恒產あるものは、即ち恒心がありでありますから　女性の本分も又た良妻賢母も、常に此の恒心に隨つて發揮すると申さねばなりませぬ、日々の生活に追ひ廻はされ、



右も左も不義理盡めでは、迚ても女性の本分を果たすことの出來ないのみか、大切の子女をすら敎育することが、甚だ覺束なくなつて參ります、都會の生活は田舍の生活に反し、太だ複雜を極めて居りますから、日々多くの家費を要するのみならず、世態人情も又た隨つて冷酷に傾き易いのでありますから、常に内氣なる女性の德を保つことを妨げまする處の事情が甚だ多いのであります、之に反し田舍の人情は溫厚篤實にして、隣保協同の道も夫々備はりて居りますから、女性の本分たる節操の如き、容易に之を傷ふの事情が周邊より來らぬと申しても宜しい、加之相當の敎育ある令孃が農家に妻たるを得ますれば、他の婦女の敎育を誘導普及する上にも甚だ便利があります、又た人の妻として、又た人の母としての龜鑑を示すことも容易に出來得るのであります、村落の地が都會の地に比しまして子女の敎育に幾多の利益あることは、孟軻三遷の敎に徵しても甚だ明かなる譯であります、右には淳朴にして化せしむべき溫和の父兄あり、左には天眞爛熳たる敎ゆべき兒童ありて、其自己の子女に不良の感化を與ふべき、外誘を存せぬと申す一事でも、確かに多くの利益を含みて居ります、殊に空氣の淸潔と氣候の調和は能く子女の健全を補ひ完全なる發育を爲し又た完全なる頭腦を養ふに適して居ります、加之一方には甚だ生活の安全ありて、都會の地に於て其夫が或る職務を離れたる爲め、忽ちに衣食の心配を爲ねばならぬと云ふが如き、憂ひと煩ひとを受けないのは全く恒產の然らしむる處と申さねばなりませぬ、右の次第でありますから、婦德を涵養し良妻賢母の實を示さんと思召さるゝ令孃諸君は宜しく此の點を御一考ありて然べきことと思ひます。(完)

外客の日本婦人觀

法科大學 佐藤天風

記者一日外人某を築地メトロポール旅館に訪ふ、某は、東洋觀光の途に上り、支那朝鮮を經て我國に來りし者なり、某は曾て我東京に在住せし事あり、今其婦人に關する談柄を參考として記せむ、

私が、今度日本に參りて、第一に驚いたのは、曾て私が居た十年前とは、丸で樣子の變はた事です、交通機關とか、旅館の設備とかは、とにかく、一體に、日本の文明は、一段の進歩をしたかと思ひます、是れも日本人が、先天的に利巧で、決斷がある國民だからでせう、大阪の博覧會なども、隨分、惡口をいへばいへますが、まあ大體に於て成功した方と思ひます、あー婦人に就ての意見ですか、なにも別段意見といふ事もないが、しかし支那朝鮮を見て來た目で見ると、同じ東洋婦人とはいひながら、雲泥の相違があります、左樣、ナニ三年前でしたか、確かに記憶しませんが、新紐ヘラルドの記者でしたろう、大變に日本の婦人を冷評して、やれ人形の樣な、小さい滑稽な婦人、とか、やれ二つの木の板の上に足を載せてあるく、とかと、非常に罵詈した樣でしたが、其は一時、私の國で、日本風が非常に流行したから、其反動で、こんな事を書いたのでせう、又當時日本に參いつた人は、この樣に、少しは奇異に感じたのでせう、だが今では、大分日本婦人の眞價値は、歐米諸國に知れ渡つて來ました、なにしろ、支那朝鮮では、中流以上の婦人には、私共が逢ふ機會もなし、又逢へませんから、婦人がどんな活動をして居るか、少しも知る事が出來ません、恐らく、下流の婦人を除いては、社會の活動に關係する事が少ないのでせう、あの國等が、開化しないのも、

此等に多少の原因を有してるのでせう、其とは異なりて、日本婦人は、小さいながらも、非常に怜悧に働く樣です、全くそうでせう、いかゞです、(記者此時答ふる處を知らず)

日本人は、元來快活で面白いが、日本婦人も、交際すれば、却々快活で、愉快な處があります、外貌は歐米の婦人の樣に活潑ではないが、いざ其働き振りとなると、いかにも頼母しい處があります、北京で籠城した時も、日本婦人が、大分目覺ましい働をした、事は、私の國の新聞も書きましたが、いや實に恐れ入る次第です、婦人としては、日本婦人は、先づ世界で有數でせうと思ひます、(記者益々恐れ入りたり)



あの、服裝の事ですか、其は立派なものです、私が京都に泊つた折、京都婦人の盛裝(都踊りを見たるらし)を見ましたが、實に優美で、美麗で、いかにも人の目を奪ひます、又よくあの服裝で、縱横無盡に舞踏(手踊の事)が出來ますと思ひました、然し少しく非難すれば、是れから、盛んに活動する婦人の服裝としては、いくらか不適當かとも思はれる處もあります、然し服裝などの事は、歴史的に傳はつて來るものですから、一朝一夕には、變へる事が出來ないと思ひます、だが其健康上に關する點に於ては、至極適當であるから、之れは是非吾々歐米人も眞似をしたいと

思ひます。

此時記者我國に於ける改良服の問題を説明せり、氏は喜んで曰はく、其はなにより喜ばしい事です、私も先年日本に在住してた時より、是非かくわりたいと望んで居りました、今そういふ御話を承まはつて、非常に滿足を致します、どうも從來の服裝では、運動や働に、不便と思ひます、日本の婦人は支那朝鮮の婦人よりは、よく運動しますが、どうも私達の國の婦人よりは、少くない樣です、一體日本人の體格が少さいのも、運動が足りないせいだろうと思ひます、運動といふ事は、私達の國では、非常に重んじて、青年の男女は元より、老年に至るまで、決して之れを怠るなどの事はありません、元來運動といふ事は、筋肉を働かせるのみではなく、精神に快味を與へて、愉快に、敏活に、頭を活動させるのです、體ばかり働かしても、其は運動ではありません、御覽なさい、勞働者は、隨分筋肉を動かしますが、身體はあまり丈夫ではありません、之れ、全く、精神に快味を與へないからです、私も、御覽の通り年をとりて居ますが、國にいると、每夕、妻や、小供と、馬に乘りて、山野を驅けまわりて居ます、日本人、殊に日本婦人には、運動を勸めたいのです。

はゝあ、テニスが、大分女學生間に流行すると、其は結構です、只一時の流行に終らせないで、一家の女王となつてからも、充分其を繼續させたいものです。

大分、日本の女子教育も、盛になりました樣ですが、猶は一層盛大にして、益日本の光輝が發揮する樣になるのを望みます、私等は、大の日本贔負ですから、日本の進步は、私共の名譽です、私は、過去に於ても、度々新聞に投書して、日本を紹介

致しました。
談話他路に入り、日暮にして別を告げて歸れり。

馬鈴薯の話

橘村生

馬鈴薯は多く食用となる植物で、此季節に庖厨へ入り、諸君方の膳に上るから、其の形はよく御存じでせう、然し都會に住へる方は未だその花や葉の形を御存じあるまい。馬鈴薯の全體は一寸茄子の形に似て居つて、花は淡紫色を帶び、瓣萼共に合同して五六片に裂けて居る、其の外表部に露出居る所での特長は無いが、地下にある塊莖は大いに記すべき、否知るべき價値があるので、下にその話をいたすが、初め地上に於て花粉が成熟すれば、地下に在ては、莖の基部から又根のやうな莖を出し、地中に蔓延ると、その先が肥大て塊狀のものになる、これが即ち人の食用する部分で、全體は根の肥大したものであるやうだが、實は一種の莖であつて、馬鈴薯は決して根でもなければ又實でもない。其の證據には馬鈴薯を取つてみると、イモの上に數個の節があつて、その節毎には必らず芽を持て居る（サトイモも又塊莖である）。のみならず馬鈴薯が成る所は、必らず葉腋から根が出て居るので、かりに地上莖の一部を曲げて地中へ埋め、塊莖を生ずるのを見ても馬鈴薯は一種の莖であると云ふことが分る、最一の例は、百姓が馬鈴薯を植ゑるにも、一片のものを數片に切り、其の芽のある部分を畑に植ゑて、新らしい馬鈴薯を得るのを見ても、根（眞の根は何も生ぜず）或は實（幾片に切りては發芽せず）でないと云ふことが

第十期營業報告

明治三十六年上半期

◉諸預り金　九拾四萬八千五百三十六圓三十八錢一厘　人員三萬六百八十五人

◉積立金　壹萬三千圓

◉利益金勘定

當期純益	六千五百六十八圓四十七錢六厘
前期繰越	壹萬二千九百九十六圓二錢八錢
合計金	壹萬九千五百六十四圓五十錢四厘

內
積立金	壹千五百圓
配當金（年八分）	五百圓
賞與金	九百八十五圓
後期繰越	壹萬六千五百七十九圓五十錢四厘

◉貸借對照表

負債の部

一諸預り金	九四八、五三六・三八一
一資本金	五〇、〇〇〇・〇〇〇
一積立金	一一、五〇〇・〇〇〇
一當期純益金	一九、五六四・五〇四
合計	一、〇二九、六〇〇・八八五

資產の部

一諸貸金	八四四、七九七・四四三
一有價證券	一〇五、四九五・〇〇〇
一未拂込資本金	三七、五〇〇・〇〇〇
一營業用什器	二七六・〇〇〇
一金銀有高	四一、五三二・四四二
合計	一、〇二九、六〇〇・八八五

右之通候也

明治卅六年七月

東京市京橋區三十間堀一丁目四番地

株式會社 **宮城屋貯蓄銀行**

頭取　大野清敬
取締役　佐藤三之助
監查役　淺井利兵衛
同　遠藤敬止
八丁堀支店支配人　酒井勝之助

御注文の節は女鑑廣告に據りかゝる旨御附記被下度候

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

横井玉子女史著（寫眞版八枚入菊判洋裝全一冊）

（新刊）家庭料理法

上製金六十錢　郵税十錢
並製金四十五錢　郵税金八錢

三度〳〵の食物を安く旨く且つ輕便に味はんとするには、一通りの料理鹽梅を心得置かざるべからず。本書は故横井玉子女史が多年の經驗上より、四季折々の日本料理、西洋料理、もしくは折衷料理など、有合せの器具にて購ひ易き原料を用ひ、好むがまゝに試み得べき最も輕便なる諸種の調理法を、極めて親切に通俗に詳記したるもの、固より坊間濫出の料理書類とは其の選を異にす、蓋し一般の家庭に於ける厨の寶典也

●下田歌子先生著

家政學講義

定價金四十五錢（第三版）
郵税金六錢（發行）

東京鐘ガ淵病院長橋本善次郎先生著

（新刊）衞生一夕話

洋裝全一冊
紙數百五十頁
定價金卅五錢
郵税金六錢

本書目次

衞生とは何ぞや○体温○空氣と呼吸○營養分○飲食物○食事衞生○飲酒及喫煙○衣類及寢具○日本服改良の要點及履物の缺點○住地及家屋○運動及睡眠○温浴及冷浴○海水浴及海氣浴○學校衞生に關する個人の注意○家蓄と衞生○花柳病の感染及後害○結婚及遺傳○肺結核の蔓延及豫防⊙流行性傳染病の個人豫防

大好評　法學士持地六三郎先生著

▲經濟一夕話

定價卅五錢
郵税金六錢

四版發行

東京神田　冨山房　裏神保町

わかる。然らば何故に莖がこのやうになるかといふ疑問が起るだらうが、これは容易い解釋で、即ち馬鈴薯は新植物を生長させる爲めの養分含蓄場であるのだ。でこの養分は新植物を養ふと、一旦芽を出した舊塊は、植物の生長のに隨つて、漸次縮小まつて遂には腐敗して土と化しさつて了ふのである。然して又爰に注意すべきことは、彼の甘薯であるが、甘薯は矢張馬鈴薯に似て居るから、塊莖かと思ふ人もあらうけれど、甘薯は莖でなくて、根の肥大したものである。此の兩種の



區別は、其の薯の附着した處を見れば分る。

馬鈴薯は獨り食用に供するばかりでなく、或は今澱粉を製し、味噌、醬油、味淋等に造られる。馬鈴薯の成分を百合莖と比較してみれば。

	水	灰分	可溶炭水分
馬鈴薯	七五、〇	〇、九	二〇、七
百合	七一、五	一、一	二三、七

	蛋白質物	纖維	脂肪
馬鈴薯	二、一	一、一	〇、二
百合	四、五	一、〇	〇、二

計	
馬鈴薯	一〇〇、〇
百合	一〇〇、〇

即ち百合の鱗莖に含める滋養分は、馬鈴薯の塊莖の養分より二倍以上に當るを知るべし。

次にその馬鈴薯より二倍以上の養分ある百合の植物に就て之れを見ると、百合の葉脉に黑紫色の鱗片より成る毬形のものは、肉芽といつて地に蒔け

ば萠をだして一株の百合となり、葉は細く、花は莖の上部に必らず二輪づゝ着生して、花蓋は六片全く分裂する、雄蕊が六本、雌蕊が一本、雄蕊は雌蕊より長成して、葯は花心に面してゐる（風媒花）。花が散ると實がなる、果は蒴で三胞より成つて、後に地に落ちて幼芽を發す、莖の下部には俗に根と稱する鱗莖がある、これは平常多量の養分を貯へて置く所で、一種の葉である、根でも莖でもない。此の鱗莖の頂きには芽があつて、翌春になるとそれが發萠して、鱗片から養料を吸收して生長する、故に百合は肉芽、種子、鱗莖の三種によつて蕃殖する植物である。今又是等類似の莖を揭げると（食用するものにつき）

鱗（葉）莖、ユリ、水仙、玉ネギ、ラッキヤウ、

球莖　クワキ、サトイモ、コンニヤク、

塊莖　ジヤガタライモ、

前號「蚊トンボ物語」中「水蠆」と書きタイマムシと振假名あるは水蠆（タイコムシ）の誤につき訂正す

化學應用 夏の臺處

東京物理學校教師　田中伴吉

夏の臺所ほど更に油斷のならぬは無いでせう。每年乍ら蠅どもの食物侵略には閉口至極、剩へ毒物を殘して折々一家の治安を壞らるゝに至つては、唯降參の外は有りません。其れから暑さの爲には馨も風味も忽ちに薄らぎ、甘い味も續いて拔ける。一寸油斷すれば香が附き切角の御馳走も腐敗して仕舞ふ。實に夏の臺所ほど氣骨の折れるものは有りますまい。偖、個樣にうるさい現象が雲の如く生じても、文明の智識を甘く應用する時は其處理法宜しきに適うて公私の衛生も一家の幸福も安らかに進めることが出來る。何程虎列拉や黑

死病が流行るとも更に心配はいらぬことになりませう。今此現象に就き其由て生ずる所以、又、之を防ぐの道を研究するに大抵は化學の原理で說明が出來て、然かも中々面白い問題で有ります。で、此問題に就き是れからボツ〳〵述べて見ませう。今粳米をふかして之に同量の沸湯と少許のモヤシを入れ善く攪混て五六時間も容器の中に、ねせて置く時は、少し甘味の有る濃い汁が出來る。徐々おいしひ御馳走が出來さうですが、玆で確と心に留め置く事が有る。それは粳米が箇樣な形に變た働を醱酵と名付け、其醱酵を起し丶原因はモヤシの働で有ると云ふ二の事實で有る。それから其粳米の醱酵した汁を絞つて煮詰上げた者が、即、上等の飴で、甚だ重要の食品たるのみならず、照燒、甘煮などの一要素として臺所にも應用されて居ます。

モヤシの種類

モヤシは其種類が色々有て幾多の物の中に含まれてある。化學上の詞では之を醱酵素と云ふ。即、ヂアスタス、プチアリン、ペプシン、トリプチンは其主なるもので有る。前段に一口にモヤシと云たが實はヂアスタスのことで飴や糀などのモヤシになるものであります。今濕つた蓆などの上に麥を撒布し置く時は、忽ち芽を出す。其時此芽を摘捨て殘りの麥のみを乾し、之を粉にすればヂアスタスが出來る。ダガ、其粉が、悉くヂアスタスではない。ホンノ少々許含れて居るのみです。是に至つてヂアスタスは如何なる者かザツト了解が出來たでせう。

次にプチリアンは、吾々の唾の中にある一種の醱酵素で、食物が之に混ずると、僅に咽を下る間に醱酵の働を起して、葡萄糖に變り、大に消化の力

を助けます。其故飯などに湯茶をかけて食する時はブチリアンが空しく胃中に流れ込れて大切な醱酵の働をする暇が無いので、遂に消化を害ふことになる。其れからペプシンは胃液の中に、トリプチンは膵液の中に有る醱酵素で、何れも蛋白質と一處になると、矢張醱酵を起して消化を促がします。夏は胃の腑が割合に傷ひ易い上に咽の乾きも多いから從つて湯茶の要求が著しい。之は自然の狀態なれば、善々此理を認めて之に應ずる御馳走を調へなくてはならぬ。シテ其御馳走は如何なる材料を用ひるが善いか略推し計ることが出來ませう。

斯く消化器のからくりと醱酵の關係とがスッカリ分た上は夏の臺所の處理法も宜しきに適ふ第一歩で有る。然し此醱酵は他の半面に於て腐敗と云ふ厭な現象に早變するもので聊か油斷のならぬことを忘れてはなりません。

かびのはたらき

飴の拵方に就ては未だ一つお預りのことがある。ソハ即ち糯米をねせて醱酵させた時、少し時間を過ごせば全く酢く成て仕舞といふことである。其酢く爲ると云ふこと、言ひ換ふれば酢に變ると云ふのは、糯米をねせてから、一定の度を過ごして永く空氣に觸れたからで有る。空氣中には極小さな生きもの六ケ敷云へば微生物が數限り無く居つて、其醱酵物の中に入つて醱酵を起すからで有る。今此微生物を六百倍の顯微鏡にかけると、小豆粒位の大さで、其形は楕圓に見える。化學上では之を酵母と申します。そこで此物が氣中の酵母の爲めに甘味が減つて、其れが暫くたつと、追々と酢味を負びて、終に酢となる。即ち酢酸が出來たので有る。酒が酢く爲るのも亦此の道理に外ならぬ

總て此種の醱酵を酢酸醱酵と申します。
牛乳の酢く爲るのも、矢張空氣中の或酵母が其の中に入つて、醱酵を起すからである。此種の醱酵を乳酸醱酵と申します。酒や牛乳を酢くすることは、夏の臺所では折々の失敗で有るが、斯く其原理が分れば豫防法などは、何でも無からうと思ふ。此酢酸醱酵と乳酸醱酵とは、酵母類の爲めに起る醱酵で有るが、猶此外に、かび類の爲めに醱酵するものと、バクテリヤ類の爲めに醱酵を起すものが有る、夏の臺所で何時も迷惑する醤油や、糟味噌などが、かびるのは即カビ類の醱酵で、コレラ、チブスの如き流行病は、バクテリヤ類の醱酵が原因となるからで有ります。そこで此酵母類、かび類、バクテリヤ類を一纏に名を附けたのが、即微生物と云ふので有ります。微生物は生活力を有して醱酵の働が原因と爲つて、ドシ〳〵繁殖を致します。一寸注意すべきは是迄の説明で醱酵の原因に就ては二色あるが、無生物の時は醱酵素有生物の時は、微生物と云ふ違ひの有ることを記憶し置かねばならぬ。一目に分り易く示せば、

醱酵
- 無生……醱酵素
  - ヂアスタス
  - プチアリン
  - ペプシン
  - トリプチン
- 有生……微生物
  - 酵母類
    - 酢酸醱酵
    - 乳酸醱酵
  - カビ類
  - バクテリヤ類

箇樣の表に現れるので有ります。之で醱酵の成立も働きも効用も明了に爲つたから、醱酵と腐敗との關係を一言致しませう。

（つゞく）

家庭料理

岡野知十

▲鳥のソボロ

鳥ソボロは丼に用ふべし煮物いろ〳〵にふりかけ

て風味を添へるものゆゑ。調理用には重寶のものである。

まづソボロの調理方は鳥をこまかにたゝき、これにスープ（鰹節の煑汁にてもよろし）を加へ。味啉、醤油をすこし加へ、火にかけかきまはし、狐色になるまで煮て汁をきりて置く。

このソボロをかけてよろしきものは數種ある。左に二つ三つしるす。

▲玉葱の甘煑

玉葱を大切にして油にていため、スープなり鰹節の煮汁なりを入れ、やわらかになるまで煮て、味啉、砂糖、醤油少々入れ味をつけ、煮あがりたるとき鉢へ盛りて、まへの【鳥ソボロ】をこの上にかける。

▲南瓜の煑つけ

南瓜をきりて皮をむき、鰹汁、生酒、味淋、醤油、にてやわらかに煮て、丼へとり、これへもまへの鳥ソボロをかける。

▲冬瓜うま煑

南瓜とおなじ、ソボロをかけてよろし。

▲茄子のうま煑

大茄子を賽形にきり、茹でゝのち同様味をつけて、【ソボロ】をかける、もし小茄子ならば南蠻煮にしてソボロをかける。

▲南蠻煑

茄子の南蠻煑とは油でいため、鰹汁、味淋、唐辛子をやきて加へ、汁のなくなるまで煮る、こればかりにて用ゐてよろし。ソボロをかければ尚よろしい。

▲根芋

根芋の根を一寸ぐらゐに切り、やわらかに茹で、それをまへ同様味煮にして、鳥のソボロをかける。

▲玉菜のうま煮

玉菜を大きく割りて、スープでよく煮て、味淋と醤油を加へ、味をつけて、これも丼へとり、鳥のソボロをかける。

▲胡瓜もみ

胡瓜は元の方丈け皮をすこしむき、ふたつに割つて、種をぬき、うす打にして、これに茗荷をうすうちらしてまぜ、塩をからんで四五分間置き、水でザッとあらひ、しぼりて酢をかけて置く、(あまり揉ぬ方がよろし)それより少し置いてフーワリしぼりて三杯酢をかける。

もし魚(鯵、鯖)を入れるなら三枚におろし、塩をして少し置き、水にてあらひ、酢をかける。

この時鯵などなら皮をむき、ほどよくつくりて、胡瓜にまぜる、別々に盛りあはしてもよろしい。

▲泥鰌の蒲焼

泥鰌をさき、串をうち、白焼にして、(鰻アナゴなどは蒸すが、土鰌は白焼だけにてよし)醤油を三度つけて焼く。

汁の加減は味淋二合、醤油一合五勺の割にて煮つめる。これをつけて焼く。

▲柳川鍋

泥鰌をさきて、半煮にする、この汁はまづ味淋を煮立て、煮汁を加へ、それより醤油を入れてつくり、この汁をわけて半煮をする。

さて又別に泥鰌鍋(土の鍋わり)にささがし午房を下へ敷き、そのうへにまへの半煮の泥鰌をならべ、まへの汁を加へ、火にかけ、煮立つたとき、玉子を溶きてかけ、蓋をして直におろしむらす。



薫風（當世一言芳談の内）

幸田露伴

◎ある醜き女の申しける。生れつきて色白く眉にはやかに鼻高く眼すゞしく、まづは好き女なりとおほかたの人に褒めそやさるゝ女は、いつよりとなくおのが美しさを誇る心の湧き出づるものと見えて、十人に九人までは、多く人々の集まりあへる中などにても我は顔するものなり。美しきが眞實にもせよ、我が心の持ちかたの良きためなどにて、人に愛でらるゝに至りたるにもあらぬ事なるを、我はと思ひあがれる面つき、見にくゝもまた見惡き極なり。世に色好む男の少からんには、美しく生れたる女は、今にも増して美しきが多からんを、色好む男の女に阿り諛ふこと甚しきがため、あたら美しき女に、我は顔させて痛く其の美しさを殺ぐこそ、愚なる事なれ。

◎獵の道にかしこき人の云ひたる。好き狗はひたすら禽のかたに向ひて進み、あしき狗は半途より横にそれて、おのが心のまゝに狂ひ遊ぶものなり浮きたる性の女は惡き狗の如し、其の心の定まらざるも、實をいへば罪少きわざにて憎むには足らざるなり、されど其の振舞の愚なるは狗のおのれをも利せず主人をも利せざるが如し。心あるもの

には遠ざけられざる能はず、惡き狗は數々巧なる獵師をして失敗せしむるが如く、浮きたる性の女は數々其の目上の賢き人の價を低くすることあるべければなり。

◎鋏を精く造らんことは、ことのほか難し、小刀などは其の刄味硬きにもせよ、硬からぬにもせよたゞ一ト條のものなれば、其のまゝにてもあるべし。剪刀は刄と刄との相合ひて物を截つものなれば。甲の刄の味と乙の刄の味との全く同じやうに造らるゝにあらでは、或は甲の刄硬くして乙の刄を刻し、或は乙の刄硬くして甲の刄を刻し。一方勝ちて一方負くるの勢を生じ、物は其の負けたる刄の方より滑り逸れて、截斷の功そこに廢るに至るなり。此の故に良き剪刀を造るはいと難し。されどまた左右の刄味を精く同じほどに燒き成し得れば、物を挾み斷つたびごとに、左の刄はおのづから右の刄を磨ぎて鋭からしめ、右の刄はおのづから左の刄を磨きて鋭からしむるの働をし、日に日に相刻して相新にするをもて、小刀なんどに比べては極めて長き間隔にかけでも能く用に堪ふるなり、眞の國豐の作れる剪刀の佳きものゝ如きは、二年三年日々に之を用ゐるとも猶よく濡れ紙を截るべし、清長の小刀は利しといへども、二年三年の間には幾度か磨がでは叶はざるなり。難いかな、剪刀を造ることや、靈しきかな、精き鋏の力や。と鋏造りの叟の申しける。
ある人此の鋏造りの叟の言を聞きて申しける。まことの好き夫婦は良き鋏の如くなるべし。相刻して相助け、相新にして相久しき、めでたしなんどいふも愚なり。鋏は微物にして言ふに足らねど、諦觀すれば我を啓くあり。

◎ある年老い徳すぐれたる僧に若き女の、如何樣

に心を持ち身を行はゞ夫には良き妻となり舅姑には好き嫁となり、後の世には佛となり得るにや敎へさせたまへ、と尋ねければ、僧打笑ひて、まことに殊勝の御尋なれば、秘中の秘にはあれど包まず御敎へ申べし、と云ひて、扨女の面を睨みつけ、聲を厲しくして、其の問をよく忘れずに、日に三度づゝ自分で問はつしやいと女が三日四日は耳も聾るほど雷の如くに呵りけるとぞ。

日比谷公園（下）

山岡超舟

◎雲形池

公孫樹の大木を後にして、道を斜めに藤棚をくゞれば、洋式てふ雲形の池畔に出づ、其の樣あたかかも浮雲のたゞよへるが如くなるをもて、斯く名けたるなり、水心さまで深からねど地をうがつ事げに五百五十餘坪、水をたゝへて漣のそよ吹く風に打ち寄するも面白く、中央には石造の瑤臺を設け、青銅一羽の丹頂其の上に立ち噴水その嘴より迸り、其の趣正に兩翼をひらきて一聲高く九皐に鳴かんとするに似たり。而して沖天に向て吹く水は、羅裙の白きよりも白く、玉の糸を池水に連ねていよ〳〵清し、臺下また五口の噴水あり、飛沫落花日に照されては五彩を放つべく、清涼いふべからず。夏日若し杖をこゝに曳かんか、誰れか其の胸襟をして覺えず清爽ならしめざるものやある。凹凸の塘汀は種々の草木に飾られて、其の風致を饒ならしめ、殊に松が枝の池上に影を浮べ楊柳の糸長く垂れて池水に弄るゝ處、雅趣いふべからず。此處に洋風の東屋ベンチを抱きて人を待ち、其の美をすゝめ顔なるも可愛し。

◎渡月橋

雲形の池の流れやうやく細き處に、苔蒸したるさゝやかの石橋あり。渡月橋といふべきか。あはれ此の邊の風致瀟洒として床かしく、緋鯉の樂しげに三々伍々群れ遊ぶ樣の愛らしさ。若しそれ四隣寂として草木眠り、水流靜かに音なく、星影おちて一天拭ふが如き月夜こゝに佇めば、正に塵刧の紛々たるを忘れ、羽化登僊の思あらしむべし。

◎躑躅岡

夫れより右に左に躑躅を眺めつゝ、小高き丘に登れば、數



寄を凝らしたる四阿あり、眼下一面は躑躅にして、名にしおふ大久保の園より移植したるもの、二千五百餘株の多きに及ぶと云ふ。花時四月の頃、筇を此處に曳かんか、又大久保に遊ぶを要せざるべし。

雲形池

更に眼を轉じて四方を眺むれば、森々たる雜樹生ひ茂りて、綠滴たるが如く、公孫樹また此の中に卓然として聳え恰も人里遠き山中に在るかの心地せらる。此の地、園内に於ける東南部運動場と、西南部樹林の地との中央にして其の傍なる雲形の池と

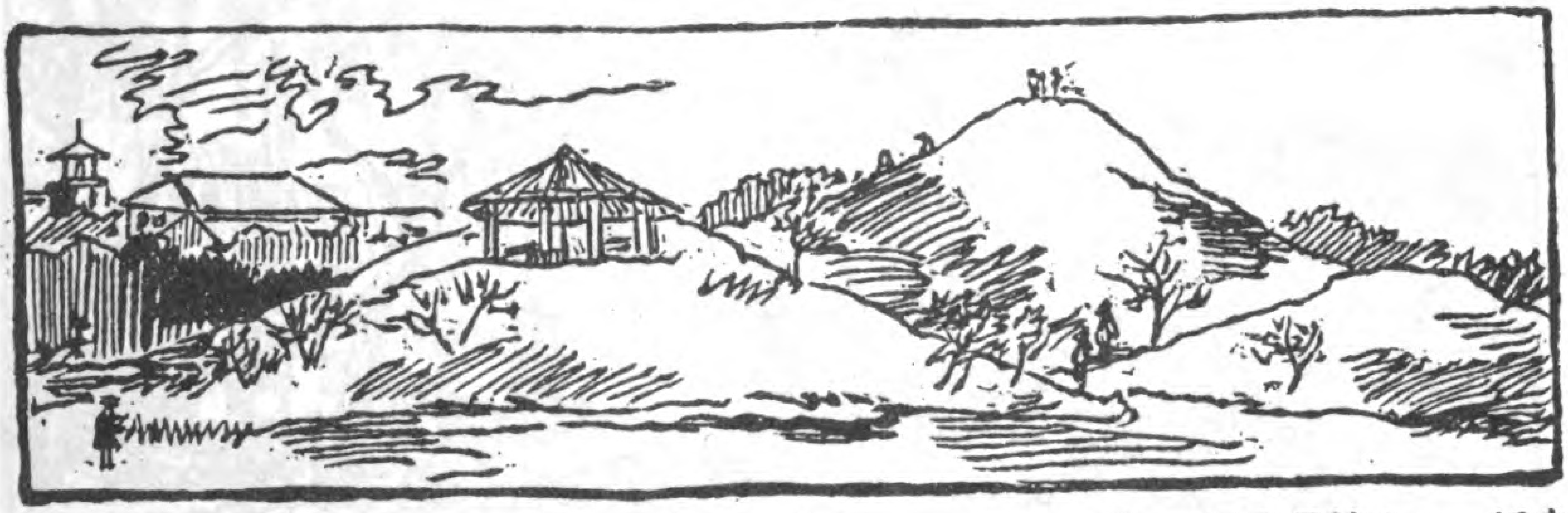
共に、實に本園第一の勝區と云ふべし。

◎楓　林

ながめあかぬ躑躅が岡を、廣濶なる運動場に向ひて下り、車道によりて進めば、右は百日紅をはじめ、夏木立の緑涼しく、中にも楓樹の秋まち顔なる風情一入興深く、やがて桐の一葉に秋のあはれを知り、頃も霜月半となりなんには、龍田の姫が染め出す唐紅に、彼の杜樊川の『停車座愛楓林晩。霜葉紅於二月花。』と稱へしを、まのあたり見るなるべし。

◎櫻　木

花は櫻木人は武士、日本首都の本園に爭でか櫻樹を欠くべけんや。まづ有樂門より入りたる處、および幸門より西幸門に至る墻邊、數多の櫻樹あり、陽春三



月の暮、雲かと紛ふ滿朶の花、今を盛りに匂ふさまに、月さへ夢の如き圓かなる影、朧に照り渡り、滿目の風色、碧紗に包まれたるが如くにて、如何ばかり神すみ、氣きよかるべきぞ。

◎竹　林

霞門より入れば、韻致乏しからざる棕
四櫚に續て、雲形の池に至る一帶は、即ち竹林なり。孟宗寒山、琊玕、業平等十
方二種あり。風來たつて之に觸るれば戛
頂として聲あり。若し白雨一過して、玉散露の音を耳にしたらんには、頓に俗腸を洗ひ去りて、詩趣當に盡きざるべし。

◎四方頂

竹林を過ぎりて、歩を櫻門に向ひ左すれば、鼎の足の如き三箇の築山あり。園中

最も長閑なる處にして、前は一面に高麗芝を植ゑ、恰も靑きうす衣を打ち敷きたるが如くいと淸し。山の一つに登りて、四方を眺望すれば、遠近の風色双眸に集り來り、覺えず快哉を連呼せしむ、就中予が目を樂ましめたるは、近頃、都新聞社の屋上に設けられたる、楊柳の觀音菩薩の花桂を手にし、立ち玉ふ像にして、本園に景致を添ふると實に尠か

躑躅岡



らず。頃しも冴え渡る空に星影寒き秋の夕、御濠の水にあらひ出されたる一輪の明月、大內山の松の梢にかゝりて、光いよ〳〵白く、折りしも、遠寺の鐘に送くられて何地行くらむ、孤雁の聲あはれなる樣をながむるも、一入樂しからずや。

下りて、またの山に至れば、其の中腹に藤棚を四阿形にあしらひ、江戶紫のゆかりの色に咲き匂ふ頃は、さこそと思ひやらる。それより、一番ち

さき山を過ぎて下れば、柳陰の井戸に至る、水沽れ、柳樹また疎に、草深くして、恰もありし昔の跡とふらふ心地せらるゝも最をかし。

◎梅林

それより、歩を櫻門の際にうつす、此の邊より霞門に至る間、右にならべる幕府當時の見附の大石をながめ、今昔の感を起しつゝ、車道を進めば、程なく梅林に至る、此の地、音樂堂設備塲の裏手にして、今は只青葉とのみなりぬれば、足をとゞむる者なけれど、やがて春風やはらかに吹きそめなば、梅の花梢に咲き亂れ、日に映へる光り玲瓏として人の面を照らし、路を埋むる幾斗の清香は、凝りて掬ふに堪へざるべし。

これにて本園に於ける勝地はほゞ、諸媛に紹介したれば、更に本園が文明國のパークとして、其の樹木の配置、景致の變化及び何れの點に至るまで公衆に快樂を供給さるべく出來居るかを、研究し批評したらんには、あながち無用の業にもあらざるべけれど、餘りくだ〳〵しければ、そは他日にゆづり、茲に筆を止むる事となしぬ。（完結）

白砂青松 松浦の風光（つゞき）

肥前 田村梅能子

學校を右手にして、舊城廓内を通り拔け、市街に出れば、町の中央に釜山海高德寺といふ眞宗寺あり、之ぞ、

女傑奥村五百子

の初聲を擧げし家なり、寺詣かた〴〵立寄りて、當時此烈婦が、養育せられし家庭を、窺ひ玉ふも亦樂しみなるべし。

之より市中の見物を略し、妾は諸孃を玉島川の方

向に誘ふべし、高德寺の門前より東に步を進め、材木町に至り

鐵道馬車

に乘り、尙ほ東に向て進行し、やがて松浦川の長橋(松浦橋)を渡る、橋の長さ三百〇八間、西國第一の長橋なり、橋下一面秋の木の葉の浮びたる如きは、上流の沿岸に採堀せる石炭を廻漕(鐵道の運搬に洩れし小炭礦なり)する小舟なり、橋を渡れば

滿島(實際の島に非ず地名なり)

に至る、戶數五百有餘、商買漁夫軒を雜へり、

滿島歸帆　放膽居士

眞帆片帆風のまに／＼夕汐の滿島さしてよする釣舟

同　長田せい子

夕されは潮滿島のほの見えて波間つたひに歸る百舟

此處に遊廓あり、妾等は斯る淫猥の巷は、なくもがなと思ひに、毎夜往きかふ人も多しとかや、或男遊廓の朝歸りに

松浦橋

の上にて

きぬ／＼の別もさすか惜しけれと此長橋の春の曙

歌のよしあしは兎まれ角まれ、遊廓通ひの若殿原さへ、心を動かせし長橋上の眺望は、實に奇觀と云はんか、壯觀と云はんか、東南は遠く領巾振山、浮岳の連山を望み、西北は近く舞鶴城を詠め、橋と城との間、則ち松浦川の河口にして、東岸は滿島、西岸は唐津町なり、滿潮の時は一大湖をなし、鏡面拭ふが如く、帆檣林立して、特別輸出港たるの價値確に見えたり、(唐津東港の光景)

松浦橋の上流、三十町許にして鬼塚なる所あり、(陸より行かば滊車の便あり)此邊の河中

鯉魚夥し

といふ、五六月の候、舟を僦ひて川狩をなせば、

雜錄

漁夫網と共に水底に潜り、忽ちにして鯉魚潑溂舟中に躍る、誠に勇壯活潑の遊びなりとは、良人の語り玉ふ所なり、

鬼塚より河口に至るの間、兩岸の景色特に佳なり、鏡山虹の松原は常に水面に映せり、

松浦川　藤松牛

白妙の眞帆を殘してほの〴〵と霞み果たり松浦川波

同　進藤慶三

舞鶴の城は霞につゝまれて松浦の川の朝けのとけし

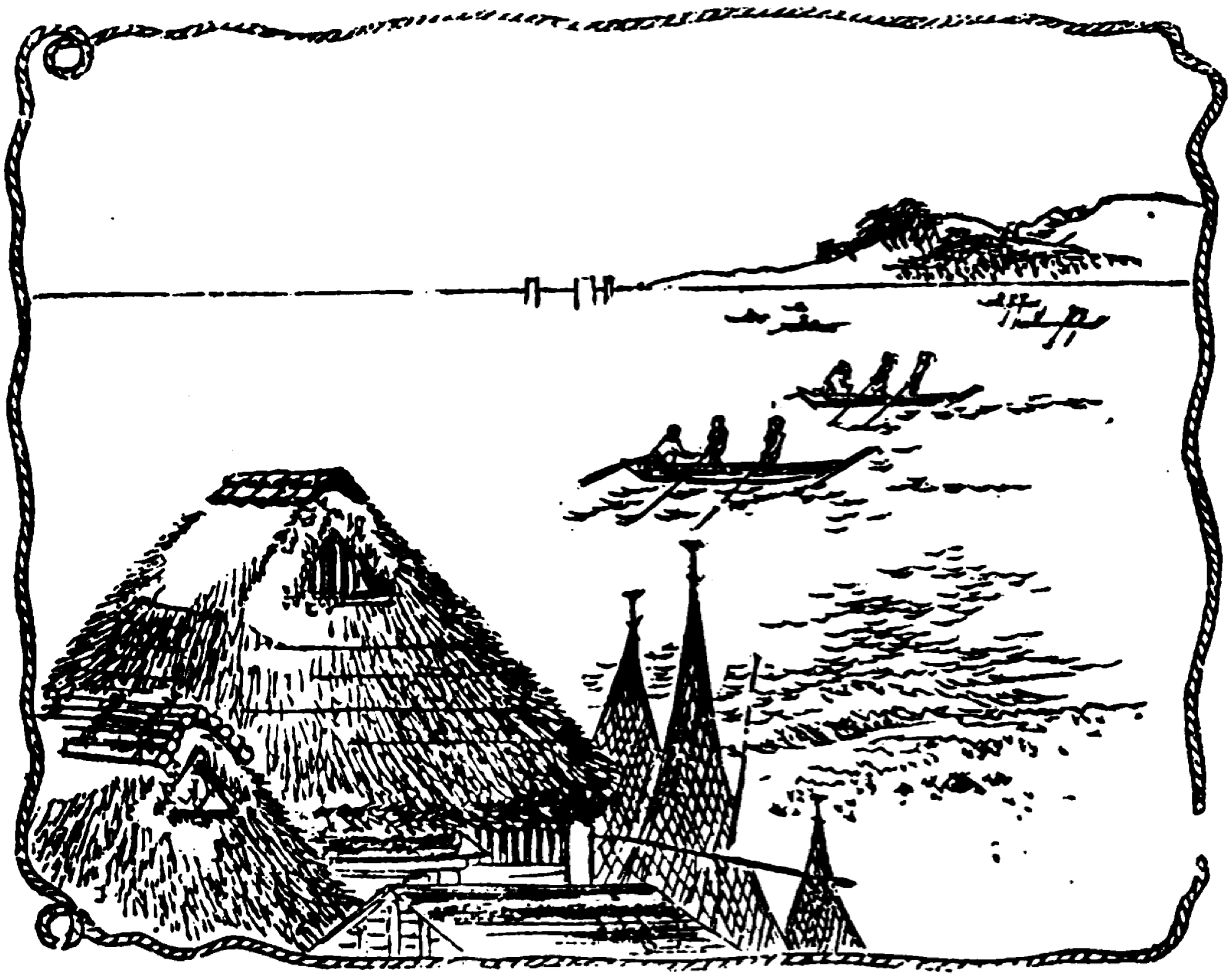
同　梅能子

進つ人松浦の川の川水の清き流は世々にたゑせし

中秋舟を泛て松浦川に遊ふ

藤松牛

松浦舟棹さしとめよ今宵こそ月の鏡の山をしも見む



尙は馬鐵にて進行すれば、滿島の盡頭より松林に入る、之ぞ所謂

虹松原

にして、唐津人士が世人に誇る唯一の塲所たり、滿島より濱崎村に至る、殆んど二里の間悉く松林なり、故に里人は二里の松原といふ（虹二里國音相近し）北は直に玄海に面じ、岸うつ波の聲穩かにして、白砂青松相映じ、松の葉越に、沖を漕ぎ行く白帆席帆、或は漁船の煤烟の棚引さまなど、とり〴〵に打ながむるも亦一興ぞかし

虹林乃眺望　放膽居士

松原を行きつゝ沖を眺むれは葉末にかゝる海士の釣舟

同　　市川理三治

末遠く詠めても尚松浦潟詠め盡せぬ虹の海つら

同　　鷗崎一三九

明日も又虹の濱邊にかくなから松浦の沖を見てすゝまゝし

海濱に貝あり、林中に松露あり、行く〳〵拾へば、遂にハンカチーフにあまる、山海珍味の家土産を得べし、

林中に軍人戰死者招魂碑、征淸戰捷紀念碑等あり、例祭は五月六日にして、九段坂靖國神社の大祭と日を同ふせり、至る所茶店あり「おこし」といふ菓子を販く、岩おこしにも非ず、雷おこしにもあらず、極く軟にして口に適す、

海濱院は、林中第一の海水浴場なり、旅館を兼ねたり、夏時炎暑を避て此宿に集ふ人夥し、概ね近縣の高位高官、及紳士豪商等なり、其他海水浴場三四あり、何れも避暑に適す、

虹林の雜詠

放膽居士

左なきたに涼しき松の下庵に湖湯浴ひつゝ日を暮しけり

同　　梅能子

涼みせん都の友に送らはや虹の林の松の下風

仝　　藤松りか子

風そよく虹の松原分行けは夏にもあらぬ心路こそすれ

仝　　堤定見

波の音も近く聞へて木の間には夏を留めぬ虹の松原

仝　　坂本眞澄

濱殿の晝寐涼しも夕立の晴れたるあとの虹の松原

仝

日をさふる虹の濱邊の松蔭は夏をもしらぬ處なりけり

仝

虹の松原に三不思議あり、一を

太閤睥睨松

といひ、數十歩の間稚松生茂るも、滿面地に匍匐して敢て成木せず、言ひ傳ふ、豐公征韓の役此林中に憩ひ、雜林の風雲を睥見せんとするも、鬱蒼たる松樹に遮ぎられ、遠見に便ならざるを以て、「咄何物ぞ」と叱せしかば、流石の大木も枝を伏し葉を垂れて、數百年の今日に至るまで尚ほ成長せ

ずと、

其二は

此松原に限り、蟬の鳴聲を聞かずと、之も亦八公に叱せられ、皆啞となりしといふ、其三は此廣大なる松原が、（長さ殆んど二里幅は七八町より十五町餘に及ぶ所あり）何時も能く、はき掃除の行屆きおる事なり、之は里人が、常に彼の高砂の尉が携へし如き、松葉かきにて、

落松葉

をかき集め、薪に代用するを以て、砂上に掃目正しき箒痕を印し、丁寧に塵芥を拂ひし如き觀をなせり、斯く明白に書き述ては、不思議でも何でもない事である、

松原

を以て、世に名高きは、舞子の濱、三保の松原、天の橋立、千代の松原、生の松原等なるが、一度虹の松原を見しものは、前者の松の葉色の、はえなきを知るべし、

鐵道馬車は、虹の松原を貫きて、濱崎の驛端に至りて止む、此より馬車を下り、行くこと凡十町餘にして、

玉島の里

に至れば、小丘上に社殿あり、神功皇后を祀る、下に清流あり、則ち玉島川なり、水明にして砂白く、細鱗潑溂として波間に躍る、其大小長短歷々算すべし、神后垂綸の遺跡は則ち此所なり、龜井道載、龜谷省軒諸先生の、撰文にかゝる碑あれども略して、換ふるに和歌を以てせん、

垂綸石　村田新太郎

魚釣らしゝ昔の跡は年經ても朽ちぬ石にそ尙殘りける

同　放朧居士

流れ來し玉島川の清けれは石さへ世々に名をしられけり

同　梅能子

たらし姫魚釣らしまし〻玉島の石は幾代を經ても動かし

玉島川雜詠　　宮崎廣史

たらし姫鮎子釣らし〻古事は文にも殘る玉島の川

同　　梅能子

ひな〻から都にまさる詠めかな玉島川の春のけしきは

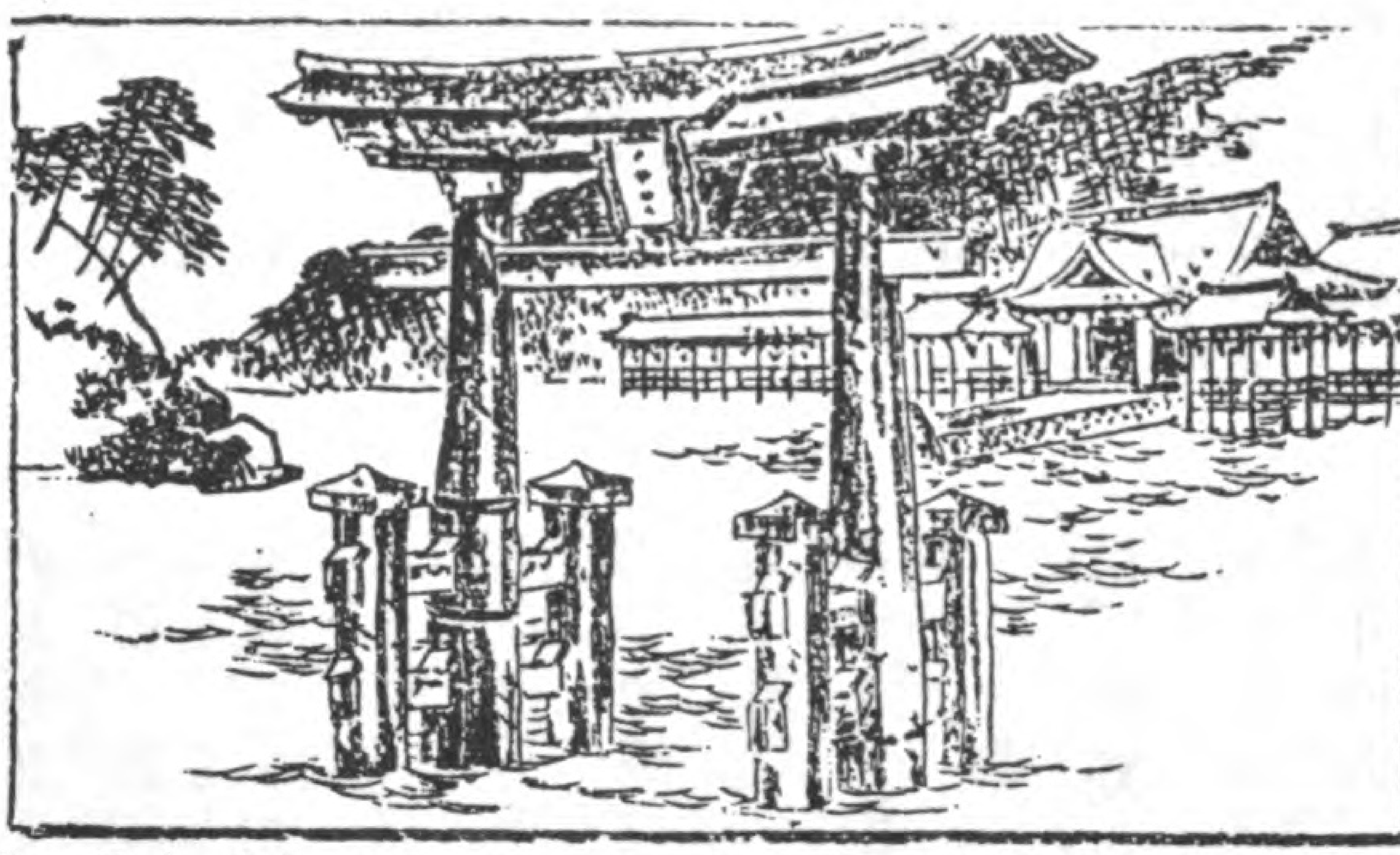
同　　放膽居士

尊くもむかし覓ひて玉島の川の瀬毎に鮎子さはしる

玉島の川瀬の鮎の見ゆる迄光り涼しき夏の夜の月

そのむかし、神后細鱗を獲て「めつら〳〵」と宣ひしより、珍の里とも稱へしが、後松浦と轉訛し、遂に郡名となりしといふ、蓋し往昔より此地方松を以て名ありしなり。此地方多く大理石を産す、故に至る所石英の眞砂にして、土地至て清潔なり、

妾が茅屋



は此玉島川の邊りにあり、田圃の間、庭前に老梅一樹、客の來るを迎ふ、觀光の諸孃宜しく駕を枉げ玉ふべし、一碗の澁茶も亦渴を醫するの時あり。玉島川の流に沿て車を返し、濱崎に至り、更に南方に向ひ、田圃の畦道を行くこと、凡十町にして

領巾振山

の麓に至るべし、登ること又六七町にて頂に達す、頂上は平坦にして湖水あり、魚鱗を産す、湖畔に望夫石、及小夜姫比禮掛松等あり、むかし小夜姫、良人狹手彦が三韓に行くを送り、別を惜みて此山に登り、袖を振て狹手彦が乘る所の船を麾きしも及ばず、悲歎のあまり、化して石となるといふ、此山一名鏡山と云ふ、

望夫石　　塩崎一三九

名と共に朽ちぬ操の石こそは世々の女のかゝみともみむ

同　　秀島與一郎

妻戀に苔の下には朽もせで一人り石ともなりしあはれさ

同　　放膽居士

少女子の戀のさゝれのつもりてや領巾振山の石となりけん

小夜姫ひれかけ松　　渡邊文圭

鏡山ひれかけ松のなかりせは昔の事を何にしのはん

仝　　進藤慶三

心あらはいざ言問はん小夜姫のひれかけ松の千代の昔を

仝　　高山富十郎

小夜姫の操の色か世々を經て緑りかはらぬ比禮掛の松

仝　　梅能子

かはり行世にかはりなきひれかけの松そ昔のかたみなりける

鏡山の雑詠　　放膽居士

有明の月の光りもうつりけん鏡の山の雪の曙

ひれふりし昔忍ひてあまたゝひ鳴か松浦の山郭公

鏡山に登臨一望すれば、眼界大に開く、東に玉島川あり、西に松浦川あり、唐津の市街、舞鶴城、松浦橋、虹の松原、玉島の里等、皆眼下にあり、恰も樓上より庭園の築山を見るが如く、

松浦の山水

一幅の圖畫中にあり、登臨する人も、亦何ぞ畫中の人物たらざるなきを得んや、眸を放て玄海を望めば、波濤渺茫として白馬を走らし、近く高島、鳥島、大島、神集島等、碁布散列し、遠く烏帽子島の燈臺を認め、壹岐對馬は、遙に雲烟の間に糢糊たり、釜山何の邊にかある、將た遼東半島何の所にかある、昔は少女此山に登り石に化す、今諸孃にして一度爰に來らば、方に羽化登仙の思ひあるべし、山の西麓に鏡村あり、祭祠する所の

鏡神社

は、神功皇后姿見の鏡を神體として、いと尊き社にぞある、

本年四月、小學校舍墜落の爲め、生徒四名即死し四五十名の輕重傷者を出すの慘事あり、全國の當事者をして、戒心せしめしは 此村落の出來事なり

鐵小學校の憶事　　放膽居士

山おろし秋の庭に吹すさひあたら散行撫子の花

舞鶴城より西方凡四里にして、

名子屋城

址あり、豊臣秀吉、朝鮮征伐の役に、行營を築き、天下の大小名を集め、朝夕軍議を凝らし、鶏林の雲、唐土の野を睥睨せし所なり、他日諸嬢の爲め、筆を執りて東道となり、山光水色を眺め、一日の閑を消すべし。

明治三十五年の初夏、ひれふる山頭遙に杜鵑の聲を聞きつゝ、玉島川の邊りなる、錦江園の窓下に筆を執り、書き終りてかくなんものす、

心あらば拙き筆のあとゝめて
　人をまつらの里に來て見よ（をはり）

藝犬の話

菅原倭翁

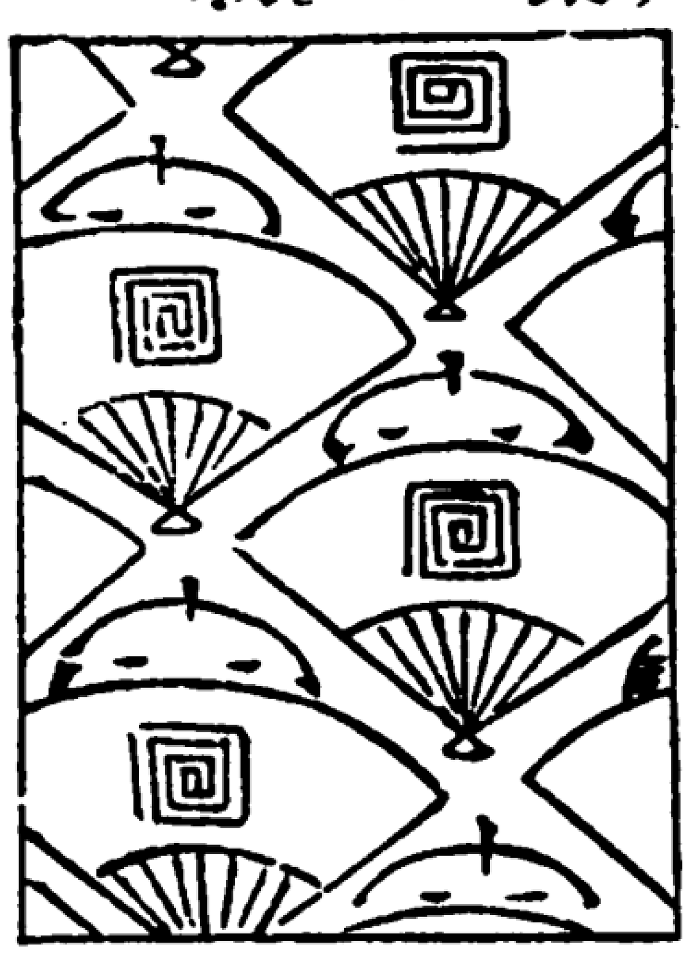
犬はもと怜悧で、且つ發明であつて、半間な人間よりは餘程器用に立まはつて、獵犬、番犬、座敷犬のそれ〴〵特能を申さば愚かなこと、昔から珍聞奇談の種となれるも少なからずして、アッと人間を感服せしめた程であります、曾て市内の緣日などに興行しつゝありし犬演劇などを見しに中々面白き所がありましたから、好事にもその節いさゝか聞得たところを記臆のまゝのお慰にもと一通り書て見ませう。

新藝犬の由來

埼玉縣比企郡中山村大字長樂の香具師田島寅吉と云へるは、性來の犬好きであつて常に各種の犬を愛飼して居たが、去る明治十一年ころ横濱の外人

から一頭の洋犬を買求め『デブ』と名命して種々の藝を仕込まして、山雀又は鼠と共に興行に出しましたが、特の外評判よく、遂に横濱なる某外人から所望せられ、高價にてその『デブ』を讓り渡しました。

其後上州安中にて興行の折柄、同所の某の飼犬が分娩いたしました中で黑白斑の一頭を貰ひ受けて『チビ』と命けて藝を敎へ、又横濱の某から洋犬一頭を買取て『ロク』と命け、共に諸藝を仕込みましたが、兩犬とも何れも怜悧にして藝の記臆も早く、數月の後にて、衣裳を附けて活惚踊は勿論、所作事、力持などを卒業しまして場に登り、到る所喝采を博しました。『チビ』『ロク』の兩犬が車輪になつて働く中に、去廿四年四月栃木壬生と云ふ所で興行中『チビ』は俄に病氣に罹りましたが、兩三日の後遂に斃死したから座主の落膽一方でありません、一先づ興行を閉ぢて『チビ』の爲に盛なる施餓鬼を營み、同所香龍權現寺に一基の犬塚を建てました、所が住職は爲に法名を『西洋犬善畜子』と與へ、僧侶十二名相會して懇に法會を營み遣したと云ふことであります、何んと珍々無類の出來事ではありませんか。


あふむせき

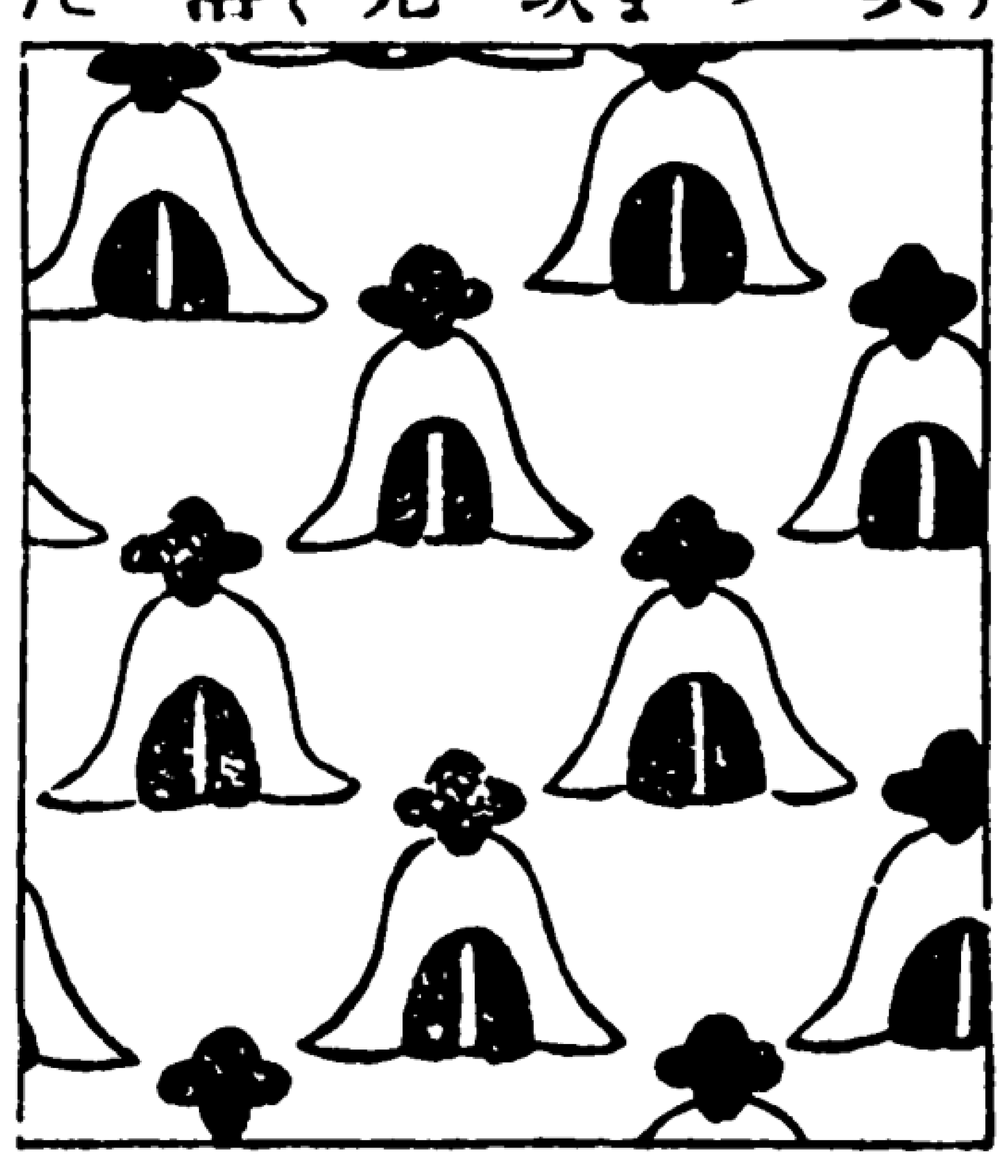
座頭病を犯して場に上る

大名代の『チビ』に死なれたから相役の『ロク』を座頭に直し、同年五月兩國回向院に釋迦如來の開帳があつたとき同所で興行いたしましたが、その時の役割は『ロク』が力持の大力の大役を勤めて、舞臺の中央に仰向きに臥し、四足の上に數個の桶を積上げ種々なる曲藝を演じました。所が流石に氣の疲れでもありませう『ロク』も此時俄然發病致しましたから、座主の心配は中々にて

殆んど寢食を忘れ、常に膝の上に上げていたはりつゝ加養怠りなかつたが、『ロク』は其病苦にも拘らず、興行小屋の囃子を耳にする毎に身を悶へ、氣を揉むやうな體でありますゝ、これでは病體に惡るからふと思うて居るうち、『ロク』は座主が便所へ立ちし際をうかがひ、蹶起して興行小屋に至り、よろぼひ〳〵舞臺の傍に立つて他の弟子共の曲藝を羨しげに見て居ましたから、此體を見たる座主始め一同のものは覺えず落涙いたしたそうです、其後一兩日たちて『ロク』は終に斃れましたから、厚く同寺内に葬りました。

太夫と藝題の役割

『チビ』『ロク』の大立者に死なれて一座の人氣從前の如くならねば、座主等は一層藝犬の養成に勉强いたしましたが、案外好成績を得て、今は一座の役者中、立役あり、女形あり、降つて馬脚に至るまで備はりまして一廉の犬芝居が組織せられました當時太夫と藝題の役割を擧ぐれば左の如し。



むれ樣かされ

曲藝の部

一球乘三頭立蛛の巣絡　舞臺を球に乘り三頭にて工合よく驅廻る、

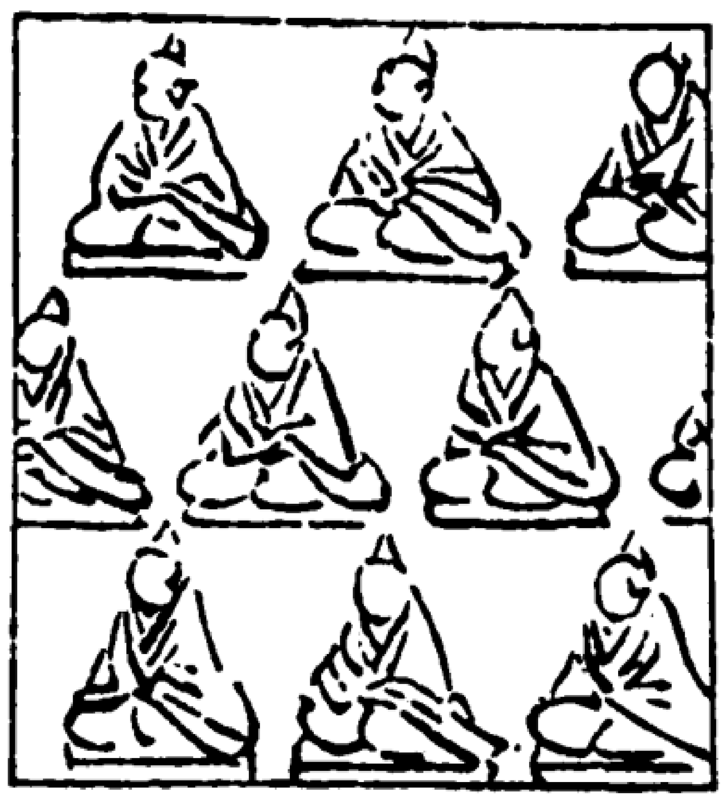
一球檣乘及び跳板　高さ一丈二尺長さ二十八間の八ツ橋形の棧橋を球にて乘上げ頂上に於て跳板の曲を演じ、再び降り來る、

一撞木曲乘　最初は高さ四間の細梯子を登り頂上にて撞木に移り、夫れより曲藝を演じ、更に傍にある木製の階子を降り來る。

一火焔輪拔　高さ四尺の處に徑二尺の鐵製の輪を据ゑ置き、此輪に木綿襤褸を卷附け石油

を注ぎて點火するときは忽ち火氣焔々として焚上るもの二個を並べ、此中を兩犬交々潜り拔ける。

一 籠曲拔　徑一尺五寸長さ三尺五寸の長形なる籠を横へ、其中に蠟燭數本又は刄物、水盛鉢などを入れ置き、兩犬これに觸れざるやう交々見事に潜り拔ける。



豆だいし

一 柳樽足藝　柳樽を後足にて自由に使ひ或は四足にて之を鞠の如く曲取をなす。

一 椅子飛　椅子數個を並べ其上を自由に曲飛す。

一 椅子曲乘　椅子の頭にて兩犬交々逆に反橋其他種々の曲藝をなす。

一 輪拔の曲　三頭の犬各一個の輪を啣へ後足にて立ち、七尺餘の間隔にて並び居るを、二頭の犬交々其中を曲拔す。

一 速飛び　兩犬互に其體上の速飛びをなす。

所作事の部

一 道化踊　當時流行の囃子唄オッチヨコチヨイ其他の節に合して拾數頭の洋犬各々後脚にて立ち珠數繫ぎになりて手踊をなす。

一 滑稽活惚踊　本藝の始めは太夫『チヨビ』人力車に乘り、『コテ』車夫となつて車を挽き、『フク』車の後押をして出で、『チヨビ』は活惚を踊り、『フク』は其囃子方となり唄をうたふ眞似す。

一 日高川松並木飛脚場　太夫『ジヨン』は清姫を『ヒカ』は奴相勤む

一 同上渡場　太夫『ジヨン』清姫、『ロカ』船頭

相勤む
一瀧夜叉姫　太夫『ジョン』瀧夜叉姫、光國『ヒカ』相勤む
一關の戸　太夫『ジョン』墨染『ヒカ』關兵衛相勤む

以上各その犬の性質に任せて諸藝を練習せしめたものでありまして、球の高座乘りに長じたるもの、火焰或は籠拔けに長じたるもの、其他飛物、足藝、所作手踊等、犬に依りて藝の異なれるは、最初より其性の得意とする癖を取つて敎へ込むだのであるとのことであります、所が一度習得したることは堅く記臆して萬劫忘るゝことなく、使手の命令の下に其務を怠らないのは、彼の猿の忘れつぽく演藝中尻をかき虱を取るなど丶は同日の談でありません、

藝犬の手附法

座元が十數年來數十頭の藝犬を仕込みたる方法を聞くに、すべて犬は四足中前足に力多くして後足に乏しきものであるから、普通の幼犬を藝犬と爲すには、その出生後凡そ三ケ月許り經た頃から、常に少しの肉斤でもて先づ後脚にて立たしむることを敎へ、そうして自在に立つことが出來るやうにならば、今度は後足にて歩むことを練習



きよくばく小もん

せしむるのであります、その中には犬毎に己が癖取も直さず特技のある所が知れて來ますから、之に應じて球乘り火焰拔け或は籠拔け椅子飛びより所作事手踊まで順次に敎ふるものであります。
又藝犬の飼養法は常に馬肉五十錢許りを求めこれ

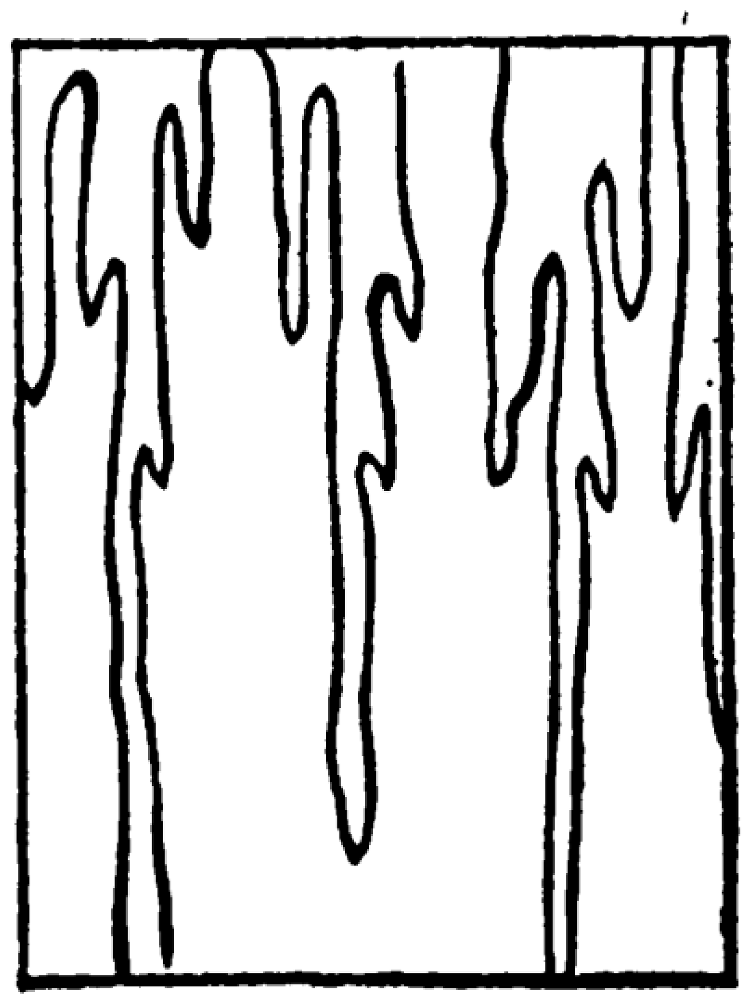
を小さく切り、白米一升に交て粥のやうに煮て、二十二三頭の犬に一日二回づゝ平等に與ふるのであります、この外は湯水共に與ふるには及ばないそうです。

食物には一切鹽氣を絶てあるので、若し鹽氣を給するときは、隨て水を好み、鹽水共に與へますれば時ならずして毛の拔ける憂ひもあり、又毛の艶を惡しくするそうであります。

依てかく注意して措きますと犬は必ず肥え太り體量重くなりて、擧動も自然と活潑になると云ふことです。

又蓺犬にはすべて牝犬を用ひ、牡犬は一頭も使用して居ません、如何となれば牝犬は牡犬に比べて性質柔順にして何事にも綿密なる性を備ふるのみならで、その交尾の時期至りても牝犬は牡犬のやうに狂ひ廻ること少なく爲に取扱に面倒を見ることがありません、尤も其際には牝犬は乳の脹るものであるから毎日指先にて絞り取らねばならぬ、左なくば自然に逆上して眼病などを發する恐れがあります。

又交尾分娩する場合は其時間曲藝に使用すること能はざる計りでない、分娩後は大に體軀の疲勞を來すものでありますから、成るべく交尾の期に交尾させない用心が肝要であると云ふことです。



つらゝ小もしん

序でに今現に演つて居る重なる犬太夫の產地を擧げて見ませう

テプ　美濃大垣の產
ヒカ　赤坂氷川社内の產
キン　神田和泉町の產
タマ　野州田沼の產
マル　神田錦町の產
カア　越後柏崎の產

ジョン　上州西群馬の產
チョビ　本所小梅の產
トチ　奥州白河の產
フク　武州行田の產
コテ　赤坂田町の產

なは面白い話もありますが餘り長くなりますから此度は先づ是れだけにておきます。（なはり）

大宰府參詣記（東海道）

高瀨羽皐

年頃筑紫の太宰府にもうで、親く天滿宮を拜み奉らばやと思ひつゞけたれど、障る事のみ多くて果さゞりしが、此ころ福岡の縣に奉仕する友より、吾この地に在る間に來遊せよかし、筑前の名所舊跡案内すべしと言こしたるに、猶は長崎に在る親戚の許よりも、頻りに來よとの消息あれば、俄に思ひたつ旅衣、かさねて斯る便宜はあらじと、旅の用意もソコ〳〵に打立んとする折しも、麻布の奥に住る新澤庵と云る友訪きて、明日浪花に赴きて博覽會見物せんとす、彼の地に用事あらばなど云ふに、吾等も大阪經て筑紫の果まで行んと思ふぞかし、同くは太宰府まで行たまへと勸れば、願ふてもなき幸なり、同行仕らんと頓に相談整ひたればさても、この旅は面白からん、新澤庵は常々狂歌よく讀みて、滑稽の上手なり、殊に書畫、骨董、園藝の道何くれと長じたるのみにあらず、三味線、太皷、など云る遊び藝さへ一わたり稽古して、自ら通人もて任ずれば、道中の所感も多かるべし、さらば何日うち起べしやと、鹿島立の日を撰むに、翌日は黄道吉日なり、明朝七時の滊車よからんと云、吾云ふ明日は何故に吉日にや、イヤ〳〵思ひ立日は吉日也、いつ〳〵と云ふ程にまた

障る事出來らん、今夜は君の家に宿りて、明朝共々打立べしと、實に氣輕なる思ひ立、使者もて旅裝ども取よせ、さて五月のはじめ四日の曉、起出れば、門出を祝ふ取肴、香魚の燒物豆腐汁、盃三たび巡らして、朝飯もソコ〳〵に澁谷の庵を立出たり、例の新橋より滊車に乘れば、思ひの外に乘合少く、奥樣らしき方、孃さまの七歲許りなるを連たる一組、洋服着たるお役人樣らしき方二人、病人かと思はるゝお婆アさんに供の男、先づ是が同窓のお客なり、新澤庵窓の戸ガタリと開て、槻の屋大人、品川迄の間に、一首よみ出たまへ拙者も必ず仕らんと鉛筆手にとつて促せば、心得たりと出鱈目に

この車しば〳〵乘れど竹芝の
　　浦の眺めはめつらしきかな



新澤庵ぬからず、

竹芝とあれはこなたもまてしはし
　　こりや考へて讀ざなるまい

兩人どッと笑へば、奥樣あなた方はお樂みで在しやいますのねへ、然ら早速に歌をよんで旅をなされたら、さぞ面白御座いませうねへ、新澤庵グット身に受て、ハイ私どもは歌を讀と申た處が、何も考てよむのでは御座いません、ハイロからズン〳〵と出て參るので、其を咽喉元で三十一字宛にちぎりまして吐出します、だから打捨て置ますと延つ幕なしに轉げ出しまして、トント持余します、ヲヤ〳〵お團子の樣で御座いますねへと言れて、新澤庵少々閉入たり、品川大森もいつか過ぎてや

がて國府津に着、奥様はこゝより車を下る、大阪の婦人二人乗こむ三十許の商家の内儀らしい人、小紋縮緬の羽織に鐵サビの單物、一人は廿一二の樂の單に紫へ撫子を鼠で出した縮緬のくじら帶、片面は勿論黒繻子、この婦人色少し青く甚だ瘠たれば、箱根の湯の熱海わたりへ養生にゆきたるならん、乗込や否や、ヲ・辛ど……高い車やなア、酒手くれと言やはるさかい、十錢やつたらア、足んと斯いに言やはる、どうもわかん」などと宣ふを聞いて新澤庵ハ、ア大阪の方だなと、鑑定を付ける若い婦人は手帳を出して何か頻りに揩く走り書に、日記にても付るにや、また發句など嗜むかとゆかしく言葉を掛



て見んと思ふ中に、ゴム枕取出して横になつたれば已ぬ、箱根の七トンネル十三橋もすぎて、小山近くなれば、右の方斷崖より瀧のながるゝ景色よし、この瀧大小とり交て、十九ありと新澤庵は言ふ、御殿場、三島、とゆきて程なく沼津もすぎ、富士川をわたる、十二時少し前に靜岡につく、このあたり若き女のあら田うつを見て己れかく

いか許り手にはなれけん乙女子が
こゝろ安げにうつあら田かな

傍らに五十許りの老人居て頻りに吾が悴の遊蕩を歎き、一昨日より靜岡の二丁町へ遊び續けて歸らねば、昨日迎に來たれど、吾等が姿を見て逃て仕舞ひたれば、人を

頼みて捜して居る處なり、これと云ふも、お袋が甘いので、吾等に内證で金を遣はせたが悪いと、頻りに歎息する、傍らの親類らしい人、これもこの事に付て心配するらしく見ゆるを新澤庵例の輕口にて

お袋の臍くり金をとる奴は、
　親の目玉もさぞ盗むらん

親父聞てその通りで御座ります、お前さんが言ふ通り皆なお袋めが悪いと、頻りにわが女房の不行屆を言ふ、イヤ〳〵家庭の教育と言ふものはどちらが一方善てもいけるものではない、親父に内證で金をやるは勿論悪い、併しソレを親父が今まで知らずに居るのも不行屆と云ふもの、一體子供を育てるには兩親よく申合せ、互ひに意見の衝突せぬやうにせねばならぬ、親父が嚴重でお袋が甘いのもわるし、親父が可愛がり過て、お袋が小言いふもわるし、子供育てるは駕籠を擔ぐ様なもので先棒は親父、後棒はお袋、子供を駕籠に入れて、兩親心を合せて擔ぐのである先が右肩で後が左り肩ではいけない、ト新澤庵演説すれば、兩人頻りに感心して禮を述て金谷で下る、さて其日は名古屋もすぎて、五時に岐阜にいたれば、新澤庵時に槻の屋大人、どうせ急ぐ旅ではなし、随分疲れたれば、岐阜泊りとしませう、香魚の新らしいのをたべて見たいと言ふ、それもよからんと、俄に荷物取纏めて汽車を下る。當市の玉井屋と云がよろしき宿と聞て、兩人車を雇うて玉井屋にいたる時に五時三十分、この宿は座敷も廣く唐紙の張附悉く古畫にて、床の懸物も圓山派の山水古瀬戸の瓶に白百合をさし、上方めきたる飾付至て落つきよろし。（つゞく）



小説

心づくし

海賀變哲

上の巻

（一）

此室がお前の、と奥様より當てがはれし、玄關に隣りたるうす暗き三疊は、此程上りし小間使のお清とて、年十七の萬般に忠實々々しく、身も心もいと輕く立働らけばや、左ばかりの月日は經たぬものから、彼方は殊の外氣に入らせ玉へり。

（是を）とて手づから賜はりし風月の菓子、玉露いれたる九谷の急須、御物體なやと受け戴きて、いそ〳〵とおのが部屋へ引き下りしお清は、そこに待たせし母親と、打ち寛ろぎつゝ物語る。

「嘸待遠で御座んしたらふ、今日に限つて朋輩衆が、出拂らふたので、何のかのと御用が多く、辛而今お暇を貰ふて來ました、まあゆつくり話しておいで成されと」、茶をすゝめ、母親も打ち首肯き、

「あれからお前も、何處もわるい事は御座んせぬかえ」、とやさし氣に問ひ寄れば、

「あい〳〵、別に變つた事もなく、相も變らず毎日朝から晩まで、ぐらしやらとして居まする、お前も變つた事はないであらふ」と問ひ返へせば、「はい、お蔭さまで此方へ參つてから、鼻風邪ひとつ冒きもしませぬ、」「夫はまあ何よりな事、そして此方の奥樣はどんなお方だえ」、と聲密そますれば、

「夫は〳〵好いお方で、まだ深いおなじみでもない儂をば、眞實の妹のやうに可愛がつて、よく目をかけて下さりまする、そして旦那樣も、御大氣なお方で何一つ、御叱言有仰るではなし、いつも莞爾やかに御愛嬌の好さ、ほんにお兩所ながら斯う揃ふてお在ゆゑ、儂もどれ程勤めよいか知れませぬ」、

「まあ左うかえ、夫聞て落付いた、始めての奉公なれば、勤まるか何うか、先方樣のお氣に召すか召さないかと、實は案じて居たけれど、左う聞ては儂も肩が休まつた」と、娘の面を兎見斯う見て、

「氣の故か色艶もよく成れば、吾家に居た時よりも、肉付いたやうに見える、始中終美味い物を食く故でもあらふか」、と物でしこそやさしけれ、詞は無下に賤し氣なり。

「はゝ、まあ阿母樣のあんな事を」、お清は耳の根までも赤うして、つゝまし氣に打笑へば、母親は眞面目顏、

「なんの、おかしい事があらふか、たとへにもいふ大處の犬、吾家などよりは何れだけ宜いか知れぬ、

阿母様なんぞは相も變らず煮豆屋の御厄介、身欠鰊のお總菜が關の山さ、」言ひかけて心付き、「おや、お前その半襟は、いつお買ひだつた、大層奇麗な、」とさし覗く、

「是かえ、是はあの、奥様のお下りを戴いたので御座んす、そしてこの簪もこの間買つていたゞきました、夫からまだ他に晝夜帶が一本、是は縫ひ直してしめるが宜いと、結搆なのを下さいました」、と包まず語れば、眼を睜りて、「まあ〳〵〳〵、」と母親は行山に。

「ほんにお前は、家内中で幸福者、何うして〳〵此節、それ程にして下さる家があらうか、夫につけても阿母様は、毎日〳〵苦勞ばかり、片時心の休まる暇はない、」と逢へばいつもの定詞なり。

お清は聞も流されず「お前の苦勞を知らぬのでは御座んせぬ、儂の身が最う少し自由が利くならば、何うにもして上げたいと、思ふては居るけれど、と憂はし氣に太息つきしが、「そしてあの、新次は相變らず奉公に、精出して居りますかえ」と言ふを機會に膝すり寄せ、「其事に就いて今日態々お前の許へ、相談に來たけれど、つい言ひそゝくれて居ましたが」と言ひさして投首に溜息つく。

「御相談とは、彼兒が何うかしましたか」、と安からぬ面地して問ひ掛れば、

「とんだ間違ひが起つてねえ、」

「えッ、」

「外の事なら兎も角もこんな、事件は明々地に、他様にも話されず、儂一個の胸におさめて、結局をつけやうと考へたけれど、何分にも宜い思案が浮かばないので、お前の智惠を借りに來たやうな仕義、お

清こりや何うしたものであらふか」とさすがに夫とも云ひ出し兼ねてや、いく度となくためらひ居る。

(二)

「其譯といふのは、一體まあ何うした事、」とお清は漸く急き込めば、母親は一口茶をすゝり、「聞て下され、」

「實は、つい先月の事であつたさうな、お店の御新造が、懸先のお金十圓といふものを、部屋の用簞笥の上へ乘せて置て、つい藏ひ忘れたのが、いつか紛失つたとやらで、家內中が大騷ぎ、揚句の果が共吟味で、夫から夫と調べた上が、口惜しいではないか、新次に疑ひが掛つて、夫とはなしに、今日暇を出されました、そして番頭が來て言ふには、斯ういふ事は成る可く內濟にして了ひたい、あからさまにお上へ屆けて、この店先から繩付きを出すのは暖簾の手前もある事、二つにはまだ十三や四の、分別も固まらぬ子供の事故、嚴しく叱つて遣つたなら、この後こんなことは有りもしまい、兎も角も一と先づ引取つて貰ふ事にした、夫に紛失つた十圓の金、あの店では僅かな高ではあるけれど、他の雇人の見せしめもある事なれば、是は何うなと都合をして、この月末までに返金して呉れ、左うすれば表沙汰にせずに濟まして置かふ、あんな子供に繩を掛けて、究命をさせるのは不愍だから、と何處までも恩に着せた言ひ分、夫はまあ大變な事、ほんに申譯が御坐りませぬ、忰には親から屹度究命を申し付けまするし、お金も必ずお返へし申しますから、何卒內々でと、面から火の出るやうな思ひで、痛い頭を下げて、其

場だけは濟ましたものゝ、濟まないのは金のいきさつ、お濟、こりや飛んだ事に成つたではないか、」とひそめき〳〵語り次ぐ。

「まあ阿母さん、新次がそんな大それた事を、」

「お前も彼兒の所爲だと思ひなさるか、」

「夫でもお店で共吟味の末、いよ〳〵と目星をさゝれて見れば、まさかうそとも、」といふ顔を、鋭き眼して打見やり、

「左うであらふとも、肉身でない他人の眼から見ては、屹度彼兒の所爲だと思ふは道理、姉弟とは言へ新次は儂の連れ子であつて見れば、お前とは阿迦の他人、人を見たら盜賊と思へといふたとへもあり、左う思ふもさら〳〵無理ではありませぬ、」と早や聲までも顫はせて、口惜し氣に怨ずると、お濟はあわてゝ、

「まあ阿母樣が何をお言ひなさる、阿迦の他人の肉身のと、今さらのやうにあんまり水くさいでは御坐んせぬか、夫りやお前の僻みといふもの、何で儂が新次を疎く思ひませう、只た一人の弟にあんな、奉公をさせるさへ、ほんに可哀想と思ふて居るのをば、そりやあんまりで御坐んすと、片々の袖口を引出して、さめ〳〵と涙を押拭へば、母親は聲を和らげ、

「お濟、儂がわるかつた、勘忍して下され、儂も氣がむしやくしや仕て居るので、つい心にもない事まで言ひました、堪らえて下され、」とおしなだめ、「素より新次の所爲でない事は、判り切つて居るけれど、

も、たとへにもいふ仇敵千人、其上に自分の罪を逃れやうとするには、他を無實に陷すが習ひ、皆な口巧者なものばかり何のかのと言ひ拔けをして、他人の上に塗り付けやう〳〵と掛つた中へ、狹まれたが新次の災難、いくら爭つても所詮眞實の盜人の出やう譯はない、といふのは、恰度折わるく其日に限つて、奥の子供の守をして、部屋に終日居たのが、疑のかゝる原因であつたさうな、斯う成つては兎ても身の明白の立たうあてもなし、悔しいけれど先方の言條を立てゝ、夫だけのお金を返へさなければ成らないが、月末までには屹度と請合つた、其日限と言つても最も十日限り、せめて五圓とまとまつた金があるならば、夫だけでも入れて、跡の日延も出來やうけれど、五圓はおろか一圓さへ、覺束ない今日此頃、相談とはこゝの事、お清何とか仕やうは無からふか」

と遣る瀨なげなる賴みなり。



(三)

お清は胸の間へ手をさし入れて、首傾げつゝ聞き居しが、思ひに餘る太息吐き、

「飛んだ災難で御坐んした、左ういふ場目に成つては、何う都合をしてゞも返金さねば成らぬので御坐んせうが、是が僅かな額ならばまた何うなりと、仕やうもあらうけれど、十圓とまとまつては」とばかりまた首垂るゝ。

「出來ないは知れて居る、知れては居るが、只出來ませぬとばかりでは、先方への言譯に成らず、では何うなりと御勝手にと、言つて了へば事は破滅、可哀さうに新次は明日から暗らい處へやられて、究命を受けねば成らず、血を分けた我子にそんな慘い目を見せて、何う片時も居られやうか、まだ夫ばかりではない、いよ〳〵事が左う成つて、闇暗の耻を明るみへ出すが最後、腹は違つても姉弟は姉弟、世間へ對しても安閑とお前を此處に奉公させて、置く譯には行かぬ、明日が日にもお暇を戴いて、身じんまくを付けなければ成らぬではないか、何うか都合がつくならばと、斯うして相談に出掛けて來た、ほんに〳〵甲斐性のない兒を持つた因果は、いつも〳〵餘計な苦勞をしまする、」とお清にあてたる怨言なり。

「僕が最う少し働きがあるならば、立派に阿母樣の相談相手にも成れやうけれど、意氣地のない性質はいつも御苦勞ばかりかけて濟みませぬ、夫は左うと今の話は、兎ても僕の身では覺束ないは知れた

事、この上は此家樣へお願ひ申して、」と半言はせず引取つて、
「それ〳〵、その事〳〵、平常から御慈悲深い奥樣にお願ひ申せば、屹度出來るに違ひない」と北叟笑して、首肯くを、「まあ待つて下され、お情深い奥樣故、まさかにわるいお顔を成さりは仕まいけれど、外の事とは違ひ金談ばかりは親身も他人、其上に過般の事もあり、いかに厚顔しいとて、何うも儂の口からは」
「申し上げにくいとお言ひかえ」と、忽ちに眼に角立つる。
「まだ夫程なおなじみもないところへ、奈何になんでも、あんまり甘まへ過ぎたお願ひで、今度斗りは」と詮術なげに俯向くを、流眄に打見やり、「出來ないならば出來ないで仕方はない、親は泣寄り、こんな時にと思へばこそ、頼りに思つて遠い處をゑつちらおつちら、相談にも來るものを、左う素氣なく言はれては、木から落ちた猿も同樣、現在の娘さへその通りであるものが、何處の他人がたのみに成らふか最う斷念めました、いゝえ頼みませぬ、新次のやつを突出して煮るなりと燒くなりと、先方の存分にさせるばかり、」と呟やきながら立ち掛るを、お清は其手に縋り付き、
「あれまた阿母樣の短氣な事、左う一酷にお言ひなさらずと、まあ待つて下さんせ、」
とおろ〳〵聲して留むるを見下ろして、
「いくら待つても同じ事、出來ないものは何うあがいても、天から降らふ筈もなし、えゝ止めなさるな、」と振り切るをまた取り縋り、

「長くとは言ひませぬ、五日の間待つて下され、儂の考へもないでもなければ、」
と言ふに母親はまた腰を据え、「ではこの五日の内に、都合をすると言ひなさるか、」
「容易な事では出來まいと思ふけれど、斯う成つては仕方がありませぬ、」と其儘に朽折るゝ、母は詞に力を入れ、「左ういふ譯なら五日丈け待ちませう、けれどもお淸、日限を過ぎるが最後、新次の首には繩が付きますぞ」
「あれ、阿母様まあ靜かに、」と制する時しも、襖隔てゝ奥の間より、「あの淸や、」
あれ、奥様が召しまする。

◎梅の料理(四)

熨斗梅　梅干の能く熟したるを取り桶に投し蓋をなして一夜置き擂鉢にて能く擂り核子を去り布袋に入れ堅く搾りて製すべし、其の調合は梅肉一斗、砂糖一貫二百五十目、葛粉四十匁の割合にて極めて丁寧に混合すべし、又た梅肉は温火に掛けたる鍋に入れ能くかきまぜて砂糖を加へこれを日光に乾せしほどに固め適宜に切りて貯藏すべし



文林

沙月涼　東久世通禧

なみよする濱の眞砂にてるつきは
夏のものともおもはさりけり

夏海　佐々木高行

夕風をかた帆にうけてゆくふねの
すゝしく見ゆる夏のうなはら

岡梅雨　長谷信成

晴るかと見やりの岡にけふもまた
くもおりたちて梅雨そふる

磯夏月　宮地嚴夫

すゝしくもてりこそわたれ白波の
洗へるいそのなつの夜のつき

楝　阪正臣

我やとの時にあふちの名のみして
ひともよりこぬ花のかけかな

船納涼　小出粲

ものゝ音ははるかにきゝて盃の
外にはのせぬふねそすゝしき

大原女　大口鯛二

家ちには星いたゝきてかへるらむ
かしらの妻木うりつくしつゝ

竹徑通幽處　遠山英一

おくふかき竹の下みちゆきてみむ
如何なる人かかくれすむらむ

行路梅雨　岩崎勝従

しけりあふ森のしたみち人たえて
晝なほくらしさみたれのころ

夏田　鍋島榮子

照わたるこの日さかりを小山田に
たくさとるなりあはれ賤の女

淡海公　柳原愛子

さゝなみのあふみの海に榮えけり
許しのいろのふちなみのはな

小式部内侍　小池道子

いち早きこたへを聞したらちねの
母いかはかりうれしかりけむ

農業　南鄕柳子

垣つ田に妻子もろともおりたちて
いそしむわさも樂しかるらむ

高架鐵道　松平健子

たよりよき世とは成にき黑かねの
道のしたさへゆきかよふまて

吉田松蔭　田中瀧子

おのか身は思ひ捨てもたらちねの
上をいかにとおもひやりけむ

橋　中村禮子

世にいつる道のひらけて山さとも
こけむす橋はすくなかりけり

電話　小川直子

遠さとにすめる友にもわかいはの
まとのうちより語るたのしさ

橋梅雨　鈴木小舟

さみたれに往來は絶てかへるこの
飛ひわたりけり里のいたはし

百合　服部磯子

夏くさのしけみか中にうつくしく
さゆり花さくをかこえのみち



七月十五日兼題

樞密顧問官 正三位子爵 黒田清綱先生撰

（門人山岡超舟子評）

水鶏

天

山まつの葉こしにつきのかけさして
くひなゝくなりかはつらのさと

東京市本郷區彌生町二番地　森島靜子

評、神韻縹緲、かぎりなき風光、描き得て清絶。原作上の句（ときはなる松のはこしに月さして）とあり、よく／＼味ふべし。

地

下野國壬生町　藤原のぶ子

ゆふ月のいり江のまこもしけゝれは
そこともわかすくひななくなり

評、まこもしげき入江のあたり、夕月の影まだほのくらく、折りしも水鶏の聲を耳にして、何處かと小首傾むくる樣いと面白し。原作三及四句（茂るよりところ定す）とありて詞いまだ熟せず。

人

東京市麹町區元園町一の六　戸塚てつ子

短か夜のぬるまたになきねやの戸を
いくたひたゝくくひななるらん

評、着想新しきといふにあらねど、實景見る心地して、流石に捨てがたし。原作四句以上（たゝくかなれる間みじかき夏の夜に幾度はかる）とあり、たゝくかなと初句に置きたるはいと拙し。

甲

東京　河合象子

月かけのすめるをかはのみつきよみ
こゝをせにしてくひななくなり

評、いつもながら巧みなる言ひまはしかな。こゝをせにしての詞、上下に對して活動す。

東京　横井かつ子

すゝしくもさとの小川につきすみて
　きよきなかれにくひななくなり

評、原作四句(流もきよく)とあり、清き流れのながれながれて、如何ばかり流調ならずや。

肥後　佐々有鄰子

つきみつゝ門へにたちてかせまては
　いなはそよきてくひななくなり

評、原作初句(すゞしやと)といひては第三句のかせまではに合ひ難し。

東京　岡田春子

くひなゝく聲もきこえてわかかとの
　いさゝをかはにつきふけにけり

評、原作五句(月やどる見ゆ)とは、四句以上の句に對してよろしからず。

横濱　石川ひろ子

かせわたるあしまに月のかけみえて
　くひななくなりいけのなかしま

評、原作五句(なかしまのあたり)と言ひては、いたく調を欠く心地せらる。

山口　田村多豆子

ひるたにもとふ人のなきしはの戸を
　夜たゝたゝくはくひななりけり

評、原作四句(ふけてたゝくは)とあり、只ふけての詞にて、夜の更たるを言ひあらはさんとするは無理ならずや。

下野　川連美喜子

さと川のなかれにそひてよるゆけは
　みくさかくれにくひななくなり

評、原作二及三句(流にそへてさまよひは)とありて、共に句をなさず。

山口　村上操子

いたつらになにを水鷄のたゝくらん
　わかかくれ處はかともさゝぬを

評、原作二及三句(たゝく水鷄がひとゝはぬ)とありて、詞、流調ならず。

日向　紀藤ふじ子

ぬは玉の夜はあけぬれと山かけは
　なほもくひなのたゝくおとする

歌の欄

評、原作上の句（あけながら國のいたとはしれさりき）とあり又五句（たゝく音して）とあり、言ひまはしいまだし。

はしゐして月まちをれはわかやとの
　いけのみきはにくひななくなり　安藝　和住千鶴子

評、原歌（あつけさをはらふこゝろか庭つとりいけのみぎわにむれあそびつゝ）とありで題意を誤りたれば改作したり。初學には無理ならねど、また注意せざるべからず。尙これと同様のもの尠からざりしは、甚だ遺憾なりき。

乙

かはほれのはなさくいけに月おちて
　あけほのくらくくひななくなり。　埼玉　横田秋子

夕つきのすゝしくやとろかはそひの
　あしまがくれにくひな鳴くなり　尾張　後藤信子

なかれゆく山したみつのすゑまても
　つきに見ゐつゝくひなゝくなり　三河　永井さい子

ゆみはりの月もいろさの木かくれに
　そこはかとなくゝひなゝくなり　大和　栗山けい子

凉みつゝうた思ほゆるたりしもあれ
　いけのみきはにくひなゝくなり　東京　三好珍子

こなき咲くのさはの水につきてりて
　こゑさやかにくひななくなり　東京　松本まつ子

たゝかれていくたひ夢をさましけん　肥後　佐々小琴子

わかかとちかき小田のくひなに
月かけのてりわたりたるさと川に
　こゑおもしろくくひななくなり　伊豫　吉良貞子

夕つきのかけもうつれるさはみつの
　まこもかくれにくひななくなり　東京　杉田繁子

ひさかたの月かけきよきさとかはの
　なかれにそひてくひななくなり　神奈川　森田葉留子

すゝみせしひとこゑたねてさと川の
　つきおもしろくゝひななくなり　上總　高石登代子

すゝみするひとはかへりてすみ田川
　かたふくつきにくひななくなり　東京　林環子

うのはゐちりてなかるゝさとかはの
　みなかみとほくくひな鳴くなり　東京　篠田幽子

谷かはのきしのうはらのしたかけに
　かけさへ見ゐてくひな鳴くなり　東京　山口つや子

みつの音のきこゆるたにもうれしきに
　こゑうちそへてくひななくなり　東京　下田しげ子

やり水のおともすゝしくきこゐきて
　つきすむにはにくひなゝくなり　東京　永井さき子

月きよきのきはのあしのはかくれに
　くひなゝく夜はすゝしかりけり　攝津　鹽見文子

まとの戸をあくれは月のかけきよし
　たゝくくひなもこゝろありけり　東京　大町律子

珍らしきひとのとひくと見しゆめの
　さむろまくらにくひなゝくなり　東京　山崎文子

ひとしれぬたにの小川につきふけて
　くさはかくれにくひななくなり　大和　栗山たか子

よもすから戸さゝぬ門をいかなれは
あけよとたゝくくひななるらん　東京　椎野秀子

いかにかりまひしかるらむ山さとは
たゝくくひなのおとはかりして　日向　紀藤のぶ子

よもすからなにをくひなの叩くらん
つきにあけたるまきのいたとを　筑後　武田外代子

ちきりおきしひとにあられと槇の戸を
たゝくくひなはうれしかりけり　松山　上原のぶ子

うのはなのゆきの散りしく我やとの
かきつの小田にくひななくなり　大隅　稲垣政子

早苗とろしづはかへりしゆふつく夜
たかはのあたりくひななくなり　大隅　山田よね子

八重むくらしけろ門邊を夜もすから
たゝくくひなのこゑそさひしき　肥後　徳永多昭子

つきのさすまきの板戸をよもすから
なといたつらにたゝくゝひなそ　和泉　福原菫子

小夜ふけてねやの板とをとふものは
しのひにたゝくくひななるらん　横須賀　岩橋花子

我かやとの槇のいた戸をあけよとて
夜たゝたゝくはくひななりけり　横須賀　上田ゆき子

まつ人もなきわかやとをさよふけて
しはのとたゝくおそのくひなや　東京　大枝つれ子

はかられてつま戸あくれは人ならて
くひなのかとをたゝくなりけり　石狩　坂本榮子

ゆふ月のかけほのくらきふるさはの
まこもかくれにくひななくなり　河内　辻本ひさ子

しはの戸は今宵のつきにとさゝぬを
なにをかたゝくくひななるらん　北見　中川伊代子

柴の戸をたゝくくひなにはかられて
あくろもまたておきいてにけり　長野　松澤まつ子

ゆふ月夜さやかにすめるたにかはの
まこもかくれにくひななくなり　北海道　後藤きみ子

さよふけてとふ人もなきしなりとを
たれゆゑたゝくくひななるらん　長野　小泉みつじ子

さよ更て訪ふひともなきわかやとの
かとのをかはにくひなゝくなり　三河　石川さち子

まちわひし友にはあらてかとのとを
おとなふものはくひななりけり　下野　川中子てつ子

いほちかき田川のなかれさよふけて
すゝしきつきにくひななくなり　東京　三好賢子

たつねくろ人もすくなきやまさとを
夜ことにとふはくひななりけり　秋田　和田りつ子

ふねうけて月にさをさしこきゆけは
あし間かくれにくひななくなり　栃木　青木たま子

とふ人のあらぬ今よひとしりなから
またもくひなにはかられにけり　静岡　夏目一枝子

せきいれし庭のやりみつすゑかれて
しつけき夜牛にくひなゝくなり　秋田　小島いわ子

問ふひともなき山かけのしはの戸を
よたゝたゝくはくひななりけり　東京　中野昌子

小夜更てひとりいほりへかへり路の
やま田のあせにくひななくなり　栃木　森田みと子

夕まくれさとの小川をとめ來れは
すゝしきつきにくひななくなり

やまふかみとふ人もなきわかやとの　かとたたゝくはくひななりけり　栃木　岩間きよみ子

丙

ひとりねのまくらにちかき音なひは　あけよとたゝくくひななりけり　東京　山口學子

夏のよはまたてもあくるあまのとを　うはのそらにもたゝくくひなか　東京　金原玉城子

みしかよのほとなくあくる柴のとを　またてくひなのなにたゝくらむ　東京　宮川芳子

風わたるたけのはやしのいさらかは　ふしおもしろくくひななくなり　埼玉　横田音羽子

門たゝくくひなのこゑにはかられて　明くれはいりぬなつのよのつき　名古屋　瀬木せき子

夢をたにみはてぬなつのみしか夜を　たたくくひなにはかられにけり　肥後　德永廣子

よもすからたたく水鷄にさまされて　しはのかりやはゆめもむすはぬ　肥後　德永萬壽子

ゆきかよふ人もとたえしやまかけに　こゝろおきなくくひなゝくなり　肥後　田代綾子

くろゝとて田子かあしなみみたしゆく　かたやま小田にくひななくなり　肥後　田代艶子

明やすき夜半にもおいは寢さめして　たゝくゝひなをきくもたのしき　野州　佐藤孝子

なり〱は水鷄おとなふわかいほの　つきよそいよゝすゝしかりける　三河　堀田伊勢子

なつの夜の月かけきよきわかやとの　かとたのおもにくひなゝくなり　茨城　中里げん子

みしかよの夢おとろかしれやのとを　いくたひたゝくくひななるらむ　東京　佐々木八重子

よもすから月見ていれぬわかやとゝ　しらてくひなのはかるなるらむ　東京　松本さく子

みしかよの夢をさましていくたひか　たゝくくひなにはかられにけん　下總　佐倉操子

山ひこにこゑをのこしてたにかはの　みきはつたひにくひななくなり　出雲　岩倉より子

明けやすき夏の夜なれとつきかけに　またあくかれてくひななくなり　神奈川　佐々子歌子

門ことにたゝくくひなとしりなから　ひとまつ夜半ははかられにけり　神奈川　笹子茂子

たれよりのつかひなるらむ天の戸を　あくるもまたてたゝくくひなは　札幌　山田靜子

人とはぬむくらのさとにすみなから　けふもくひなにはかられにけり　東京　椎野薫子

あくるにはまたほとゝほき槇の戸を　なにとてたゝくくひななるらん　東京　椎野鋭子

まつ人のなき身なりせは小夜ふけて　たゝく久飛奈にはかられもせす　東京　中村外千代

小夜更てあくるまもなきみしか夜を　なほもくひなのうちたゝくらん　東京　椎野ぬき子

たゝひとりふみよみ居れは夜は更て　あたりしつけくくひななくなり　薩摩　松原峯子

すむ月にうかれていてししはのとを　たかためたゝくくひななるらん　筑後　鏡山増代子

[illegible]ひたかたゝくくひなにはかられて
やかてもしらむみしかよのそら　東京　橫山　きやう子

さとほき野守かやとはあさやふの
くひなのこゑそしたはれにける　陸前　前田河　千年子

ほの〳〵とあまの戸たゝく水雞こそ
ありあけかたのつきにきこゆれ　陸前　前田河　眞子

あけやすき夏のよなからつきかけに
うかれてたゝくくひななるかな　東京　山本　茂子

軒ちかくたゝくくひなのおとなくは
いかにさひしきふかくさのやと　埼玉　前野　壽賀子

柴折戸にくひなのたゝくおときけは
こゝもうきよのかせかよふなり　東京　柏田　靜子

夕まくれとさゝぬいほのかとのとを
なとてくひなのたゝくなるらむ　三河　石川　滿壽子

おこたりの夢さませとやよひ〳〵に
たゝくくひなそうれしかりける　三河　石川　たき子

人たねてこかけさひしきわかやとを
たゝくくひなのこゑそうれしき　三河　石川　祝子

まとろむとおもへは明くる夏の夜を
いくたひさますくひななるらん　山口　大角　志賀子

ほたるかりかへるゆふへのさと川に
こゑふむはかりくひななくなり　松山　米川　淺子

ねりないさめかほにも鳴るかく
くひなはよたゝなきあかしけり　松山　米川　松子

月のもる葎やのまくらにゆめさめて
きけはくひなのこゑさやかなり　東京　大江　春子

あれはてゝすむひともなき柴のとを　兵庫　駒井　登雄子

しは〳〵たゝくくひななけり

小夜ふけてあたりさひしき柴折戸を
たゝくゝひなのこゑそきこゆる　橫濱　米原　孚子

つき影のさしてたゝくとおほねしは
まきの戸ちかきくひななりけり　東京　山本　梓子

をちこちとたゝく水鷄にさそはれて
はやくもあくるみしか夜のそら　東京　篠田　久子

里とほくすまひする身のおかしさは
ひるもくひなのきてたゝくなり　東京　林　雪子

夏の夜のみしかきゆめのなかゝきを
こゆるはかりにくひななくなり　札幌　山田　嬉美子

よもすからたゝくくひなを友として
まなひのまとにあかしつるかな　丹後　木村　綾子

夜もすからねられぬまゝにはしゐして
たゝくくひなのこゑをきくかな　丹後　木村　薇子

水きよきさとの小かはにつきすみて
くひなのこゑもきこえけるかな　東京　荒井　滿武子

夕つきのきよくなかるゝみつの面に
かけあらはれてくひななくなり　名古屋　木下　鶴子

けふもまたはかられにけりゆふ月の
さすやいたとをたゝくくひなに　長崎　八尾　いへ子

やり水にうつるつきかけさよふけて
こゑもすゝしくくひななくなり　越前　上村　ちと子

ゆふすゝみさとの小川のはしの上に
つきみねそめてくひななくなり　攝津　大岡　はな子

たゝ一人木のした影をわけゆけは
つきかけくらくくひななくなり　東京　柏部　政子

教の庭

たそかれのいと〻涼しきゆふかぜに　横濱　上田雪子
たさはのくひなた〻きそめけり

てりわたる月おもしろきなつの夜に　美濃　吉村せむ子
なにをくひなのいたくなくらん

またあけぬ夜半におきよとかとた〻く　筑後　歩田龜子
くひなはつきにはかられにけん

なき母をしたうては泣く子の爲めに　能登　諸角みす子
またも夜すからきくくひなかな

柴の戸をとちおくれたるわかにはの　能登　角屋とも子
かけひまて來てくひな鳴くなり

なく聲はこのあたりそとたち尋れは　能登　紙子てる子
きしのかなたにくひななくなり

小夜更けて小田におち込むみつ音の　能登　松波ふみ子
きこゆるかたにくひななくなり

柴のとをた〻くとみしはゆふつきの　東京　牛山素子
かけにこと〻ふくひななりけり

河つらのしはの戸ほそをあけよとや　但馬　田尻保代子
夜すからた〻くくひなるなん

卯の花の散りて野かはのみつおとも　信濃　山本基子
ふけゆく夜半にくひな鳴くなり

八重むくらしけれる門はとさ〻ぬを　信濃　山本直枝子
來てはくひなのなにた〻くらん

みつきよく月もさえたるかはそひの　東京　松村あさ子
まこもかくれにくひななくなり

さらてたに夢もおほろのみしかよを　茨城　飯田幸子
あけよとはかりくひななくなり

我せ子をまちてふけゆく夜半のとを　東京　高橋しもよ子
た〻くくひなそうらみなりける

みしかよのあくるまちかき槙の戸を　埼玉　前野ふさ子
た〻くくひなやねさめとふらん

おこたりの夢をさましておきよとや　三河　石川代志子
あけかたちかくくひななくらん

ちりの世をのかれすむみも夏のよは　靜岡　夏目まつゑ子
くひなのこゑのまたれぬるかな

園のとをた〻くくひなによもすから　日向　紀藤榮子
みしかきゆめもむすはさりけり

ほたる追ふわらはの聲はうちたねて　松山　松山緑子
ときぬかほにもくひななくなり

老の身のねられぬ夜半はかとちかく　松山　松山桃子
た〻くくひなもうれしかりけり

わか友のたつね來しかとまきの戸を　奈良　澤田よし子
あくれはつきにくひななくなり

さしくしの曉きよきつきかけを　福井　平田そう子
をしみかねてやくひななくらむ

とくおきていけのはちすの花見よと　鳥取　大脇信子
ねやの戸た〻くくひなゝるらん

柴の戸をこよひはさ〻てともをまつ　東京　安井しゆん子
われをはかりてた〻く水鷄か

月かけはさやかにさして柴の戸を　同所　安井きやう子
た〻くくひなのこゑのさひしさ

夏のよのみしかきゆめをおとろかし　同所　安井みし子
くひななくなりありあけのそら

山さとはた〻くくひなのおとしけし　東京　川村松子
ねむれるしつかゆめなさましそ

夜もすからたゝく水鷄のおとやみて いつしかしらむあけほのゝそら　東京　川瀬たき子

もる人もあらぬせきやのさとなれて ゆふへ〳〵になくくひなかな　東京　吾妻ちか子

さゝら波つきにあや瀬のみつすみて そことも知らすくひななくなり　東京　内田とく子

暮るゝかと思へは明くるみじか夜の ゆめをやふるはくひななりけり　栃木　岩間きく子

五月雨の雲のはれ間をもれ出てし つきにうかれてくひな鳴くなり　下野　菅沼淑子

なにものと耳そはたてゝきゝつれは 夜半にくひなのたゝくなりけり　下野　菅沼せつ子

みじか夜のぬるほどもなきしはの戸を くひなたゝきて月ふけにけり　下野　菅沼德子

たくみにもたゝく水鷄にはかられて またもひらきぬしはのなり戸を　神田　荒井千代子

華族女學校教授　井上頼圀先生撰

杜鵑をきゝて

天

東京神田區駿河臺袋町　平田うのえ子

春來れば、鶯の初音のおそきをかこち、春去れば、杜鵑のこゑはやきをのぞむ。なにとなくなつかしきは鶯の聲にして、かなしきは杜鵑の聲なり。梅馨る窓に來て鳴く鶯また妙なる音なれど、杜鵑の聲もなか〳〵にふりすてがたし。ことし六月十八日はじめて杜鵑の聲を聞きぬ、去年よりおくれたること九日ばかりなり。ひとしきりの雨やめば、桐のわか葉かるく風に戰ぎ、軒の忍草もいき〳〵したる夕、まさしき杜鵑の一聲、文かく筆もいつか手になくて。また曉近き空、さながらおしのびたらんやうなるに、折しもあれ一こゑきこえてその影だになし、あはれ二の聲は、たが夢路にかいりけんよ。あはれ鵑ちぎれてよろづ思はするは、かなしき杜鵑の聲なりけり、またしても思はるゝよ故郷の空

地

和泉國泉北郡深井村　福原菫子

夕つ方よりは、ふりつゞきたる皐月の雨も、おとなくはれて、花たちばなのかをりしたゝる許り、木々の若葉に露ちりて、見るからに涼しげなり、廿日あまりの月は乙女子のさし櫛がほど、はづかしげにさし出でたる、其景色のをかしきに、ほと

とぎすの一聲初音をもらしたる、あはれと云ふも中々なりや。されば古より此鳥を種として、歌に文によみ、綴りて、今に至るまで風雅の友としてもてはやすにぞありける。學びの道を辿るわが身もいでや、此杜鵑の初音に優るやう、新らしく進み行く世の道を修め、はた智識を磨かばやと、獨ごつ間に、はやしの〻め近くなりにけり。

人

下谷區徒士町三丁目三十三番地　岡田春子

降り暮したる梅雨のやう〳〵はれ渡りて、青葉に結ぶ白露の光りいと涼しきに、折柄さしいでたる月かげ、庭の橘の花にかをりて、いひしらず床しき宵なり。花そめ衣ぬぎかへし頃より、いつしかとまち渡りつる杜鵑の、一聲もきかぬ事の、いと口惜くて、いでや今宵こそはと思ひつ〻、はしちかういで〻、文などくりひろげつ〻、まてども〳〵さるけはひもなし、かくする程に、夜もやう〳〵ふけゆきて、あたりはいよ〳〵靜かに、月はますます〻み渡りぬ、さるにても心なの郭公よ、かくまでにまちわぶるものをなど、ひとり打ちつぶやけど詮なし。いでや眠につかんとふしどに入りたる折しもあれ、一聲高くなのりいでたる、げに嬉しともうれしくて、急ぎねやの戸ひきあくれば、哀れいづちにけん、かげだに見えず、くまもなくはれわたりし空さへ、いつしかかきくもりて、雲まに見ゆる月の光り、いとかすかなり。

東京　篠田圓子

おのれは有明の月には聞かず。花橘の上にはきかず。さつきやみに行き迷ひてたどる山路にはからずも、二聲三聲。其の聲のさやけさは、有明の月影よりも清く、其の音のゆかしさは花橘のかをりよりもなつかし。あはれま〻になるものならば、これ畜ふる器に入れて待てどもきかぬといふ都人のつとにしてましものを。

ゆきくれてたどる山路にうれしくも
しるべがほしてなくほと〻ぎす

東京　山本梓子

去年はいと〻く聞つれば、山里めきたる住家のなかしきよしなどほこりかに、みやびの友許云ひやりしを、今年はいかにこ〻には初音聞たりと、魁せられて、いと口惜う、さみだれくらす夜なよなの、伊豫のゆげたの數とのみ、つもり行を、なげきつ〻、あるに、一夜つれ〳〵なる雨の音を友として、世にも妙なる聲つきもて、かきなされたる、枕草子よみふけりて、あしろの屏風みくりのすだれなかしきさまなど、思ひやる折しも、昔を今に忍びたるにやあらむ、軒うつ雨の音にもまぎれず、さだかに聞ねたるは、待

ちにまちたる時鳥なり。あなうれしやと、窓うちあけて、見たれど、あやなき空のいつこともわかず、されは、一聲聞つるうれしさに、いて友がり告やらむ、文かき終るまでに、今一こゑきかせよと、筆とりぬ。ともすれば、さしおきて、耳そばたてつれど、立花の花ちる里にやまとひ行けむ、遠寺のかれのみ、おぼつかなう淋しげにひゞきわたりぬ。

肥後　徳永廣子

百千鳥さへつる春もなりすぎて。青葉しげれる山の井の清水むすびて。

朝夕にわびしき事のそが中に。すだく虫の音はいともうれしき山里の今日このごろはひるの暑さも夕かぜにわするゝばかり心ちよく。山の端ちかうさしいづる。月の光のきらめくもいとなづかしく思はれて。月になごりを惜みける。なりしもさやかにいづごとも定めず名のる。杜鵑あな初音やとうれしさにあなたこなたをみやれども涼しく。ひたてらす月影にそよふく風の音のみ。妾のみゆるよしもなきに。ひたすら今一聲と思へども。しづの處女の心をば。なにとてつげんよしもなく。古人の音の樂もげに身にしみて。誠やとしのびてはかひなき事の口惜しくて。くりかへしくりかへし。ひとりごちつゝ曉もあかぬ心の樂しくもいとかひなしや

東京　杉田繁子

日かずさへ、忘るばかりに、ふりつゞきたる、梅雨の空も、今日はなごりなくはれ渡りにたれば、うれしくいそいそとして、日暮にけり、家の子などつどひて、今夜は十日あまりの月ならんと、かたらふに、こよみとり出して、ひらき見るに、十三日なればめづらかに、月の面もながめんと、竹のすの子とり出し、庭におりたつ、松の木の間にさしのぼる光りの、いとたぐひなければ、皆よびよせ、つどふほどに、いかなる雲間よりもらしけん、郭公の聲、いとかすかにきこゆ。きゝたがへしにかと、思ふに、又二聲三聲、我上なる空を、なきゆくに、うれしさかぎりなくて。

大空にあみうちかけてとゞめまし
　いましばしなけ山郭公

かく、思はず口ずさめど、なきつる方をながむればと、いひけんやうに、月ばかりのこりて、かひなき鳥にやと、にくうさへおぼいてなん。

長野縣　松澤まつ子

一しきり、あつさ流しゝ、夕立の空、名殘なく、晴れ渡りて、山の端高く、さし出でたる月影ことにすがすがしきぞ中々に、物思ふつまとぞなりぬる、さるは、なきもいでぬ、ほとゝぎすの、いとど聞かまほしうてさても幾夜かされけん。さはれ己がねせ歌よまんよりは、折にふれたゝ古歌どもこそよからめとて、くり返しくり打ずんずる程に、おばしまを、渡り來る風のまにまに、ねならぬ香りおこすと共に、嬉しや空にすみたる、二聲三聲、アナとばかり心もそらになりつ、ひたぶるに何處ぞ何處と、あくがれつるに。燈の光かすかに、もれて、竹のあみ戸したる、草の家の生垣に咲きみちたる卯の花の雲にまびれつゝなのるなりければいと嬉しうて、ときめく心を、おさへつゝ、耳かたむくるに、奥の方より、「コロリンコロリン」とばかり琴の音の聞ねて、いひしらすあはれにゆかしうて。よしや垣の一重に身はへだつとも、心は同じあるじの君と諸共によもすがら、めではやさんとさへ思はるゝぞかし。

東京　笠原玉城子

東の空に、横雲のほの〲と、かゝりたる明かたは、さらにもいはず、またじとおもへばと、いひけむやうに、村雨のもよほし顔なるも、ふりすてがたき、そらたのみにて、一聲もがなとまちわたるほどに、まがきのうの花橘の、さかりと見しも、いつしか雪と積り、ぬるひかずに、今はとおもひ絶たる、まゝにつれ〲と、机によりゐて、ふみよむよひのほどに、郭公のさやかに、なきて過行、あはれと立出て見るに、影だになし、ゆふづきの光りに見ゆる、山のはのみれたくて、

どゞめぬぬ聲のゆくへや弓はりの
　つきのいかにしあなたなるらむ

猶ひと聲の、きかまほしきにやがておきあかすになむ。

肥後　田代艶子

父君がれて、おぼしたて給ひつる、鉢の朝顔の端近う列へあるに明日咲かてつぼみとも、よみつゝうからやから、打つどひて、月まち居れば、やがて、青葉がくれにねがほみせたる、いはん方なし餅をつくてふ兎はいづこ、教へ給はれと幼き弟のいへは、音にきく月の桂はいづこならんと、又妹のつぶやくに、打興しつゝ、空打仰ぎ、のゝしる程とに、かすかに、一聲もらしたるは、いつかはと、なつかしがりし、杜鵑の初音なんめりと、心いらたつに、花たちばなの香りだになき、我軒ちかう、又も二聲、三聲、名のりたる、いと〲うれしや、歌にまれ、文にまれ、杜鵑の聲、しか〲と事々しう、物しこそすれ、あはれ、一度だにきゝし事なき此初音よ、けに千金にも、かへがたう、思ふにこそ、さるは、あなかちに、杜鵑の聲の、しか、こひしきにあらし、只おのれの心に、わたかまりし、やましさの、今よひ、こゝに、きゆにたれば。

肥後　田代綾子

ふりつゞく梅雨いと、ものうくよむふみも、いつしか文机に、さしおかるゝなりしも、軒つとふ玉水の音にも、まぎれで、さだかに、きこねしは、血になくてふ杜鵑の聲なりけり、あな、めづらしと、窓おし開けば、はや影だに、見わかぬぞ、いと口をし、そもこの杜鵑は、歌に、文に、よみたゝへらるれと、たゞあかぬ心地せらるゝは、なのるより早く、過きゆきて、又一聲だに、きゝ得ぬにそありける、されどよく、しはしたに、とゞまらぬをもてかへりて、世に、もてはやさるゝなめり、かの百人一首に「ほととぎすなきつる方を眺むれば只有明の月そのこれる」と、ある如くげに、杜鵑ばかり、聲の急なるは、あらじなど、打よろこぶほどに今まで、ほのくらかりし、庭のけしきの、いと、明らかに、なりぬ、とみれば、ふりにし雨．やう〲晴れて、さし出たる、月かけの、おぼろに、照らせるなりけり。

廣島　戸川ひさよ子

青葉繁れる夏山の、卯の花垣の下を行くに、月暗くして、道わかず。仰いで空を見れば曉の星かげ、三ッ四ッ二ッ。杜鵑、一聲帛をさく聲して初音、洩して過ぎ行く。山際の月影、せめてはてらせ、泣く杜鵑の聲のみして其の姿は見ねわかれば、殘月一聲啼血の痕杜鵑雲恐處を知らず。有明の月にほふ、吾が庵の卯の花垣の下陰に、山杜鵑鳴きにけり。かつて、ある花や、花の香を惜みし、風雅人も、此の頃の、清く血に啼く、一聲には、忘れ果てけん。

下野　菅沼德子

深山の奥に生ひ立ちし身にしあれど、いまだほとゝぎすの啼くれ

なきゝしものなければ、一度はきかまほしゝと思ふをこゝに何回わらはべなどのうたふに、軒のあやめもかをるなり、はなたち花もにほふ、なりなど、きゝつるまにくほとゝぎすの初音思ひ出づ、世の人づてには何某の森くれかゝる林などにてなきつるをたひくきゝしことのありとかや。妾等は日毎くに通學の折その森や林のかたへを打ち過ぎぬれど、一聲だにもきゝ渡らず。人の物語りするをきくに、啼くればいとはかなげにてあめれど、詩唐うたにはほとゝきす血になくといふ句こそあれこれ一日の中に八千八聲吐血するもいとはず啼くといふか、其の日のやくめとかたとへにありまたやまとうたにも古よりめではやし俳句にも織田とよとみ徳川三公の名にきこえし物などあるやなきゝつればひと度はともかくもこそ。思ひあへる友がきと秋つられて今日の日曜を幸として鎭守の森さして出で立ちぬ。

折しも五月雨なかばのそらくもりがちにてふりみふらずみ、田子のもすそもほしあへぬわびしさ、篠つきたらんごとくふり出しぬ。

嗚呼けふの目ざしゝことも敢果なしとてのと、無情なうらみ、地の卒なきをこらしみつゝ、御社のかたづにうづくまり語り合ふ中に背々と茂りたる杉の木の間にて何か知られどきゝなれぬ聲すなり何ぞと不可思議にしばし案ずる中に、ある友の玉へるには今のはたしかほとゝぎすならんと。

さあればそれより、小耳かたぶけ、もはやなかばやとまちわびつゝありつるに、そのすがたや何方にかとびゆきぬ。

可惜けふ一日のあはれをそへたる、ほとゝぎすの聲も二聲三聲のみ。

あなふみの心もうたの意も、この中にふくめる物か。

數の園

日向　紀藤のぶ子

雨戸打ち叩く五月雨の音にまじりて、何處の空とも分かず、啼く郭公の聲をきゝし我は、書を讀む心も失せていつしか有りし昔の古事など忍び出でゝ、聞ゆるに聞ゆるにて有りき。哀れ古を忍び出だすも涙の種にて有りけるよ哀れ前世に如何なる罪や犯しけん、戀しき慕はしの母上を失ひし我は、しばし悲しさの遣らん方なくて、よゝと計り泣き咽ぶにて有りき。人々よ女々しと笑はゞ笑ひ給へ、如何で、世にも得難き母君におくれ奉りて、ねに泣かで忍ぶることの能ふべき。哀れなる哉涙はつき血汐もかれぬべう覺ぬ。母君の失せ給ひしも、實に今宵の如く、五月雨の降りしきる空に、郭公の二聲三聲音づるゝ折りなりけるよ、あゝ思へば其折り闇より闇に啼き、過ぎし郭公は、母君をさそふこゝろなりしか。隙もる夜風に折りしも机上の燈かすかにまたゝきて、夜はいたくも更け行きぬ又も郭公の二聲三聲、破窓ま近く啼き過ぎぬ。

日向　紀藤榮子

何となくしめり勝なる今日此頃、五月雨はひたぶるに降り續き、軒のしのぶも朽ちぬ計り哀れ。思ひぞ出づる五年の昔、我がなつかしき弟は哀れや十三才と云ふを名殘りにて、逐ひに歸らぬ旅に出でにけり。其折りあはや目をば閉ぢて哀れ長への別に就かんとなせる其臨終に啼き行く郭公の一聲をきゝて、如何なる心や浮びけん。やよ姉君今音づれし怪鳥ぞ我をば迎ひに來ましぬ。いざさらば父上母上、姉上よさらばと計り、愛らしき頰にかすけき笑を浮べて、眠るよと見ねしが其まり、哀れ逝き果てしなりき。實に恨めしき郭公の一聲、我は此世にながらへん限りは哀れ血になく郭公の一聲を忘るべしやは。聞ぬ苦しむ少き胸を押さへて我は靜に落つる軒の玉水に耳を傾くるにて有りき。折しも颯と計り吹き來る夜

風は、又もやもや運び來りぬ、哀れ郭公の三聲四聲。きゝ終らざるにかたへの硯取り出だしゝ、水莖の跡もしどろもどろにかくなむ

　物思ふ身には哀れぞまさりける
　　待ちし夜頃をなく時鳥

肥後　佐々有鄰子

郭公啼つる方をながむれば。たゞ有明の月ぞのこれる。とのうたをおもひいだされつら〳〵今日のけしきを記さんとて。暦とり出て閲すれば。舊暦の閏五月廿一日也。有明の月なれば。よひやみに一聲をと。侍つるかひもなくして。窓の燃れふりそめぬるも。くちをしや。一人文案に向ひ、なにくれの歌帖。横山のごと。とりいでて、このふみ。かの歌と。あさりつかれて。うきわすれ。草をふくも。こゝろやりの。てすさみなるべし。月やう〳〵東方の老松が枝に登り。光を庭もせにはなちて影きらめきぬ。飛かひし螢草葉にひそみ。なきしきりし蛙は。門田の水底に。すがたかくして。こゑほそりゆく。丑みつすぎの夜半なれば。草木もねぶるならんか。しづけき空の色。涼しき風のおとに。ふりさけみれば大空の雲うちはれゆき郭公は。をちかへり窓のと近く啼いでゝ。村きもの心さへすみわたりたる　いはんすへ、せんすへなく。いともたのしき夏の夜にぞありける。

東京　山口ことこ

よつのときさま〳〵なるながめは、有めれど、花はちりなんことを惜ねて心くるしうなど、月は雲にかくれん時をつらふ覺ゆるに、さるをねざめがちなる老のみに、うれしくも二聲三聲を夢のやうにきかせつるは、鳥ともにやなとなつかしうおぼえて

　時鳥なきつる聲に夢さめて
　　ありやけがたの月みつる哉

まきのいたとをあけはなして、明す露よりさきに、しなきいづるになん。

安藝　和住千鶴子

けに長雨の名にたがはで、かきくらし降る雨に門田の早苗いと若やかに、時えがほになく蛙のみぞ、つれ〴〵の友ともなれど、ひねもす、夜もすがらのはざなれば、いつしか厭はしうなりぬ。文よまんも物うし。いざや、雲井の名の子山ほとゝぎすの聲きかんと、五月雨の短夜にねざめして立出でぬ。空くせにや、またく晴れやらず、雲のけしきおどろ〳〵しうもの凄きに、村雲のひまより、おぼつかなく出でし片破月のたゞならぬに、待ちわたりし杜鵑の一聲、雲井にたかくなき渡りぬ。あゝその聲よ、血になくこゑよ。思へばかなし三年の昔、この鳥のなくよごろ、うせ給ひしたらちねや。そのかみ、わがなく聲の、この鳥と、いづれまさらむ。あゝ月は月ごと照せども鳥は年ごときなけども、一度うせしわが母は、ふたゝび、こゝにきたまはす。賴みなき身のいとゞしく、いにし昔ぞ忍ばるれ。賤が心を、慰むるよすがにもと思ひし聲の、今はた、あたらしきかなしみをなしてけり。あな心なのわざや。

東京　中林英子

今宵は雨後の月とて、一しほ美はしく木々の梢に、やどれる露は、玉かとばかり輝りそにひてあり、あはれ、かゝる時にこそ、ほとときすのなくなれ今宵こそきかまほしうと、思ふ折しも空高くなのりて過ぎしは、まさしく杜鵑にぞありける。いふばかりなう嬉し。此鳥こそ、古へより人たに愛せられ、まして、才人才女は爭

ひて歌に記し、文に記しては、樂しむぞかし。然して名も香も高き橘を、そのよすがとなし、なく頃に至れば、必ず求めて、人々の心を樂しましむなり、あはれ、なつかしきは此鳥なり。

出雲　岩倉より子

あれ聞かずや。杜鵑の聲と。敎へ給ひしかど。宵には。きゝもらしつる。口惜しさよ。いつ蚊帳をくゞり入りしか。蚊の二三羽。せめたつるに。目さめては。絕ねかねて。庭の方に立出れば。思ひきや。一聲。木の間をもれて聞こゆぬ。夜な〳〵に聞きもらしつるほとゝぎす今宵はそれがかすかにそ聞く。なと口すさみつゝ。見あぐれば。月は家のみねを白う照らして。長け延びし。稻葉の露燦爛ときらめき。小河の流れ何とやか。さゝやく如く。一刻は一刻と。さゆる月のものすごく。又一聲。其處なる築山にて。ああ故鄕を立出でゝ。旅する人などの。聞かますかば。如何にかなしくきくらんを。親の膝元に有りて。世の波風を知らぬ身も。今宵は何となく。ものをもはるゝぞおかしき。

それよ。去年蠶の下變せし時。虫食に來りしとて。ほとゝぎすを一羽捕りて。叔父君の。給はりし事ありき。未だ。鶵なりしか。わり合に。人馴れて。蠶を二ッ三ッ籠に投げやれば。剃の如き。嘴して。直に食ひ終り。飢き目して眴めし回居りしが。一日二日と過る内に。飼ひ附きし蠶も。皆巣にとり入れしかば。生餌にて飼たらば。如何にと。入れやりしかど。餌には。附かざりし故。離ちやりぬ。先月の。松陽新報に。鶯の飼養方記す有りぬ。ほとゝぎすも。かくして飼なば。能かりしにと。兄君は叔父君に話し。今年もと願み給ひしかど。未だ。捕れざりし。もし去年の鳥籠の儘にて。今宵の月に。ともに啼きなば如何に。あはれさに。絕ざるましき。

東京　柏郁政子

山川、草木、悉く清き、この里水車は、ゆるやかに廻り、いさゝ小川の流れもすみて、凡てのどかなるはこの里よ。わきて今宵は月おぼろにて、白き卯の花の薰りそとすてがたし。思へば。人の世の定めは、げにもつらくもあるか。生れていきて、只すぎて行く我が運命いとも〳〵佗し。はや希望の光は消ねうせて、やり所なくうるむ瞳を、友にはひめて、强ひてゑまひて、御手を取りつゝ、語らふに、いと聞きすて難き聲の、翠葉ごしに、窓ごしに、もれたり。ゆかしの聲にはあれど、今宵の別れの、いたく忍ばれて、なか〳〵に、歌思ふすべもなくて。あゝ又も。もらしぬ杜鵑は。血になくかと思へば、ね堪へずなりて、われかの、さまなるを、友も堪へ兼てや。あゝ今宵こそわれには、かへ難き、境にて侍れ、このいひしらぬ、花の香そこはかとなう、薰じくるこの故里をよそにみて、明日立たむ、我が思ひ、よく〳〵くみはかり給へ、永久の別れにあらぬものを、其のうろみたる御眼、その切なる御さゝやき、いたく胸にせまりて。如何にうき、別れとはいへ、かうかなしく、せずもよからむを。といひもはてず、あとは涙にかきくれて、互にことばなきまゝに、無情か曉の鐘は、はやなりいでぬ。

東京　永井さき子

五月雨の名殘したゝる、靑葉の上に、露の白玉、吹きまく風も、花橘の香に出てたる、いとあはれ深し。久方のみ空に立しうき雲も、いと清く晴れ渡りて、月影ざやかに匂ひ出たる、いはん方なきに、人傳ならぬ山時鳥の、忍び音にうち出てたる、そか心のほど、床しくて、またなくうれし。またしき程より花うつき匂ふ垣、芳はしき花橘の下影に、幾夜か有明の、はかなき影を、うらみし

も、慕ふ心の、あまりなりや。又かれが聲は、古よりいつも、初音の心地ぞするなど、あかぬ思ひの珍らしう、なつかしきを、歌に詩に、もてはやされ、から大和のみやびをの、友となれるぞ、けに幸深き限りなる。かく思ひつゞけては、めづる心の、言の葉もがなと、思へとも、はいひ出ぬ事の、くちをしさよ。あはれ、さかなき身なる哉と、獨りごちのみ、くりかへさるゝに、月のかげやうく、うすうなりて、あけやすきよを、かこつになん。

大阪　桝田鉦子

さ月來ば、鳴もふりなん、未しき程の初音を社と、菟山に物し、昨日は清流に棹して、河鹿を聞しが、今宵は曉山の一聲も哉と流に沿ろ龜石樓に、旅宿りしぬ。浴後樓上の欄に凭り、見渡せば菟川清流、叜元に簑の子を透り、塔の島、龜の石等、眼下に見え、近く宇治橋、精藍の鳳凰堂を望み、遠く天が瀬、榧川を見さけ、早瀬を下す柴舟、いと面白し、茂りあふ汀の若葉、瑞山の翠は、波間に影を寫し、堤のうはゝ、紫深き棟、花散て、水より通ふ風芳しく、鳴しきろ河鹿の聲、夕浪に競ひ、雲井の月は、流に映じて、黄金の綾を織り、草叢に飛びかふ螢は、芦屋の里なして、更行儘に、澄み渡れる桂の光に、催されてや、二聲三聲、名樂と聽けば、彼方此方の、山河にとよみ、靜けき空に響きて、すゞろに浮び出月の、嘶きも、かくやはと、轉た古の面影さへ、すゝろに浮び出て、いと偲しうも、所から哀れもまた中くなり。心行儘、歌枕とうでゝ、徒にやはと、思ふ物から、夢の浮橋いつ渡りけん、ふと驚けば、月西山に沈みて朝露深く瑞山を埋み、早瀬の波の聲、さやかに浮び出たる浮島槇の島、今更の樣なり。橋畔に釣たろろ柴舟、さながら畫中の人と成て、川戸ほのくと、明はなれ行空のけはひの、言ひ知らず哀れなるに、時ぞとや名のる曉山の杜鵑、似る物なく、今日ひと日も、さしこもりぬべき晨なりけり。

八月以後 女鑑兼題豫告

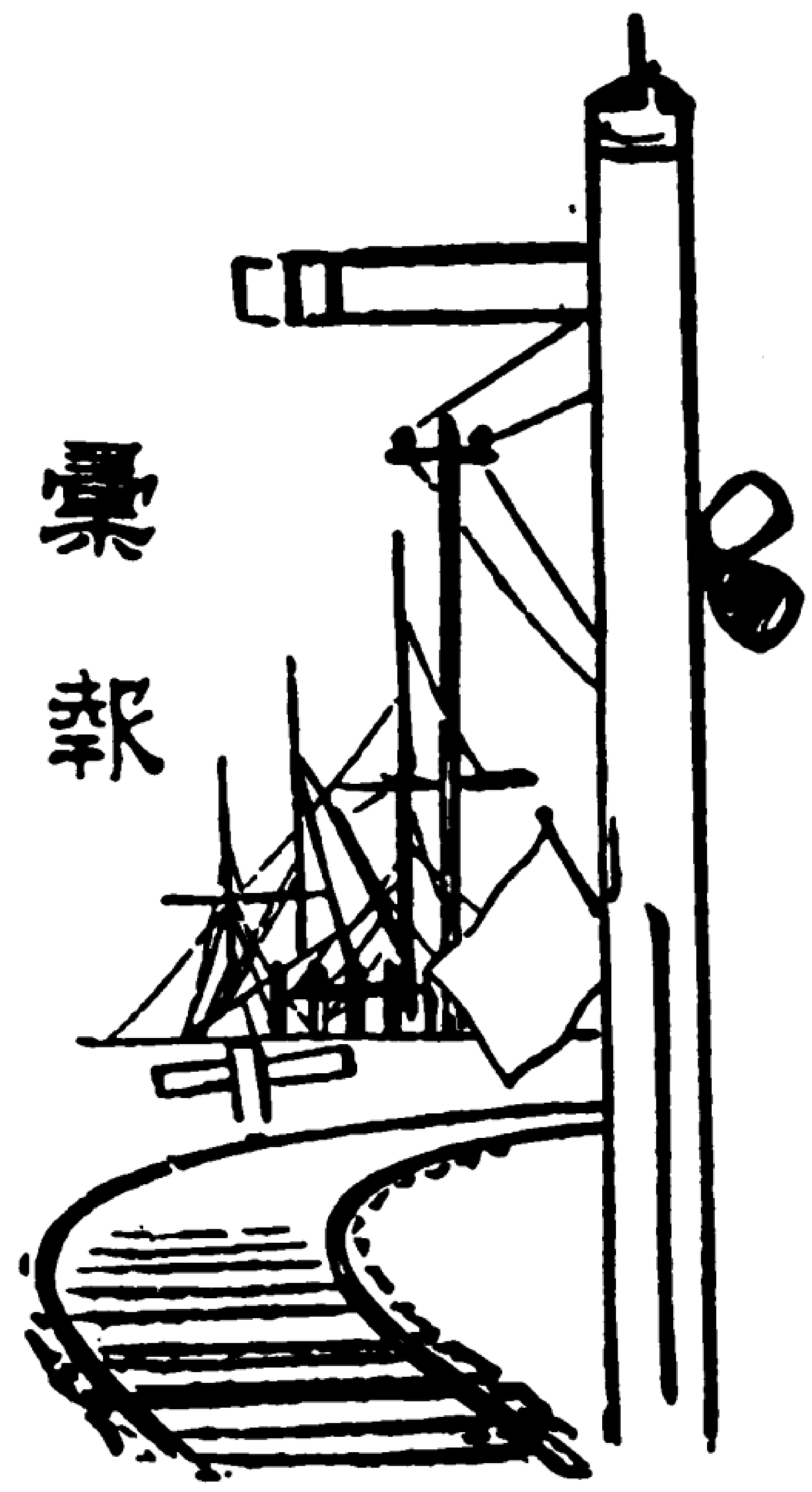
		歌	文
八月	一日	海邊螢	海水浴日記（三日間）
	十五日	朝顔	歸省
九月	一日	初秋虫	思ひを記して女鑑に贈る
	十五日	殘暑	山家に月を觀て記す

注意

一 歌は題毎に用紙を別にし一題には一人一首若くは二首を限りとす上句に一音の漢字一字入れ其他は悉く平假名又は一音の漢字にて認むべし

一 文は毎行十五字詰二十行以内を限りとす必ず楷書を用ゐ字體は鮮明ならむことを要す

一 其他從前の投稿心得を熟讀詳知せらるべし



○皇孫兩殿下の御近狀

迪宮殿下は日夜活潑に御遊戲遊ばされ御辭も甚明晣に、御歩行も中々御達者なりと伺ひしが昨年二月より全く乳人の乳を廢し牛乳のみ毎日平均四合づゝ召さるゝ由尙侍醫の言上に依り獸肉類は御不消化の爲め多く進められざるも魚肉、スープ、パン等は最も好ませらるゝ所にして米飯は餘り多く好ませられず淳宮殿下は矢張り乳人の乳と牛乳とを併用し先月頃より粥をも召され御哺乳量も日増增加の有樣なり玩具の類は多く機械仕掛のものを好ませられ御手添われば御三足位の御歩行は中々に御達者なるが時々御片言を遊ばさるゝには一層御愛らしく覺え參らする由牛乳は毎日一合、乳人は三回宛御乳を進め居れり御誕生後御乳を進め奉りたる中村タイは其後身體に異狀ありたる爲め御暇を賜はり現在御子ミキ(二十)といへる者御乳を進め居れり兩殿下とも毎朝六時には御目覺遊ばされ昨今は御運動の爲め午前は芝、濱兩離宮、小石川植物園、新宿御料地等に成らせられ追々は代々木御料地邊に御運動相成る御豫定なり十一時頃には必ず還御遲くも十一時三十分頃迄には御晝餐を召され午後一時頃より三時頃迄は御寢に入り午後八時ごろ再び御寢に入らせらるゝ由、最近侍醫の拜診に依れば迪宮殿下の御體量は二貫七百八十五匁、淳宮殿下は二貫四百四十五匁に在ますやに伺へり

○兩宮殿下蕎麥を召し給ふ

富美宮、泰宮兩內親王殿下が過般博覽會の御見物に渡らせられ去月二十四日靜岡まで還御相成り

同地御用邸に御一泊あらせられし事は曩に記載し奉りし如くなるが同夜兩殿下には同市隨一の蕎麥屋と稱せらるゝ綠亭の主人に蕎麥の御用を仰せ付ありしかば店主は仰せを畏み齋戒沐浴して調達し奉りけるに兩殿下には殊の外御意にかなはせられたりと思しく夜の十一時頃主人をお呼上になりて御侍臣より一々蕎麥の製造方御下問ありしにぞ主人は面目身に餘り委細畏みて製法、産地など委しく御答へ申上げゝるが同時に翌日の中食の御用をさへ仰せ付けありしかば兩殿下へは裏白細工の提重にいゝいゝゝ茶蕎麥白らんめんを御侍臣二十一名の人々へは折詰めにして奉りたりと云ふ

○興風會の善行表彰（つゞき）

◎大阪市西區南靱南通九丁目岩田長七（四十年）は養父半三とは曾て主從たりし時に當り主家商業の失敗に加ふるに火災を以てし殆ど財産を蕩盡し一家離散の悲境に陷りしを如何にもして再興を謀らんと日夜精勵身を忘れて忠勤怠らず知るもの丶中には他に奉公を勸めしものあるを耳にもかけず益々忠勤を勵みたる結果商機回復の幸運に向ひさては今日の繁盛を見るに至りしなりと去る二十六年主人半三の長女たき女の婿養子となりたるもたき女は痼疾ありて病褥に在り加ふるに養父は老年多病故に氏は父妻看病の傍夙夜商業に精勵すること殆ど二十年一日の如く其行爲の忠誠義俠なる他の企て及ばざる所なれば興風會は白絹一卷を贈與したり

◎大阪市東區大川町後藤安吉（五十一年）中年父を失ひ妹すゑ女を勵まし共に母親に孝養を怠らず明治二　四年妹を嫁せしめたる後妻を娶り僅々二箇月にして母僂麻質斯病に罹り身體の自由を失ひ病褥に就く偶安吉は不幸にして妻を離別し、豊か

ならざる家計を維持し日夜母の看護を勤め暇あれば他に雇はれ醫藥の資を得る等殆ど寢食を忘れ爾來今日に至るまで再び妻を娶らず未だ曾て酒色に耽らず能く老病の母に奉侍し赤誠以て其意を慰め晝は母の左右に侍し夜は其安靜を窺ひ隣家に託して他に雇はれ勤儉能く家計を持續し十年一日の如く本年五月老母死去の後は哀悼止むなく旦暮墓參に怠らずといふ與風會は褒賞として白絹一卷を贈りたり

◎大阪西區京町堀通五丁目栗谷菊藏(四十五年)は十五の年栗谷品三方の雇人となり忠勤怠らず一意主家の隆運を祈り勞働に服し主家の利害に關する事は大小を問はず身を忘れて之に當り同家が銃砲火藥店を創設するや菊藏は内外の商務を一身に擔ひ東奔西走寢食を忘るゝに至り爲に商運の隆盛を見るに至り主人は女を以て之に配し養子として別に家を興さしむ栗谷家の今日あるその力多きに居るものなるが菊藏は猶昔時の身分を忘れず常に謙遜辭讓毫も邊幅を飾らず質素勤勉夙夜主家に在りて幼主を補佐し業務を勵むこと三十餘年一日の如く實に後世雇人の龜鑑と爲すに足るものなれば與風會は例に依り白絹一卷を贈りぬ

◎ナイチンゲール孃と赤十字社　モデルン、ソサイチー雜誌に曰くナイチンゲール孃は去る五月十五日を以て八十三歲の高齡に達したり同孃は千八百二十年を以てフローレンス州に生れたり其のクリミヤ戰爭の際我が英國の負傷兵等を看護する爲に出發せし時は尙嬋娟たる妙齡の婦人なりき而して今より二年前其の戰場に於ける義俠事業より退きしが爾來鬱々たる人望よりは寧ろ隱遁を爲し居る事を撰めり然れども其の胸間には常に赤十字事業を忘れず其の進歩の爲竊に盡力すること依然

舊の如し同孃の著書及勢力は病兵及負傷兵の看護事業に一新紀元を來しゝ事に付與て大功あるは疑ひを容れず同孃は數年來大に衰弱せり然れども其の卒先して從事せる事業の成績を回想する時は大に心を慰むる所あらん吾人は同孃の永く幸福ならんことを祈り且つ玆に他に向て忠告せんと欲するものあり他なし來年は同孃がクリミヤに於て其の貴き事業を開始せし以來五十ヶ年に相當するを以て世界各國の赤十字社は同孃の大事業紀念の爲に何事をか企て空しく此の日を過ごすこと無かるべし殊に日本赤十字社には此の義務あるべしと信ず日本は今や英國の同盟國たるを以てなりと

○潮田千勢子女史の遠逝

婦人社會に弘く識られたる潮田千勢子女史は偶々二豎の犯す所となり享年六十一にして遂に去二日午後二時二十分自宅に於て溘然逝く人となれり女史は信州飯田に生れ明治十六年の頃潮田健次郎氏に嫁せり蓋し世に多く知られたるは其時の後に在り女史の劈頭公共の事業に志を致したるは女子授産場を興したる事にして洽く女子を誘掖して職なきものに之を授け一向に醜業婦抔邪路に迷ふ者を救はんと努めたり後七八年故ありて閉場するに至りたるも青山學院の如き此種の有力の學校出でたるは即ち同授産場の後身とも見るべきものにして其他多くの公共事業及婦人社界に盡したるの効は世の已に知れる處なり現に婦人矯風會及女子鑛毒被害民救濟會等は女史が會長として着々其功を擧げつゝあり又女史には三男二女ありて長は潮田傳五郎氏二女皆人に嫁し末の息も歐洲に遊學中にあれば今後は多く子を顧み内を慮るの要なきを以て渾身を擧げて其事業に盡さん事を望み本年の春は全國を漫遊して各地の婦人に接し以て一は

矯風會事業の擴張を計り一は舊交を温めて共に効果の全きを得んと準備既に成り將に發せんとして四月中旬俄然病を發し越えて五月一日蓐寢して復た起つ能はず女史は曾て人の知る如く熱心なる姑嫁別居論者にして又其實行者たり子女の教育に意を用ふる亦切にして前年火災に一家を燒きたる時の如きは然も二女の學校に在りて試驗の最中にありければ中座に依りて成績の不結果なるを患ひ寄宿所の自家に強きを幸として遂に其の事を知らしめず能く試驗を了せしむるを得たりと後ちに至りて一家の大事を告げずとて二女の怨む處となりしも此等は子を思ふ賢母の愼着なる平素の覺悟として蓋し美談たるべし女史は又禁酒問題廢娼問題に全力を濺ぎて着々として緩まず現に醜業婦及無辜の女子を收容して誘掖陶化せん爲め慈愛學校なるものを建設し未だ竣工を見る能はずして空しき人の數に入れり其死に臨み靜然自若毫も病床の苦痛を訴ふる事なし常に枕邊に聖書を誦せしめ或は讃美歌を聽き聊も其紊る樣なくして永く靜かに眠むれりと病中所感の文中左の詠歌あり

たふとしや神のみまねきまちつゝも
　　おもき病を養ひにけり

葬祭は七日午後一時銀座會堂に營みたる筈なり

○十一歳の孝女

生みの父母にさへ心配かけて世の笑はれものとなる娘共の少からぬ中に是はまた珍しき孝女なり埼玉縣北葛飾郡松伏領村大字上赤岩の飯島和三郎の長女みき(十二)といふは去る二十八年一月より同縣南埼玉越ケ谷在大相模村大字東方百二十二番地農中村なかの養女となり行々は同人長男金太郎(廿一歳)の嫁と定められしに同家は元來血統よろしからず金太郎は其頃より聞くも忌はしき癩病を發

して外見醜くなるのみならず三十年中には床に就くに至りしより母なかの心配いはん方なくさまざまに手を盡して介抱する中あはれやなか自身も癩病を發して親子共に枕を並ぶるに至りぬ此時みきは八歳の幼女なりしが露厭はしき顔もせず二人の癩病人を左右に置きて藥取の使より食事の世話汚れ物の洗濯まで看護婦も及ばぬまで取賄ひけるに一昨年十二月五日金太郎は遂に死亡せしにぞ母の悲みは一方ならずために病も重りたるよりみきは一生懸命になり是非共母の命のみは助けたしと或は慰め或は勵まし夜の目もあはぬまで看護せるが數年の坐食に近來は家計も覺束なくなりしよりみきは看護の暇に縄を綯ひ繭の糸挽をなして之を補ひ居るを實父母は見兼ねて夫とすべき人も已に亡くなりし事なれば此方に歸りては如何と勸めしかど恩あり義理ある病人を此まゝにしては措かれずとて應ぜざる樣十一歳の少女とは思はれずとぞされば近隣の人々も皆嘆賞し越ヶ谷警察署長淺見勘助氏も事實を取調べて具申したるより去月二十日木下埼玉縣知事よりみきに金五圓を下賜して其善行を賞したりとぞ

○ソツセル　英國に於て新に發明せしソツセルは衣服其他の洗濯用として最も優等の粉末にて又た身體洗滌料として使用するも皮膚を傷くるとなしと云ふ定價は一包十五錢にして京橋區三十間堀三丁目三友商會より發賣す

○錦表　貴婦人用履物の新意匠として尾張町二丁目香取屋支店にて發賣する錦表は臺灣パナマを原料として製したるものにて美麗なるに加へて品質又甚だ堅牢なり又同表にて製したる錦草履は貴婦人令孃方園遊會などの用として最新の流行品なりといふ

○女學生白鉛禁止會　報知新聞社は兼て女學生白鉛禁止問題に付きて諸家の意見を紙上に掲載せしが過日女學生白鉛禁止會なるものを起し其趣意書と規則を共に發表したり會則は左の如し

女學生白鉛禁止會規則

第一條　本會は女學生の白鉛を禁止し其惡風を矯正するを以て目的とす

第二條　本會は女學生白鉛禁止會と稱す

第三條　本會員を分て名譽會員、贊助會員、正會員の三種とす

一、名譽會員は女學生の白鉛禁止を贊成せる學校職員及び名望ある貴女紳士に限り本會より推選す

一、贊助會員は自家姉妹の女學生たる間禁粉を實行せしむる父母兄姉及び禁粉主義を鼓吹して社會矯風の道に資せんとする人に限る

贊助會員として入會せんと欲する人は其住所氏名職業を明記して申込まる可し

一、正會員は自ら禁粉を實行せる女學生に限る

正會員として入會せんと欲する人は其所屬學校を明記して申込まる可し

第四條　名譽會員中より評議員若干名を推選す

第五條　本會は本部を東京々橋區三十間堀報知社に置く

第六條　本會に關する報告は報知新聞紙上に掲載す

○獨逸週報の日本婦人評　日本國は數十年前鎖國主義を取りし頃其文明の程度は支那と相離ること遠からざりしが今日に至りては卒然歩を進め西洋文明諸國と列を同ふするに至り年を追ふに從ひ日本國民の風俗習慣は公私を問はず歐風を用ひることとなれり歐洲人は日本人と會合する交際場裏の如きに於ては兩國民の間一の區別なく全く對等の交際を見るに至れり近く例せば上海に於て日本國皇帝陛下の五十四天長節に於ける宴會の如きは之を證して餘りあり又文明諸國の常習たる婦人の活潑なる動作も日本に於て見ることを得べし即ち歐洲に於けるが如く婦人の勢力は漸次公共事業の上に其手を擴げ益々之れを蠶食せんとする傾向あり聞く東京に於ける大日本婦人衛生會の如きは純乎たる婦人の手に成り既に二千の會員を有し總裁には小松宮妃殿下を頂き衛生上目ざましき動作を營む由且同會は毎月一回講話會を公開して衛生思想の普及を計り且每月一回機關雜誌を發行すると云ふ云々

○新刊批評

▲理學界（第一卷第一號）　理學界、實驗、學術界新發報、理學の應用、發明之歴史、問題解釋等ありて高等師範敎授及び理學士等の起稿に成るもの多し理學研究上必要の雜誌なるべし（定價十五錢神田裏神保町六理學界社發行）

▲富の礎　米國オクスチンスイツト、マルデレの著書を譯したるものにて歐米時論の臨時發刊とせるものなり勤儉、富、成功などの問題を平易に説述したれは讀むで面白きのみならす又有益なるものといふべし（定價十五錢京橋區高代町八博學堂）

▲敎授界（第一卷第二號）　小學校敎授上の參考として發兌したるものなるは表紙にペスタロヂイの肖像をあらはせるにても知らるべし敎授及訓練、敎案實科敎授、体育及音樂、實業科などの目ありて小學敎員敎授上稗益を與ふること少からざるを知るなり（定價一册十三錢神田西小川町一ノ一研成會發行）

▲賴光四天王　冨山房より發兌する少年世界文庫の第十三篇なり羅生門の話も面白く冠者丸の話もまた面白し（定價十二號神田裏神保町九冨山房發行）

▲水滸傳物語（上卷）　これまた冨山房より發兌する通俗世界文庫の第四編にて支那四大小説の一なる水滸傳を講釋体に極めて簡易に記したるものなれば午窓の友として尤も興味あるものといふべし（定價貳拾錢發行所前同）

▲日本女子大學校學報　卷首西園寺侯爵の題辭を揭げ次に創立委員及校舍寮舍の寫眞畫を挿み發刊辭祝詞成瀨校長の時弊論あり又岩崎男爵、大澤博士、廣岡淺子、成瀨校長、大隈伯爵澁澤男爵の講演を載せ坪井、元良、井上三博士の科外講演之に次ぎ文苑欄又は授學生の美文譯文新体詩短歌及雜錄彙報校報あり同校の主義方針を始め其過去と現在を知るには究竟の書なり（定價十五錢にて東京堂發賣）

○新刊書目

通俗宗敎談	第一號	京橋區築地二丁目	同發行所
女子の友	第一四一號	神田區鎌倉町	東洋社
帝都書籍新報	第七號	日本橋區本銀町	帝都社
東京感化院月報	第廿二號	豊多摩郡澁谷村東京感化院内	羽澤文庫
通商月報	第八八號	大阪北區堂島	大阪商品陳列所
婦女新聞	第一六四、五、六號	牛込區東五軒町	婦女新聞社
藥石新報	第四六七號	大坂西區江戸堀下	藥石新報社
日本婦人	第四四號	豊多摩郡澁谷村	帝國婦人協會
体育	第一一五號	麹町區飯田町	日本体育會
眞宗法話集	第七年三編	三河國幡豆郡西尾町	眞宗會出版部
音樂の友	第四卷ノ三	北豊島郡巣鴨村	樂友社
東京經濟雜誌	第一一九〇號	京橋區彌左衛門町七	經濟雜誌社
中央公論	第十八年七號	本郷區駒込西片町	反省社
敎授界	第一卷一、二號	神田區西小川町	研成社
商家の友	第二六號	京橋區南鍋町	時事新報社
家庭の友	第一卷第四號	神田區南甲賀町	内外出版協會
Commercial Guide.		横濱	ボイド、ケイ、エシドコンパニー合名會社
女子運動法	全一册	京橋區銀座一	大日本圖書會社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

著者	書名	定價	郵稅
小澤政胤編著	慶長以來 國學家畧傳	定價壹圓五拾錢	郵稅拾錢
大林弘一郎著	再版 中等國文學史	定價六十錢	郵稅八錢
大宮兵馬著	國語漢文假字遣ひ法	定價十八錢	郵稅二錢
指原乙子著	女子文章軌範	定價三十錢	郵稅四錢
華族女學校編纂	國語假名遣ひ一覽	定價十二錢	郵稅二錢
內務大臣官房編纂	明治國民龜鑑	定價二圓	郵稅十錢
高瀨眞卿著	學校家庭 修身一夕話	定價 上六十錢 並三十八錢	郵稅 上八錢 並六錢
高等師範學校附屬小學校編纂	茗溪叢書 學校生活	定價二十錢	郵稅四錢

東京 株式會社 國光社 發行

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

山崎忠和著
再版
日露の英雄
定價二十錢　郵税二錢

宮崎滔天著
第八版
三十三年之夢
定價三十三錢　郵税六錢

弘田正郎編
再版
豪吟集
定價八錢　郵税二錢

村上濁浪述
再版
鐵血宰相語錄
定價三十錢　郵税四錢

宮崎滔天著
第三版
狂人譚
定價二十錢　郵税四錢

高橋正熊
松本爲之　共著
再版 中等
法制經濟教科書
定價六十錢　郵税六錢

平田東助
平塚湯次郎
湯川寛　共譯
再版
商工經濟論 全二冊
全部定價一圓八十錢　郵税十五錢

岡勇次郎著
日本米穀之將來
定價三十錢　郵税六錢

東京 株式會社 國光社 發行

明治三十六年七月十五日發行　毎月二回一日十五日發行　第拾參年第四拾號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

